

石川県小松市郷谷川・滓上川流域の方言

著者	加藤 和夫
雑誌名	小松市立博物館研究紀要 = Memoirs of the Komatsu City Museum
巻	34
ページ	1-95
発行年	1998-03-31
URL	http://hdl.handle.net/2297/35214

石川県小松市郷谷川・滓上川流域の方言

加藤 和夫

1. はじめに
2. 尾小屋町方言の概要
 - 2.1 音韻
 - 2.2 アクセント
 - 2.3 文法
3. 尾小屋町方言の語彙
4. 尾小屋町方言・松岡町方言の待遇表現
5. 尾小屋町方言の挨拶表現
6. 丸山町方言・中海町方言の自然談話
7. 郷谷川・滓上川・大杉谷川流域の方言分布
8. おわりに

1. はじめに

本稿は、筆者が小松市立博物館方言調査委員会の委託を受け、1996（平成8）年度より5ヶ年計画で開始した小松市全域を対象とする方言調査の第2年度目の調査報告である。小松市内を鍋谷川流域、^{なべたにがわ}滓上川流域、^{かすかみがわ}大日川流域、^{だいにちがわ}郷谷川流域、^{ごうだにがわ}大杉谷川流域、^{おおすぎだにがわ}梯川流域、^{かけはしがわ}日用川流域、^{ひようがわ}日本海沿岸域、旧小松町域、旧北国街道沿線域の10のエリアに分け、5年間で全域の調査を完了するというもので、初年度でもあった昨年度は、まず大杉谷川流域を対象として調査を実施した。その結果の概要は加藤和夫（1997）「石川県小松市大杉谷川流域の方言」として本紀要第33号で報告した。今年度は、その大杉谷川流域の東と北に隣接する郷谷川流域（一部大日川流域を含む）・滓上川流域を対象として調査を実施した。その地理的位置については図1「調査地域図」を参照されたい。図中の調査地点名にふりがなを付けた地点が今年度の、ふりがなを付けていないのが昨年度の調査地点である。

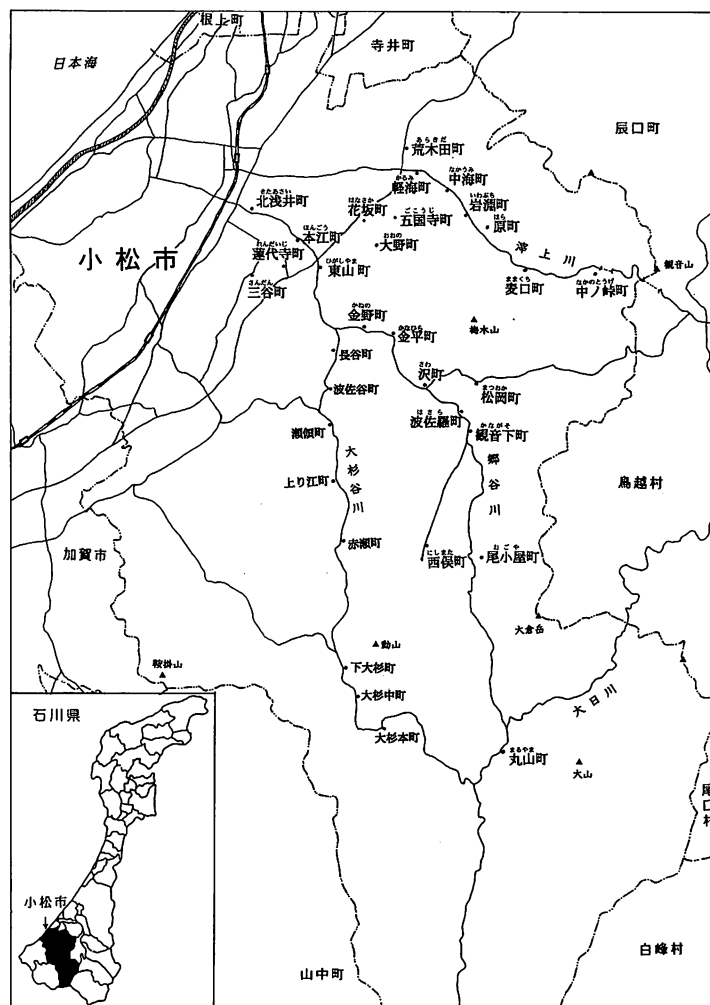
今回の小松市方言調査では、伝統的方言の記録・保存の観点から、毎年1～2箇所の重点調査地点を定め（昨年度は大杉谷川上流域の大杉町、今年度は郷谷川上流域の尾小屋町）、高年層話者を対象に音韻（アクセントを含む）・文法・表現法等の体系的記述と方言基礎語彙（約2300項目）の記述を行なうこと、あわせて自然談話資料の録音と文字化を行なうこと、また市内の方言の地域差を明らかにするための言語地理学的調査（調査項目約100項目）を5年間で市内100地点余りの集落で実施し、その結果を言語地図（方言地図）の形で示すこと、さらには、方言変容の実態を明らかにするために市内中心部において世代別・性別の多人数調査を実施することを目的としている。

小松市は図1左下図のとおり、石川県の南部に位置し、北を根上町、寺井町、辰口町、東を鳥越村、^{ねあがりまち}尾口村、^{てら い まち}白峰村、^{たつのくちまち}南を福井県勝山市、^{とりごえむら}西を山中町、^{おぐちむら}加賀市に囲まれている。面積は371.13平方キロメートル。東南部の山間地域から中央の平野部、さらには日本海に面する海岸部と、変化に富んだ地勢を見せる。石川県内唯一の空港である小松空港を擁し、石川県の空の玄関としても重要な役目を果たしている。人口は108,883人（1998年3月1日現在）である。

川本栄一郎（1983）などに載る石川県の方言区画図によれば、石川県内の方言は概ね^{かほく}河北郡と^{はくい}羽咋郡の境でまず北の能登方言と南の加賀方言に二大区分され、加賀方言はさらに金沢市を中心とした北加賀方言と松任市・石川郡以南の南加賀方言に分けられる。小松市方言は、その南加賀方言の中でも、加賀市と江沼郡を含む湖南方言に対して松任市・石川郡・能美郡の方言とともに湖北方言に含まれる。

さて、今年度の調査は小松市東部の郷谷川流域（一部大日川流域を含む）と渚上川流域を対象として、筆者が金沢大学教育学部で担当する「国語学実習・方言論実習」の一環として1997（平成9）年8月28日～31日に実施した。調査担当者は筆者のほか、金沢大学大学院修了生の中村朱美、高瀬由美子、金沢大学大学院教育学研究科2年生の屈京紅、同研究科1年生の高木ともえ、田中有希子、中居望、金沢大学教育学部4年生の田中剛、野村真一、山田睦、同学部3年生の大滝優子、児玉聖子、佐々木結実子、田中鉄哉、松儀ゆかり、村上西郁、同学部2年生の高谷直樹、丹保みどり、諸谷志奈子、金沢学院大学文学部2年生の佐々木奈紀、山田恵子の計21名である。このうち、大学院1年生の高木ともえ、田中有希子、中居望、学部3年生の大滝優子、児玉聖子、佐々木結実子、田中鉄哉の諸君には、本稿執筆にあたって、談話資料の文字化、基礎語彙・言語地図資料の整理等で多くの協力を得た。記して感謝する。

図1 調査地域図



今年度調査では、8月28・29日に尾小屋町において方言基礎語彙をはじめとするいくつかの体系的調査を行い、さらに30・31日に尾小屋町を含めた24集落（尾小屋町、丸山町、西俣町、観音下町、波佐羅町、松岡町、沢町、金平町、金野町、東山町、本江町、三谷町、蓮代寺町、北浅井町、大野町、花坂町、五国寺町、荒木田町、軽海町、中海町、岩瀬町、原町、麦口町、中ノ峠町）について言語地理学的調査を実施、あわせて丸山町と中海町で談話資料を収録した。

今回重点調査地点とした尾小屋町は、かつて鉱山（銅山）の町として栄え、尾小屋鉱山は日本の3大銅山に数えられた。明治11（1878）年に露頭が発見されて以来、大正期の全盛期をはさんで、昭和37（1962）年に一部閉鎖、昭和46（1971）年に完全閉山となった。その間、大正8（1919）年には小松市中心部から尾小屋までの尾小屋鉄道が開通（昭和52（1977）年廃止）し、全国から多くの鉱山労働者が集まり、常設の芝居小屋ができるなど繁栄を誇った。その点、言語的には小松市内でもやや特殊な状況にあり、方言状況の把握が必要と考えた。

話者の方々の条件としては、70歳以上で現在住んでいる集落の生まれ育ち（いわゆる生え抜き）で

あること、外住歴があまり長くない（５年以内）ことを原則とした。以下に、今回の調査にご協力いただいた話者の方々の氏名（敬称略）、性、生年、地点（在住集落）を記す。長時間にわたり調査に御協力下さった合計110名もの話者の皆様、ならびに話者の方々の紹介等でお世話になった地元関係各位、さらにこの調査を裏方として支えて下さった小松市立博物館方言調査委員会委員、同博物館専門委員諸氏に心より感謝申し上げます。

話者一覧

〈氏 名〉	〈性〉	〈生年〉	〈地点〉
井山 貞子	女	S 3	尾小屋町
岡崎 久雄	男	S 6	尾小屋町
川上 勝利	男	T14	尾小屋町
川上とし子	女	S 5	尾小屋町
川上 義次	男	S 4	尾小屋町
川村みさを	女	T 7	尾小屋町
喜多 重孝	男	T 7	尾小屋町
菅波 芳子	女	S 5	尾小屋町
谷口 嵩	男	T15	尾小屋町
谷口 富子	女	S 4	尾小屋町
谷口 正夫	男	T11	尾小屋町
谷口外喜枝	女	T14	尾小屋町
橋本 良平	男	T13	尾小屋町
橋本百合子	女	S 4	尾小屋町
堀口 俊恵	女	S 3	尾小屋町
道畑 松男	男	S 4	尾小屋町
道畑 薫	女	S10	尾小屋町
山本 三郎	男	S10	尾小屋町
掛川 信義	男	T15	尾小屋町長原
掛川恵美子	女	S 5	尾小屋町長原
胡摩 菊枝	女	T11	尾小屋町長原
日光 愛子	女	T13	尾小屋町長原
山本 愛子	女	S 7	尾小屋町長原
久保 すゝ	女	M43	丸山町
林 金策	男	T 8	丸山町
石倉 佐久	男	T 8	西俣町
下道 春子	女	T14	西俣町
清水三左衛門	男	T 3	西俣町
橋本 幸	女	T 9	西俣町
木本 秀信	男	T 9	観音下町

〈氏 名〉	〈性〉	〈生年〉	〈地点〉
谷口 俊子	女	T11	観音下町
辻本 善三	男	M37	観音下町
辻本 多美	女	T 3	観音下町
橋本 みよ	女	T 4	観音下町
川下 芳子	女	M42	波佐羅町
宮 庄衛	男	T 8	波佐羅町
宮 澄子	女	S 2	波佐羅町
宮 宏	男	S 2	波佐羅町
松崎 政吉	男	T 6	松岡町
松崎 ハス	女	T 7	松岡町
川南 俊	女	T14	沢町
下中庄三郎	男	T 5	沢町
田中 ゆき	女	T 6	沢町
四ツ目礼治	男	T15	沢町
伊賀 光臣	男	T 4	金平町
木下 良雄	男	T10	金平町
坂本 きよ	女	T 7	金平町
関戸 敏子	女	T 6	金平町
村田喜幸一	男	T13	金平(金野)町
森田 隆志	男	T 9	金平(金野)町
石黒 正子	女	T10	金野町
笹原 きく	女	M34	金野町
寺田喜次郎	男	T 9	東山町
水田 サト	女	M44	東山町
山本 利男	男	T10	東山町
吉田 朝子	女	T14	東山町

〈氏 名〉	〈性〉	〈生年〉	〈地点〉
高野 寛威	男	T12	本江町
寺田 佐一	男	T14	本江町
寺田 照子	女	S 3	本江町
本田 幸次	男	T10	本江町
本田 登代	女	T15	本江町
水田 忠博	男	T14	本江町
川端 孝	男	T14	三谷町
岸野久美子	女	T14	三谷町
森本千枝子	女	T15	三谷町
川東 利雄	男	T 9	蓮代寺町
川東 フミ	女	T14	蓮代寺町
宮岸 正治	男	T12	蓮代寺町
宮本 幸雄	男	S 7	蓮代寺町
山本さち子	女	S 5	蓮代寺町
大村キミコ	女	T 9	北浅井町
街道 三郎	男	T11	北浅井町
清水 清正	男	T 6	北浅井町
清水 弘次	男	T11	北浅井町
毛利 ふで	女	T 9	北浅井町
吉岡 とみ	女	T 9	北浅井町
太田 茂子	女	T 2	大野町
丸 武夫	男	T12	大野町
南 利信	男	T 6	大野町
山下 ます	女	T 2	大野町
前田 盛栄	男	T 1	花坂町
高林 茂	男	M42	五国寺町
谷口 春	女	T 7	五国寺町
山崎 一之	男	T 9	五国寺町
山元 きく	女	T 3	五国寺町
中西 愛子	女	T15	荒木田町

〈氏 名〉	〈性〉	〈生年〉	〈地点〉
東出喜美枝	女	T14	荒木田町
南 他作	男	T 6	荒木田町
中西 明	男	T12	荒木田町
伊島 初枝	女	T14	軽海町
奥田 清	男	T12	軽海町
亀田 松雄	男	T 9	軽海町
高林 愛子	女	T11	軽海町
北 浩	男	T13	中海町
北川 久子	女	T 9	中海町
東 幹雄	男	T 8	中海町
山崎 みよ	女	T 6	中海町
川上 俊雄	男	T12	岩渚町
平野 高年	男	T13	岩渚町
宮西 ちか	女	T15	岩渚町
山口 武	男	S 4	岩渚町
山田みさを	女	T12	岩渚町
新度 きよ	女	T11	原町
田中 義正	男	T13	原町
原 末治	男	T14	原町
村中 信子	女	S 3	原町
田中 初枝	女	S 2	麦口町
土田 はち	女	S 2	麦口町
中西 啓人	男	T12	麦口町
林 与作	男	T12	麦口町
岩本ふさ子	女	S 4	中ノ峠(嵐町)
木藤 外次	男	S 4	中ノ峠
宮村次郎八	男	T 3	中ノ峠
山田 豊子	女	T14	中ノ峠
以上計110 名			
一同席者一			
津田 修	男	S28	岩渚町

注) 話者氏名は各地点ごとに氏名の五十音順に示した。なお、〈生年〉の数字の前のM、T、Sはそれぞれ明治、大正、昭和を表わす。

2. 尾小屋町方言の概要

ここでは、今回の調査で得られた資料に基づき、前稿で報告した大杉町方言の場合とも比較しつつ、尾小屋町方言の音韻（発音）・アクセントおよび文法の概略について報告する。

2.1 音韻

2.1.1 音韻体系

まず初めに当該方言の音韻体系（モーラ体系）を示すと表1のようである。以下では、このモーラ表をもとに、共通語の音声と比較しながら尾小屋町方言の音声的特徴を略述する。表記にあたっては、必要に応じて音韻記号（/ /）、音声記号（[]）、表音的片仮名表記を用いる。

2.1.2 母音

(1) 基本母音

昨年度調査・報告をした大杉町方言と同様、母音のうち/o//a//e/については、共通語のそれと音声的にそれほどの違いは観察されない。強いて言えば/o/の開口度が共通語のそれよりやや狭い傾向が見られる程度である。/u/についても、西日本の方言、特に四国、九州、沖縄等で聞かれるような円唇性の強い[u]に対し、共通語と同じような非円唇の[u]と観察される。一方、/i/については共通語の[i]よりも口の開きが大きく、共通語の[i]と[e]の間間的な[ɪ]とも表記されるような音声である。この特徴は、当該地方の方言に限らず北陸方言の広い範囲に共通する特徴でもあり、聴覚的にも北陸方言を特徴づける音声の一つとすることができる。また、これらの特徴とも関連して、子音に後接する場合を含めて母音の交代（音訛）現象が、次頁の例のように、前舌母音の/i/と/e/、後舌母音の/u/と/o/、さらには狭母音の/i/と/u/の間で語的に見られる。

表1 尾小屋町方言のモーラ表（高年層）

/	'u	'o	'a	'e	'i	'ju	'jo	'ja	—	'wa	/
/	hu	ho	ha	he	hi	hju	hjo	hja	—	—	/
/	ku	ko	ka	ke	ki	kju	kjo	kja	—	kwa	/
/	gu	go	ga	ge	gi	gju	gjo	gja	—	gwa	/
/	ŋu	ŋo	ŋa	ŋe	ŋi	ŋju	ŋjo	ŋja	—	ŋwa	/
/	—	to	ta	te	—	—	—	—	—	—	/
/	—	do	da	de	—	—	—	—	—	—	/
/	cu	co	ca	—	ci	cju	cjo	cja	cje	—	/
/	su	so	sa	se	si	sju	sjo	sja	—	—	/
/	zu	zo	za	ze	zi	zju	zjo	zja	—	—	/
/	nu	no	na	ne	no	nju	njo	nja	—	—	/
/	ru	ro	ra	re	ro	rju	rjo	rja	—	—	/
/	bu	bo	ba	be	bo	bju	bjo	bja	—	—	/
/	pu	po	pa	pe	po	pju	pjo	pja	—	—	/
/	mu	mō	ma	me	mo	—	mjo	—	—	—	/
/	N	Q	E	/					—		/

- ・ /i/と/e/ エボ(疣)、エテ(痛い)、エサカイ (^{いさか} 諍い)、オジャメ (おじゃみ<お手玉>)、エチャツク (いちゃつく)、エマ(今)、エッペ (いっぱい)、エランコト (いらんこと<余計なこと>) エシャ (医者)
- ・ /u/と/o/ オンコ (うんこ=大便)、スル (剃る)、ゴザブシ (蓑蔭帽子)
- ・ /i/と/u/ ニカ(糠)、セブル (せびる)

(2) 連母音

形容詞の語末の連母音-アイ [-ai] (「赤い」など) が融合・長音化して-エー [-e:] となり、エテ- (痛い)、ダラシネ- (だらしない)、ウマネ-・ウモネ- (うまくない=まずい)、ヘシネ- (待ち遠しい)、ジャマクセ- (じゃま臭い)、エッペ- (いっぱい)、タケ- (高い) などのように発音されることが多い。同様の現象は、語的に名詞デ-コ (大根)、ハヤジメ- (早仕舞い) などにも見られる。

他にも、やはり形容詞語末の-オイ [oi] が融合・長音化してクデー (くどい<塩味が濃い>)、ヒデー (ひどい) となることもあり、同じ形容詞語末で-ウイ [-ui] が融合・長音化してワリー (悪い) のようになる例も見られる。

2.1.3 子音

共通語の子音と比較しつつ特徴的な子音について触れておく。

カ行音については共通語とほぼ同じであるが、歴史的仮名遣いの「くゎ」「ぐゎ」に当たる音が[kwa][gwa]で発音されることがある。クワジ(火事)のような例がそれに当たるが、昨年度の大杉町方言に比べるとごくわずかな語にしか確認できなかった。この現象についても尾小屋町方言では共通語化が進んでいると言えよう。

ガ行音は語頭で [g]、語中・語尾で [ŋ] となる。

タ行では、共通語と同じ/cu//to//ta//te//ci/のほか/co/ [tso] がゴツツォー (御馳走)、ゴツツォサマナー (ごちそうさまだねえ) に聞かれた。

サ行・ザ行音については、/si//zi/は、それぞれ共通語と同様に[ʃi][dʒi] となるが、語的にヒチ(七)、ヒツコイ(しつこい)のようなシ>ヒの変化が見られる。一方、/se//ze/では個人差はあるものの古音シェ [ʃe]、ジェ [dʒe] が、シェンダク(洗濯)、シェンペ- (煎餅)、シェツケン(石鱈)、シェド(背戸<家の背後の部分など家の周囲の部分>)、シヤワシェ(幸せ)、シェンシェ- (先生)、コワジェ(足袋のこはぜ)、ヒラゴジェン(平御膳)、ジェッコー(絶交)、マジェテシモタ(混ぜてしまった)、ジェンマイ (<植物>ぜんまい) などで聞かれる。ただ、尾小屋町が他地からの人の入り込みが多かったためか、昨年度報告した大杉町や郷谷川流域の他集落に比べるとセ・ゼへの変化(共通語化)が進んでいるように思われた。さらに、サ行音に関しては、昨年度大杉町方言でコソアドのソ系の語などでホヤケド(そうだけれど)、ホシテ・ホイテ(そして)のように/s/が/h/に変化する現象(北陸方言に広く見られる)を確認したが、尾小屋町方言では/s/のままであることが多く、この点でも共通語化が進んでいると見られる。その他、ザ行関係では、語中・語尾でジヤズが無声化してシヤツに発音される例が、オンナシ(同じ)、ムツカシー(難しい)などで確認できる。これらも当該方言に限らず北陸方言に一般的な現象である。

ハ行音は共通語と同じように/ho//ha//he/が [h]、/hu/が [Φ]、/hi/が [ç] で実現する。

その他、ナ行音・バ行・マ行・ラ行音については共通語とほぼ同じであるが、バ行音とマ行音はボチ(餅)、セバイ(狭い)、オボタイ(重たい)のように語的に交替する例が見られる。

拗音の拍も共通語とほぼ同じであるが、/cje/ [tʃe] の拍については、今回の資料からはチンチェー (小さい) でのみ確認できた。

2.1.4 その他

(1) 促音化

金沢方言をはじめとする加賀地方の多くの方言では、語中で無声子音や [r] に狭母音([i] [u]) が続く拍が母音の脱落・弱化をとまって促音化する現象が語的に盛んに見られる。当該方言も例外ではなく以下の様な例が確認できた。

タタッコム [tatakkomu] … [tatakikomu] (叩き込む) の [k] の後の狭母音 [i] が脱落し促音化したもの。

ワスレッコトナラン…ワスレルコトナラン (忘れてはいけない) のルが促音化したもの。

クッリャラ…クルヤラ (来るやら) のルの母音が脱落し促音化すると同時に、[r] とヤラの [ja] が連続して [rja] となったもの。

アッタケ…アルタケ (あるだけ) のルが促音化したもの。

シッサケ…シルサケ (するから) のルが促音化したもの。

以上の他にもオットメ (お勤め<僧の勤行>) などの促音化の例も見られ、また、フッキン (布巾)、スッキャ (好きだ)、ウレッシャ (嬉しい)、シッチャ (質屋)、シダッシャ (仕出屋)、オロッシャ (卸し屋)、クスッリャ (薬屋) などのように、語的に促音が添加される例も見られる

(2) 撥音化

語中・語尾に鼻音の [n] [m] [ŋ] を含んだ拍が母音を落として撥音化する現象が、ハランゾー (腹の臓<内臓>)、ハクモン (履き物)、カンサマ (神様)、アンモン (編み物)、ノンミャ (飲み屋)、ハイッケン (早点け木<マッチ>)、スンノキ (杉の木) などに見られる。

また、これら以外にも語的に、ヨンミャ (宵宮)、ハンノメ (針の目=針の穴)、ヒンママ (昼飯^ま)、ヒンネマ (昼寝間)、コンモリ (こうもり傘)、ツンダッテ (連れ立って) のような撥音化や、カンンジャ (鍛冶屋) のような撥音の添加も見られる。

(3) 長音化

当該方言では2拍名詞の一部の語で1拍目の母音が長呼され、トーリ (鳥) のように頭高のアクセントで発音されることがある。この現象については、岩井隆盛 (1961) など、南加賀地方に広く行われ2拍名詞の第II・III類に起こるとされているものであるが、今回の調査地域では大日川上流域の丸山町方言にこの現象が顕著に見られ、林金策氏 (大正8年生まれ) によれば、アクセント調査語彙の2拍名詞のうちで1拍目の母音が長呼されるのは、I類の「鳥、水、腰」、II類の「橋、夏、肘」、III類の「箸、足、靴、犬」、IV類の「夜、松」、V類の「汗、春、窓、秋、猿」であり、I類の「鼻、柿、風邪、酒、鈴」、II類の「川、紙、歌、旗、胸」、III類の「鍵、花、波、熊、池」、IV類の「肩、糸、海、空、稲」、V類の「雨」は長呼されないとのことであった。この結果からは、岩井氏の言うようなII・III類に限った現象ではないが、一部の例外 (V類の「汗、窓」) を除いて語末の拍が狭母音を含む単語であり、アクセントが頭高 (●○) のものに多いことがわかる。ただし、アクセントが頭高で語末の拍が狭母音のものでも長呼されない「鈴、紙、波」などの例外もあり、今後の精査が必要である。

2.2 アクセント

現時点では、重点調査地点であった尾小屋町方言を含め、特定集落のアクセント体系を詳細に記述するだけの調査を完了していない。したがって、本稿では加藤和夫 (1997) におけるアクセントの報告

同様、言語地理学的調査において＜読み上げ式調査＞を行なったアクセント調査語彙（2拍名詞38語、3拍名詞11語、2拍動詞28語、3拍動詞14語、2拍形容詞1語、3拍形容詞7語、4拍形容詞3語）の範囲で、尾小屋町方言高年層のアクセント（話者：岡崎久雄氏 昭和6年生まれ）を報告するにとどめる。また、加藤和夫(1997)では、昨年度言語地理学的調査を実施した大杉谷川流域8地点のうち、大杉中町方言のアクセントの概略のみを報告したが、本稿では、その後録音テープの聞き取りにより整理のできた6地点（大杉本町、赤瀬、上り江、瀬領、波佐谷、長谷）の2拍名詞のアクセントと語類（Ⅰ類～Ⅴ類）の関係を表と分布図の形で示し、簡単に解説を加えた。

以下、本稿で用いるアクセント記号は、●が語の中の高く発音される拍、○が語の中の低く発音される拍、▲が名詞に助詞が付いた時高く発音される助詞、△が低く発音される助詞を表わす。なお、●○は拍内下降（1つの拍の中で音の高さが高から低に移動する）を表わす。また、各語の後ろの（ ）内などにあるローマ数字は、歴史的に類別されたアクセントの語類を示す。さらに、ローマ数字で示した語類の右にあるWとNは、Wが語末の母音が広母音（a・e・o）、Nが狭母音（i・u）であることを表わしている。

2.2.1 名詞のアクセント

(1) 2拍名詞

今回調査した2拍名詞38語のアクセントを、名詞単独の場合と助詞が付いた場合に分けて、そのアクセント型と所属語を示す。

- , ○●▲ 川 (IIW)、糸・稲・肩・空 (以上IVW)、海・箸・松・夜 (以上IVN)、汗・雨・窓 (以上VW)、秋・春 (以上VN)
- , ○●△ 風・酒・鼻 (以上IW)、歌・旗・胸 (以上IIW)、池・熊・花 (以上IIIW)
- , ●○△ 柿・腰・鈴・鳥・水 (以上IN)、紙・夏・橋・肘 (以上IIN)、足・犬・鍵・靴・波 (以上IIIN)、猿 (VN)

これらの結果から、尾小屋町方言の2拍名詞のアクセントは、類と語末母音の広狭との関係から次の表2のように整理することができそうである。

表2 尾小屋町

I W II W III W	○●, ○●▲
I N II N III N	●○, ●○△
IV V	○●, ○●▲

つまり、尾小屋町方言のアクセントは、2拍名詞の5つの類が、全て各類ごとにまとまって同じアクセント型を示すタイプのものではない。Ⅳ・Ⅴ類の語はまとまって○●, ○●▲の平板型（例外としてⅤ類の「猿」）を示すが、Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ類の語のアクセントは語末の母音の広狭で2つのタイプに、すなわち広母音の語が中高の○●, ○●△（例外としてⅡ類の「川」が○●, ○●▲）、狭母音の語が頭高の●○, ●○△に分かれるのである。

この結果は、後に示す昨年度の調査地点の2拍名詞のアクセントうち、大杉谷川中・下流域の赤瀬、

上り江、瀬領、長谷の姿（表5～7・表9）にはほぼ同じであり、2拍名詞のアクセントに限って言えば、大杉谷川の中・下流域から郷谷川流域にかけては、表2のようなアクセントタイプの分布していることが予想される。今後、尾小屋町方言以外のアクセントの整理を進める中で明らかにしてみたいと考える。なお、一部の例外は見られるものの、今回の結果からは、それらの例外が金沢方言などに見られるような語末拍の子音の有声・無声（母音の広狭のみならず）の影響を受けているとは考えにくい。

なお、頭高のアクセントになるⅠ・Ⅱ・Ⅲ類で語末が狭母音の語のうち、「腰」「夏」「靴」では、名詞単独の発音の際に1拍目の母音がやや長呼される $\overline{\text{コーシ}}$ 、 $\overline{\text{ナーツ}}$ 、 $\overline{\text{クーツ}}$ といった発音が聞かれた。先に「2.1 音韻」の項の「長音化」で触れたのと同じ現象である。

(2)3拍名詞

3拍名詞も2拍名詞と同様、単独の場合と助詞付きの場合に分けて調査をしたが、結果からそのアクセント型と所属語（語類）を示す。今回調査した12語については4つのアクセント型の存在が確認できた。

- , ○●●▲ 着物（Ⅰ）、兎・男・背中（以上Ⅵ）、苺
- , ○●●△ 桜（Ⅱ）、娘
- , ○●○△ 鏡（以上Ⅳ）、朝日・命（以上Ⅴ）
- , ●○○△ 女（Ⅳ）

2.2.2 動詞のアクセント

(1)2拍動詞

尾小屋町方言の2拍動詞アクセントは、一部の動詞について言い切りの形と過去形のアクセントを、その他については言い切り形のみを調査した。語数は全部で30語であった。

まず、前者の調査結果を示す。

- , ●○ (●○○) 咲く・咲いた、煮る・煮た、寝る・寝た、飛ぶ・飛んだ（以上Ⅰ）、出る・出た（以上Ⅱ）
- , ○● (○●●) 書く・書いた、来る・来た、飲む・飲んだ、降る・降った、蒔く・蒔いた（以上Ⅱ）

この結果から、2拍動詞については、Ⅰ類（Ⅱ類の「出る・出た」は例外）の動詞が言い切り形・過去形とも第1拍目が高くなる頭高型のアクセントに、Ⅱ類の動詞が言い切り形で2拍目、過去形で2拍目以降が高くなる平板型のアクセントになるらしいことがわかる。ただ、後者の語についてはやや例外も見られ、言い切り形を調査した語のうち、Ⅱ類の「吹く」「有る」は○●のように2拍目が高くなるが、●○のように1拍目が高くなるものには「^お居る」「^お履く」「^お散る」やⅠ類の「^な生る」「^な鳴る」「^な鳴く」の他、Ⅱ類の「振る」「着る」もあった。

(2)3拍動詞

3拍動詞は全て言いきりの形で調査をしている。結果からは、今回調査した全ての3拍動詞(14語)が中高型（○●○）のアクセントを示した。

- 開ける、歌う、枯れる、切れる、食べる、鳴らす、伸びる、昇る、走る、吠える、曲がる、見える、渡る、割れる

このうち「歌う」はウトーとも発音される。後掲の表10、および動詞の活用に関する解説を参照されたい。

2.2.3 形容詞のアクセント

(1) 2拍形容詞

今回の調査語の中では2拍形容詞はナイ(無い)のみであった。そのアクセントは○●であった。なお、ナイは読み上げ調査中、ネーと発音されることもあったが、アクセントは変わらず○●であった。

(2) 3拍形容詞

まず調査結果を示す。

○●○ 厚い・痛い・丸い (以上I)、青い・熱い・高い・長い (以上II)

つまり、尾小屋町方言の3拍形容詞は、調査した7語の全てが中高型(○●○)のアクセントを示すことがわかった。ただし、「高い(II)」については頭高(●○○)と中高の2つのタイプが聞かれ、ゆれが見られた。「痛い」はイテーとの発音も聞かれた。

(3) 4拍形容詞

4拍形容詞は3語のみであるのでその結果を示すだけにする。

○●○ 危ない、苦しい、涼しい

「危ない」はアブネーとの発音も聞かれた。

2.2.4 大杉谷川流域における2拍名詞のアクセント体系とその分布

昨年度言語地理学的分布調査を終えた大杉谷川流域の8地点のうち、加藤和夫(1997)ですでに報告した大杉中町を含めた7地点について、昨年度の調査語の範囲で明らかになった2拍名詞のアクセント体系を、分布地図とあわせて報告しておく。

表3 大杉本町

IV IW	○●, ○●▲
I N II IIIN	●○, ●○△
IIIW V	○●, ○●△

* 右の大杉中町に同じ。

表4 大杉中町

IV IW	○●, ○●▲
I N II IIIN	●○, ●○△
IIIW	○●, ○●△

* 加藤和夫(1997)を参照。

表5 赤瀬

I W II W IIIW	○●, ○●△ (○○)
I N II N IIIN	●○, ●○△
IV V	○●, ○●▲

* 例外としては、池(IIIW)が○●▲、熊(IIIW)が●○△となる。

表6 上り江

I W II W IIIW	○●, ○●△
I N II N IIIN	●○, ●○△
IV V	○●, ○●▲

* 例外としては鼻(I W)・胸(II W)・池(IIIW)で○●△, ●○△の両形が聞かれ、花(IIIW)が○●▲となる。

表7 瀬 領

I W IIW IIIW	○●, ○●△
I N IIN IIIN	●○, ●○△
IV V	○●, ○●▲

表8 波 佐 谷

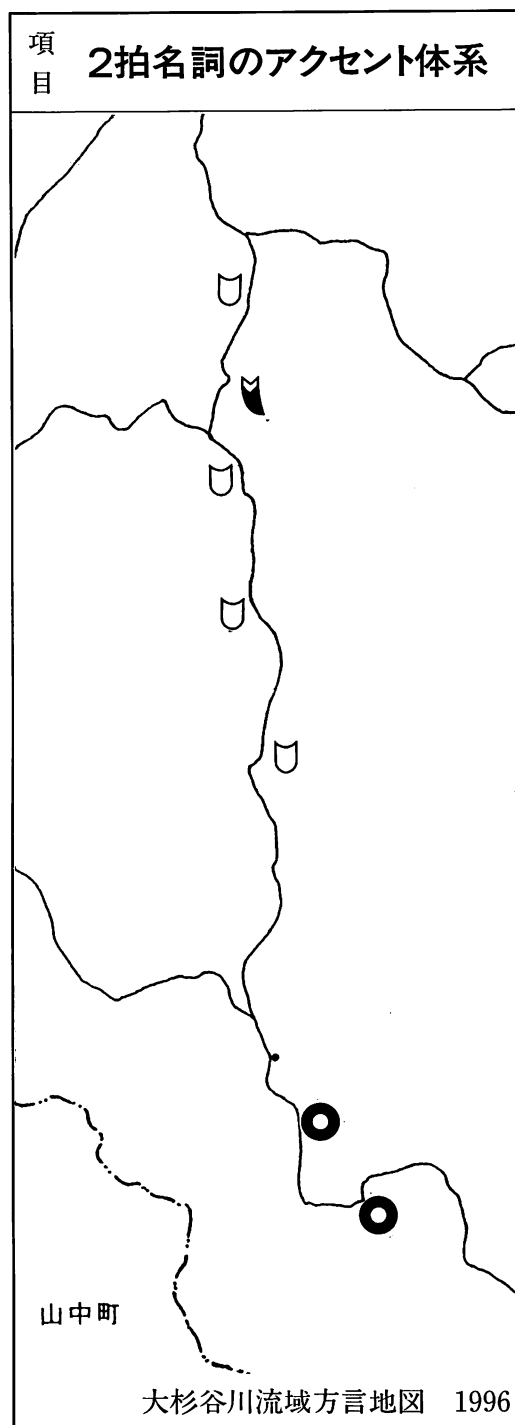
I II III	●○, ●○△
IV V	○●, ○●▲

*例外としては柿 (I N)・川 (IIW) が○●▲となる。この結果は、周辺の赤瀬～長谷に見られるタイプがI・II・III類の語末母音の広狭による区別をなくして、頭高型にまとまった結果とみることができる。

表9 長 谷

I W IIW IIIW	○●, ○●△ (○●)
I N IIN IIIN	●○, ●○△
IV V	○●, ○●▲

*例外としては鼻 (I W)・花 (IIIW) が●○△、雨 (VW)・秋 (VN) が○●△となる。



● IV・IW / IN・II・IIIN/IIIW

U IW・IIW・IIIN / IN・IIN・IIIN/IV・V

M I・II・III/IV・V

2.3 文法

ここでは、尾小屋町における動詞・形容詞を中心とした用言の活用調査や助詞の調査等、一連の体系調査の結果と、同じく尾小屋町の方言基礎語彙調査資料等に見られる文法に関する事象を報告する。

2.3.1 動詞の種類と活用

まず最初に、尾小屋町方言の動詞の活用表を表10に示す。この活用表は今回の調査で確認できた範囲で作成したもので、今後の調査によって補われる部分もあるかもしれないが、その概略は示し得たと考えている。

表10の接続形式に含まれる助詞・助動詞等の詳しい意味・用法については、後述の「2.3.3 助詞」「2.3.4 助動詞」を参照されたい。なお、この活用表は前稿に載せた大杉町方言の動詞の活用表と同じく、いわゆる学校文法的な仮名書きの活用表ではない。なぜなら、仮名書きでは共通語も含めて動詞の活用の正しいありさま（特に活用語幹と活用語尾の区別）を表わし得ないためである。こうした書き方によって、五段動詞が子音語幹で後接形式によって活用語尾（活用形）がa、i、u(u)、e、oと変化する動詞（強変化動詞）であること、一段動詞が母音語幹で後接形式によって活用語尾がゼロの場合とru、riaなどが付加する場合がある動詞（弱変化動詞）であること、サ変・カ変動詞はその両タイプの混合型であることがあらためて確認できるはずである。

表中、語幹の（ ）の部分は、活用形により活用語尾の（ ）内の形と交替することを表わしている。また、活用語尾の欄のφは語尾が何も付かない（ゼロである）こと、斜線（/）はその部分に相当する形が存在しないこと、Nは撥音（ン）に、Qは促音（ッ）に、Eは長音になることを示している。なお、語幹の一部に見られる「'」はそれが子音相当部分であることを表わしている。

では、表10の活用形の第1形から第10形の順に、まず五段活用動詞「書く」の場合の各活用形とその後接形式について記述する

- ・第1形 カカスワ（書かせるよく使役>）、カカレテシモータ（書かれてしまったく受身>）、カカシヤッタ・カカシタ（お書きになったく尊敬>）など。
- ・第2形 カカン（書かないく否定>）、カカンカ（書かないかく勧誘>）、カカント（書かないで）、カカンデモエー（書かなくてもいい）、カカンダ（書かなかったく否定過去>）、カカンナン（書かなければならない）など。
- ・第3形 カキタイナー（書きたいなあく希望>）、カキダス（書き始める）、カキナカラ（書きながら）、カキサエシリヤー（書きさえすれば）など。
- ・第4形 カイタ（書いたく過去・完了>）、カイテシモータ（書いてしまった）、カイトル（書いているく継続・結果>）、カイトラ（書いたらく仮定>）、カイトリ（書いたり）など。「出す」など、いわゆるサ行五段動詞の第4形には、動詞によりダイタ（出した）のようにイ音便化するものと、オシタ（押した）のようにイ音便化しないものがある。今回の調査結果から見る限りでは、「出す」以外にイ音便化が確かめられたものは、ホイタ（干した）、サイタ（挿した）、モヤイタ（燃やした）、オトイタ（落とした）、カクイタ（隠した）、ハズイタ（外した）、コボイタ（こぼした）、コワイタ（壊した）、ワタイタ（渡した）、ハナイタ（話した・離れた）、アカイタ（明かした）、バライタ（ばらした）があり、「押す」以外にイ音便化しないことが確かめられたのは、カシタ（貸した）、タシタ（足した）がある。ただし、イ音便化に関しては当該方言でも60歳代の話者になると、上記の「出す」～「ばらす」が例外なくイ音便化する話者、それらも「押す」「貸す」「足す」同様にイ音便化しなくなっている（共通語化が進行している）話者、そしてイ音便化するはずの語のうち一部がイ音便化せず共通語化に向かってゆれている

表10 尾小屋町方言の動詞活用表(高年層)

動詞の 種類	代表 語例	活用形 語幹	第1形	第2形	第3形	第4形	第5形	第6形	第7形	第8形	第9形	第10形
五 段 動 詞	書く	ka(k)	a	a	i	(i)	u	u	ja	e	e	o
	漕ぐ	ko(ŋ)	a	a	i	(i)	u	u	ja	e	e	o
	出す	da(s)	a	a	i	(i)	u	u	ja	e	e	o
	勝つ	ka(c)	(t)a	(t)a	i	(Q)	u	u	ja	(t)e	e	o
	取る	to(r)	a	a	i	(Q)	u	u·(N)	ja	e	e	o
	居る	o(r)	a	a	i	(Q)	u	u·(N)	ja	e	e	o
	買う	ko(')	(w)a	(w)a	i	(E)	(E)	(E)	ja	e	e	o
	死ぬ	si(ŋ)	a	a	i·(N)	(N)	u	u	ja	e	e	o
	飲む	no(m)	a	a	i	(N)	u	u	ja	e	e	o
	飛ぶ	to(b)	a	a	i	(N)	u	u	ja	e	e	o
一 段 動 詞	見る	mi	φ	φ	φ	φ	ru	ru·N	rja	φ·E	φ	φ
	起きる	'oki	φ	φ	φ	φ	ru	ru·N	rja	φ·E	φ	φ
	寝る	ne	φ	φ	φ	φ ^ㇿ	ru	ru·N	rja	φ·E	φ	φ
	開ける	'ake	φ	φ	φ	φ	ru	ru·N	rja	φ·E	φ	φ
サ変動詞	する	s	a	e	i	i	uru·iru	uru·iN	irja	i·eE	／	
カ変動詞	来る	k	o	o	i	i	uru	uru·uN	urja	oi		
後 接 形 式			～(サ)ス ～(サ)セル ～(ラ)レル ～(ガ)ツヤル	～ン ～ンダ ～ンナン ～ナ	～タイ ～ダス ～ナカラ ～サエ ～マス	～タ(ダ) ～テ(テ) ～タリ(ダリ) ～テモ(デモ)	～φ ～時・人 ～ケド ～ヤロー ～サケ ～カナラ	～ナ	～ヨカッタ	～φ ～ヤ ～マ ～ヨ	～(レ)ル	～(ヨ)ー ～マイカ

語幹の()内の部分は活用形の()内と交替することを示す。φはゼロ記号、Nは撥音、Qは促音、Eは長音。

話者など、かなりの個人差が見られた。

- ・第5形 カク (何も後接しない言い切り形)、カクヒト (書く人<体言>)、カクケド・カクケン
ド (書くけれど)、カクヤロー (書くだらう<推量>)、カクサケー (書くから<理由>)、カク
カンネーカ (書くんじゃないの)、カクカナラ (書くのなら<仮定>)、カクワ (書くよ) など。
なお、当該方言では共通語のハ行五段動詞にあたる「買う」の類が、言い切りの形や名詞に続
く場合など(第4・5・6形)に本来の動詞の末尾[-au]が[-o:]と長音化して、コー(買う)、
モロー(貰う)、ミナロー(見習う)、マチコー(間違う)、モー(舞う<回るの意>)、イロー
(いら弄う<触るの意>)のようになる。そのため、この類の動詞の語幹末尾母音(子音相当
の音に前接する)は、それらに類推変化してコワン(買わない)、コイタイ(買いたい)、コー
ケド(買うけれど)、コーヤロー(買うだらう)、コーワ(買うよ)、コエ(買え)のように本来
の[a]が[o]に変化している。ただし、コワン(買わない)に対してカワン、コワンカ(買
わないか)に対してカワンカのように、一部の用法で再び共通語の影響を受け語幹が共通語と
同じ形になるものも聞かれた。
- ・第6形 カクナ (書くな<禁止>)。五段動詞でも「取る」のように語幹末尾子音が[r]のもの
はトルナ (取るな<禁止>)のほかトンナの形もある。
- ・第7形 カキャヨカッタ (書けばよかった)。
- ・第8形 カケ (書け<命令>)のように何も後接しない命令形、カケヤ (書けよ<命令>)、カケ
マ (書けよ<命令>) など。
- ・第9形 カケル (書ける<可能>)。なお、サ変「する」の可能形はデキル(出来る)となるた

め「する」の第9形は空き間となる。

- ・第10形 カコー（書こう<意志>、カコー（書きなさい<命令>）など。意志あるいは命令の意では一段・サ変・カ変の動詞にはヨーが後接する。

次に、一段活用動詞「見る」の場合の各活用形とその後接形式についても略述する。

- ・第1形 ミセル（見させる<使役>）、ミラレル（見られる<受身>）、ミサッシャル（ご覧になる<尊敬>）など。
- ・第2形 ミン（見ない<否定>）、ミント（見ないで）、ミンダ（見なかった<否定過去>）、ミンナン（見なければならない）など。
- ・第3形 ミタイ（見たい<希望>）、ミトモナイ（見たくもない）、ミハジメル（見始める）、ミナカラ（見ながら）など。
- ・第4形 ミタ（見た<過去・完了>）、ミテシモータ（見てしまった）、ミトル（見ている<継続・結果>）、ミトラ（見たら<仮定>）など。
- ・第5形 ミル（何も後接しない言い切り形）、ミルトキ（見る時<体言>）、ミルヤロー（見るだろう<推量>）、ミルカナラ（見るのなら<仮定>）など。
- ・第6形 ミルナ・ミンナ（見るな<禁止>）。
- ・第7形 ミリャエー（見ればいい）。
- ・第8形 ミー（見ろ<命令>）、ミーヤ（見ろよ<命令>）、ミヨマ（見なさいよ<命令>）など。
- ・第9形 ミレル（見られる<可能>）。
- ・第10形 ミヨー（見よう<意志>）など。

なお、共通語では一段活用となる「足りる」「借りる」「飽きる」「漏れる」などは、当該方言（高年層）では未だに本来の西日本方言的な五段活用「足る・足った」「借り・借った」「飽く・飽いた」「漏る・漏った」のように使用されることが多い。

この他、共通語ではナ行五段活用となる「死ぬ」は、当該方言では言い切りが「シク°（死ぬ）」となり、「コク°（漕ぐ）」などと同じく語幹末子音は/ㇿ/となる。第3形にはシнтаイナー（死にたいなあ）の形も聞かれた。また、サ行変格活用の「する」の第5形は、スルよりもシルの方が優勢であり、シルケンド（するけれど）、シルナラ（するなら）、シルサケー（するから）、シルカンネーカ（するのじゃないか）のような形が聞かれ、第6形でもスルナ以外にシンナ（するな）も聞かれた。以上の記述と上記の活用表から、代表語例以外の動詞の活用についてもほぼ類推が可能となるであろう。

2.3.2 形容詞・ナ形容詞（形容動詞）

尾小屋町方言で使用されるさまざまな形容詞・ナ形容詞（形容動詞）については、後述の「3. 尾小屋町方言の語彙」で見ることができるが、ここでは、形容詞・ナ形容詞それぞれの活用の面について略述する。

形容詞については、「早い」を例にとると、ハヤイヤロー（早いだろう<推量>）、ハヤカッタ（早かった<過去>）、ハヨナル（早くなる<連用>）、ハヨーナイ（早くない<否定>）、ハヤイ（早い<言い切り>）、ハヤイヒト（早い人<連体>）、ハヤイケトー（早いんだって<伝聞>）、ハヤイサケ（早いから<理由>）、ハヤカッタラ（早ければ<仮定>）、ハヤケリヤ（早ければ<仮定>）などのように活用する。

一方、ナ形容詞については、「シズカヤ（静かだ）」を例にとると、シズカヤロー（静かだろう<推量>）、シズカヤッタ（静かだった<過去>）、シズカンナル（静かになる<連用>）、シズカヤナイ（静ではない<否定>）、シズカヤ（静かだ<言い切り>）、シズカヤンナー・シズカナンナー（静かな

あ)、シズカナヒト (静かな人<連体>)、シズカヤサケ<理由>、シズカヤッタラ (静かだったら<假定>) などのように活用する。

2.3.3 助詞

助詞については、共通語の助詞の意味・用法と対比させながら、今回の調査で確認できた尾小屋町方言の助詞を記述する。記述中、片仮名表記したものが尾小屋町の方言形である。

(1) 格助詞

主体を表わす「が」に当たるものとしては、共通語的にカ[°]が聞かれる場合も多いが、ワシ イク (私が行く)、ヒー ナコ[°]ナッタ (日が長くなった) のように省略されたり、ヒヤ ナコ[°]ナッタ (日が長くなった)、ウチャ カタカ[°]ットル (家が傾いている)、ヘータイア シュッパツシルン (兵隊が出発するの) のような形で実現することも多い。

連体格の助詞「の」に当たるものは、マルイカ[°]ニ ニギル (丸いのに握る)、カクカ[°]ナラ (書くのなら) のようにカ[°]になる。同様に、所有を表わす「の」に当たるものも、ワシンカ[°]ヤ (私のだ) のようにカ[°]となる。この特徴は当該方言に限らず、石川・富山両県の方言に広く共通する特徴である。

方向を表わす「へ」に当たるものとしては、エが現われる場合と省略される場合がある。場所を表わす「へ」にはエカニ。ニは時に、ガッコ[°]ネ イク (学校に行く)、ハコンナカ[°]ネ イレル (箱の中に入れる) のようにネに近く発音されることがある。目的や場所を表わす「に」は、マチニ イク (町に行く)、ホン カイニ イク (本を買いに行く) のようにニが使われ、こちらも時にネに近く発音されることがある。

比較の「より」は、ソレヨリ アノホーカ[°] エー (それよりあの方がいい) となる。

目的の「を」は、サカナ コータ (魚を買った)、コズカイ ヤル (小遣いをやる)、キー ハッテ (気を張って) のようにしばしば省略される。ただし、「水を(が)飲みたい」などと言う場合の「を(が)」にあたるものはカ[°]、あるいはミズア ノミタイのようになることもある。

「友達と遊ぶ」と言う場合の「と」はトで同じ。場所、手段・方法、原因・理由などを表わす「で」も同じデ、起点を表わす「から」も同じカラである。

(2) 係助詞

「は」に当たるものとしては「アクセントア ツヨイ (アクセントが強い)」「コノコ[°]ロア アツイ (この頃は暑い)」のように [wa] の [w] が脱落して [a] が軽く添えられるように実現したり、「ムカシャー (昔は)」のように前接母音 [i] と [a] が融合した形も聞かれる。もちろん完全に省略される場合もある。

(3) 副助詞

限定を表わす「しか」に当たるものは「イッポンシカ (1本しか)」で同じ、やはり限定・強調を表わす「さえ」に当たるものはサエ、強調の「こそ」に当たるものもコソで同じである。

提示的限定や強調を表わす「でも」は、オチャデモ ノモー (お茶でも飲もう) のようにデモ。やはり限定を表わす「ばかり」は、モンクバッカリ ユーケド (文句ばかり言うけれど)、アメバッカリ フットル (雨ばかり降っている) のようにバッカリとなる。強調の「だって」に当たるものは、コドモヤッテ シットル (子どもだって知っている) となる。

程度を表わす「ほど」に当たるものは、サンジョーホド ノンダ (三升ほど飲んだ)、デカケリヤデカイホド エーヤロ (大きければ大きいほどいいだろう)、トビアカルホド ウレシカッタ (跳び上がるほど嬉しかった) のようにホド、量や範囲を限定する「だけ」に当たるものも、コンダケ ユーテモ ワカランカイ (これだけ言ってもわからないかい) のようにダケで同じある。また、程度を表わ

す「ほど」「ぐらい」も、ジュッポンホド カカル (十分ぐらいかかる)、クークライワ ナントカナル (食うぐらいは何とかなる) で同じ。

例示の「なんか・など」に当たるものは、コンナモンクライ イクラデモ アルヨ (こんなものなどいくらでもあるよ)、カサナンカ イラン (傘なんかいらぬ)、ヤサイナンカ イクラデモ トレル (野菜なんていくらでも獲れる) のようにクライやナンカ、同じく例示の「でも」に当たるものは、オチャデモ ドーゾ (お茶でもどうぞ)、ワシンデモ ハナシテクレバ ヨカッタノニ (私にでも話してくればよかったのに) のようにデモ、「まで」もアンタニマデ ハナシ イクトワ オモワンダ (あなたにまで話がいくとは思わなかった) で同じである。

強調の「しか」に当たるものは、モー コンダケシカ ナイヨ (もうこれだけしかないよ) のようにシカである。

不確定を表わす「やら」には、ダレカ キタンネーカ (誰やら来たのではないか)、クルヤラ コンヤラ ヨー ワカラン (来るのやら来ないのやらよくわからない) のようにカが使われる。

(4) 接続助詞

まず理由の「から」に当たるものには、ヤカマシサケ アッチ イケ (うるさいからあっちへ行け)、フリソーナサカイ (降りそうだから)、アタルト オモワンダサカイ (当たると思わなかったから) のようにサケ、サカイが使われている。

逆接の接続助詞では、「けれど・のに」に当たるものに、イキタイケンド (行きたいけれど)、ウエタケンドカ (植えたけれども) のようにケンドが多用される。シランケド (知らないけれど) のようにケドも聞かれる。同じ逆接に、イクラ ノンデモ (いくら飲んでも) のようなものもある。

原因・理由を表わす「て」「ので」に当たるものとしては、アシガ イトーテ (足が痛くて) のようにテが使われる。

「ながら」に当たるものは、ノミナカラ ハナス (飲みながら話す) で同じである。

(5) 終助詞

終助詞については、その意味・用法を共通語のそれと対比して示すのが難しいものも多いが、とりあえず尾小屋町方言で用いられる主要なものを、その文法的意味(とりあえずの分類)、用例、共通語訳とともに示す。

ナー (感動) ゲンキァ エーナー (元気がいいねえ)。

ナー (詠嘆) ミヤケニワ コノ マンジュー ドーヤロナー (土産にはこの饅頭はどうだろうねえ)。オランナー (いないねえ)。

ンナー (詠嘆) イッタンナー (行ったねえ)。イッショヤッタンナー (いっしょだったねえ)。

ネ (詠嘆・念押し) イネ カヤルシ イヤヤネ (稲が倒れるし嫌だね)。ワナランカッテ イーワ イネ (どならなくてもいいよ)。ヨトギ イカンナンネー (お通夜に行かなくてはいけないねえ)。

イネ (詠嘆) ウメテアレントイネ (埋めてあるんだって)。

ヨ (詠嘆) モー コンダケシカ ナイヨ (もうこれだけしかないよ)。コンナモンクライ イクラデモ アルヨ (こんなものぐらいいくらでもあるよ)。タント ヒトガ ヨットルヨ (たくさん人が集まっているよ)。

ナ (詠嘆) オトナシカニ ユーナ (静かに言うんだね)。タウエ スングラ ヤシコ センナンナ (田植えが済んだら田植え休みをしなくてはならないね)。ゴッツォサマナー (どちそうさまだねえ)。シズカヤンナー (静かだねえ)。

ワ (詠嘆) オランワ (いないよ)。グアイ ワリーワ (具合悪いよ)。ヨコニ シルワ (横にするよ)。ダイテキタワ (出してきたよ)。

ワイ (詠嘆) ワカランカッテ イーワイネ (わからなくてもいいよ)。

カ[°]ヤ (詠嘆) イクラヤッタカ[°]ヤ (いくらだったんだい)。

ゼ・ジェ (詠嘆・気づき) ハヤカッタジェ (早かったねえ)。当該方言を含む小松市方言ではこの種のゼが聞かれ、金沢方言を中心とした「ソノフク カワイージー(その服かわいいね)」の「ジー」、富山方言「ギューニュー キトッタカ[°]イゼ (牛乳がきていたよ)」の「ゼ」に近い意味・用法を持つと思われる。その分布からは、この種の終助詞ゼが、かつて石川・加賀地方から富山にかけて分布し、そのうちの金沢方言がゼからジ(一)への音声変化を起こしたとも考えられる。

ゾ (強調) キビシーラシーゾ (厳しいらしいぞ)。コレカラ ホントヤゾ (これからが本当だぞ)。アメァ フットルゾ (雨が降っているよ)。ゴハンヤゾ (ご飯だよ)。

ワイヤ (強調) ホンナトコ イカンワイヤ (そんな所へは行かないよ)。

マ (強意) オキーマ (起きろよ)、コイマ (来いよ)。キカンコト ユーナマ (わがまを言うなよ)。命令や禁止の形に付いて意味を強める。

ヤ (念押し) キーツケヤ (気をつけなさいよ)。ドコ イカンヤ (どこにいくんだい)。オキーヤ (起きなさいよ)、コイヤ (来なさいよ)。クンナヤ (来るなよ)。命令や禁止の形に付くと、オキーマ (起きろよ)、コイマ (来いよ) などの「マ」に比べ優しい命令の意となる。

カ[°]イネ (念押し) イカンカ[°]イネ (だめだよ)。

ネ (念押し) キテクレジャロネ (来てくれるだろうね)。

ナ (念押し) キテクレルヤローナ (来てくれるだろうね)。

ノ (念押し) ドコ イカッシャルンエノ (どこにいらっしゃるの)。コッチ コラッシャイノ (こっちにいらっしゃいね)。

ン (念押し) ドコ イケン (どこに行くの)。上の「ノ」からの変身形か。

サ (勧誘) アソンデコーサ (遊んで来ようよ)。ウタオーサ (歌おうよ)。カワオヨキ[°] イコサ (川泳ぎに行こうよ)。ママニ ショーサ (ご飯にしようよ)。

ケ (疑問) カタチオ カエルンケ (形を変えるのか)。コンナカ[°]ニ カエタラ ドーケ (こんなのに変えたらどうか)。コノハナ グランナイケ (この花、馬鹿じゃないのか)。コッチ キテモラエンケ (こちらに来てもらえないか)。同じ疑問の「カ」に比べ丁寧で優しい意を添える。

カ (疑問) エーカンネーカ (いいのではないか)。ユビキリカミキリ センカ (指切りをしないか)。ハナイテッテンカ (離していつてくれないか)。マテァ イーカ[°]カ (待てばいいのか)。

カイ (疑問) クルカ[°]カイヤ (来るのかね)。コンダケ ユーテモ ワカランカイ (これだけ言ってもわからないかい)。

カナ(一) (疑問) コレデ エーカナー (これでいいかなあ)。

ナ (禁止) ワッシェンナ (もう忘れるな)。タールイコト シンナ (馬鹿馬鹿しいことをするな)。

2.3.4 助動詞

尾小屋方言の助動詞については、主な用法ごとにその活用形とあわせて示す。

(1) 使役 (サ)ス・(サ)シェル

五段動詞の第1形にはス、一段・カ変動詞の第1形にはサスで接続する。五段動詞「書く」では、カカサン(書かせない)、カカシタ(書かせた)、カカス・カカシェル(書かせる<人>)、カカシェリヤ(書かせれば)、一段動詞「見る」では、ミサシェン(見させる)、ミサシタ(見させた)、ミサス・ミサシェル(見させる<人>)、ミサシェリヤ(見させれば)、カ変動詞「来る」では、コサシェン(来させない)、コサシタ・コサシェタ(来られた)、コサス・コサシェル(来させる<人>)、コサセリヤ

(来させれば) のようになる。

(2) 受身 (ラ)レル

五段動詞の第1形にはレル、一段・サ変・カ変動詞の第1形にはラレルで接続する。

五段動詞「書く」では、カカレン (書かれない)、カカレタ (書かれた)、カカレル (書かれる<人>)、カカレリヤ (書かれれば)、一段動詞「見る」では、ミラレン (見られない)、ミラレタ (見られた)、ミラレル (見られる<人>)、ミラレリヤ (見られれば)、カ変動詞「来る」では、コラレン (来られない)、コラレタ (来られた)、コラレル (来られる<人>)、コラレリヤ (来られれば) のようになる。

(3) 尊敬 (サ)ッシャル・(サ)ス

五段動詞の第1形にはッシャル・ス、一段動詞の第1形にはサッシャル・サスで接続する。五段動詞「書く」では、カカッシャル・カカス (お書きになる)、カカッシャラン・カカサン (お書きにならない)、カカッシャッタ・カカシタ (お書きになった)、カカッシャル ヒト・カカス ヒト (お書きになる人)、カカッシャッタラ・カカシタラ (お書きになれば) のように、一段動詞「見る」では、ミサッシャル・ミサス (ご覧になる)、ミサッシャラン・ミササン (ご覧にならない)、ミサッシャッタ・ミサシタ (ご覧になった)、ミサッシャル ヒト・ミサス ヒト (ご覧になる人)、ミサッシャッタラ・ミサシタラ (ご覧になったら) のようになる。このうち、カカサン (お書きにならない)、ミササン (ご覧にならない) はほとんど使用されないようだ。カ変動詞の「来る」についてはコラッシャルの形も聞かれた。

他に、ドコ イクマッシャルンケ (どこにいらっしゃるんだ)、ドッカ イクマッシャランカ (どこかにいらっしゃるのか)、イレテヤンマッシ (入れておやりなさい。ヤンマッシはヤルマッシからの変化形) のように、五段動詞の第5形 (一段動詞は第1形) に接続する尊敬の助動詞マッシャルも郷谷川下流域からの影響で使われることがあるようだ。なお、このマッシャルは本来五段動詞では第5形に接続していたが、最近では、ドコ イキマッシャルンヤ (どこにいらっしゃるんだ) のように第3形に接続する例も聞かれる。

(4) 可能 (レ)ル

五段動詞の第9形にル、一段・カ変動詞の第9形にはレルで接続し、結果的に一段活用型の可能動詞を派生する。語幹の拍数の多い一部の一段動詞にはラレルが接続する場合もあるが、多くはレルが接続し、尾小屋町方言でも一段動詞における可能動詞化、俗に言う「ら抜き」が進行していることがわかる。五段動詞「書く」の可能動詞形「書ケル」は、カケン (書けない)、カケタ (書けた)、カケル (書ける<人>)、カケリヤ (書ければ)、一段動詞「見る」の可能動詞形「見レル」は、ミレン (見られない)、ミレタ (見られた)、ミレル (見られる<人>)、ミレリヤ (見られれば)、カ変動詞「来る」の可能動詞形「来レル」は、コレン (来られない)、コレタ (来られた)、コレル (来られる<人>)、コレリヤ (来られれば) のような形になる。

(5) その他

これら以外の当該方言で聞かれる助動詞については、先に掲げた動詞活用表の活用形の順に示す。

まず、動詞の第2形に接続するものには、カカン (書かない)、ミン (見ない)、セン (しない)、コン (来ない) の否定のン、カカンダ (書かなかった)、ミンダ (見なかった)、センダ (しなかった)、コンダ (来なかった) の否定過去のンダ、カカンナン (書かなくてはいけない)、ミンナン (見なくてはいけない)、センナン (しなくてはいけない)、コンナン (来なくてはいけない) の義務のンナンがある。

第3形に接続するものには、カキタイ (書きたい)、ミタイ (見たい)、シタイ (したい)、キタイ (来たい) の希望のタイがある。

第4形に接続するものには、カイタ（書いた）、ノンダ（飲んだ）、シタ（した）、キタ（来た）の過去のタ・ダがある。

第5形に接続するものには、カクヤロー（書くだろう）、ミルヤロー（見るだろう）、シルヤロー（するだろう）、クルヤロー（来るだろう）、サブイヤロー（寒いだろう）、キテクレッジャローネ（来てくれるだろうね）の推量のヤロ（ー）、ジャロ（ー）（尾小屋町方言ではジャローは稀にしか聞かれない）、さらに、カクラシー（書くらしい）、キビシーラシーゾ（厳しいらしいよ）などの伝聞推量・様態のラシーがある。

最後に、第10形に接続するものには、カコー（書こう）、ミヨー（見よう）、カエロー（帰ろう）、シヨー（しょう）、コヨー（来よう）の意志の（ヨ）ー、アカロマイカ（あがろうよ）の勧誘のマイカがある。

3. 尾小屋町方言の語彙

今年度の調査では、伝統的方言語彙の記述のための調査項目として、昨年度と同様、平山輝男他編『現代日本語方言大辞典（全9巻）』（明治書院 1992～1994）編纂のために用意された「方言基礎語彙調査票」に載る約2300項目を利用した。調査項目は18分野に分けられており、その内訳は〈天地・気候〉166項目、〈動物〉164項目、〈植物〉173項目、〈人体〉208項目、〈衣〉146項目、〈食〉202項目、〈住居〉162項目、〈民俗〉120項目、〈遊戯〉64項目、〈教育〉75項目、〈人間関係〉97項目、〈社会・交通〉158項目、〈行動・感情〉125項目、〈時間・空間・数量〉297項目、〈職業〉69項目、〈農・林・漁業〉150項目、〈勤怠・難易・経済〉50項目、〈助詞・助動詞・その他〉180項目となっている。ただ、これら約2300項目には関連項目も多く含まれ、また実際の調査にあたっては調査担当者が項目の補充等を行っているので、実質的な調査項目数はおそらく2500以上になっているものと思われる。

今年度の調査対象地点は郷谷川上流部の尾小屋町である。方言とはある地域社会で用いられる言語体系全体をさすので、たとえ語形がたまたま共通語形と同じであっても尾小屋で使われていれば尾小屋方言の語彙ということになるのであるが、本稿では紙数も限られていることから、今回の基礎語彙調査の結果からそれぞれの分野ごとに共通語形と異なるものを中心に特徴的な語彙〈共通語と同形からの音訛形と考えられるものは省略したものもある〉を報告する。ある語形が複数の分野に関係している場合は、一部重複して載せた場合がある。また、同一項目（意味内容）で尾小屋町方言の語形・表現形が、昨年度調査・報告をした大杉町方言と異なる場合には、参考として大杉町方言の語形・表現形を「大杉」の略号とともに載せた。

なお、ここでの語彙・用例の記述（記述中、「関連」とあるのは見出し語形との関連語彙、「例」とあるのはその具体的用例であることを表わす）にあたっては表音的片仮名表記を用いた。表音的片仮名表記のうち、カ°・キ°・ク°・ケ°・コ°は、そのガ行子音が破裂音 [g] ではなく鼻音 [ŋ] であることを、他に、シェ・ジェは [ʃe] [dʒe]、クワ・グワは [kwa] [gwa] に近い音声であることを表わす。

また、名詞以外のものについては品詞名、活用のある語については [] に品詞名（略記）と活用の種類を載せた。品詞名は動詞を [動]、形容詞を [形]、形容動詞を [ナ形]、副詞を [副]、連体詞を [連]、助動詞を [助動]、助詞を [助] のように略記し、動詞の活用の種類は五段を [五]、上一段・下一段を [一]、サ変を [サ] と略記した。その他、慣用句的な表現は [慣] と略記した。

3.1 〈天地・気候〉に関する語彙

キシェツ 季節。キシェツ、ジキとも。「関連」ヒカンジキ 彼岸の季節。

ヨーキ 気候。春によく言う。

ホーコー 方角。

スマッコ 隅。スミとも。

ジベタ 地面。ジメンとも。

マンブ トンネルのこと。マンボとも。[大杉]マンボ。

スキ 物と物のすきま（隙間）。[例]スキカ°アル（〈戸が〉開いている）。[大杉]アワシャ。

ダンブリ 用水取り入れのために水をせき止めた場所。[例]ダンブリ ツクロ（水をせき止めて泳いだりする所を作ろう）。[大杉]ユー。[関連]ツツミ ^{かんがい}灌漑用に水をせき止めるための大きな堤防。

ヌマダ 水気が多く蓮根畑のようにドロドロの田んぼ。

カケロー 日の当たらない木陰など。[例]カケローニ イッテ スズム（木陰に行って涼む）。

スカ°タ 水面にうつる姿。[例]イケニ キノ スカ°タカ° ウツッタ（池に木のかげがうつった）。

アカガネ 銅の古い言い方。ドーとも。[例]アカカ°ネノ ハリカ°ネ（銅の針金）。

イシナ 石の古い言い方。イシとも。[関連]バラス 小石。イシコロ バラスより少し大きな石。

イッシャマ 岩山。

タン 石炭のことを古くはこう言った。セキタンとも。[例]タン タイテ ハシットル（石炭を焚いて走っている）。

アブラ 石油類の総称。[大杉]アッラ、アッバ。

シミル〔動・五〕 もう少しで氷がはるほど冷える。

オショライコ 寒い朝、雪が固く凍った上を歩いて遊ぶこと。普段歩けない田んぼの上などを自由に歩けるので、子どもの冬の楽しい遊びの一つだった。古くはオシラケとも。[例]オショライコニ ノル（固くなった雪の上を自由に歩いて遊ぶ）。[大杉]ソラノビ。

ゴボル〔動・五〕 雪や泥に足が深くもぐる。[大杉]ウツル〔動・五〕。

シモカ°フル〔慣〕 霜が降る。[関連]ツユカ°オリル 露がつく。

タルキ つらら（氷柱）の古い言い方。ツララとも。

アワカ°フク〔慣〕 泡が立つ。

キツネノヨメドリ 青空のもとで降る雨。日照り雨。[関連]シブシブアメ しとしと降る雨。

アラネ あられ（霰）の古い言い方。アラレとも。

ベタユキ 水気の多い雪。[関連]ボタユキ ふわふわした大きな雪。

ユキフリカ°ミ 雪が降る前になる雷。[大杉]ユキカ°ミサマ。雷はカミナリと言う。[大杉]ドンドカミ。

メーキル〔慣〕 表層なだれ。[大杉]アワ。

オーカゼ 台風。今はタイフーと言うが昔はこう言った。[例]ニヒャクトーカワ オーカゼカ° フク（二百十日は台風が吹く）。

ボンボコカゼ 南風。[例]ボンボコカゼカ° フクト ユキ キエル（南風が吹くと雪が消える）。[大杉]ボンボカジェ。

アラシ 雨まじりの台風。タイフーとも。

オヒーサマ 太陽。オヒーサン、タイヨーとも。[大杉]ヒーサマ、オヒーサン、オヒサン。[関連]オツキサン 月。ジュウコ°ヤ 満月。

ヒラチ 平野。平らな土地。ヘーチとも。[関連]ミゾ 山と山の間の窪地。ぜんまいがたくさん生えるような場所。タニ 山と山の間の窪地でミゾよりも大きい。

オカ 高さの低い平らな山。

ヤマビコ こだま（木霊）。

テッペン 頂上。**例**ヤマノ テッペン (山の頂上)。

キワ ふもと (麓)。スソ、フモトとも。

クサワラ 一面に草が生えている場所。

カワ 川。田畑に水を引く用水を言うこともある。

ショーズ 湧き水。湧き水の出る場所。

ドブイケ 雨などが溜まってできた大きな水溜まり。

カジケル〔動・一〕 寒さのために手などが凍える。**大杉**カンジル〔動・上一〕。

ヤコナル〔動・五〕 やわらかくなる。

ヌクイ〔形〕 暖かい。「暑い・熱い」の意味で使うことも。アツタカイ〔形〕とも。

アツクラシー〔形〕 暑苦しい。

ムシヌクイ〔形〕 梅雨時に蒸し暑い。ムシアツイ〔形〕とも。

サブイ〔形〕 寒い。サムイ〔形〕とも。

チビタイ〔形〕 冷たい。ツメタイ〔形〕、ヒヤートスル〔サ〕とも。**大杉**チッタイ〔形〕、チッテー〔形〕とも。

3.2 〈動物〉に関する語彙

オンツ 動物のおす (雄) の古い言い方。

メンツ 動物のメス (雌) の古い言い方。

コンモリ こうもり (蝙蝠)。コーモリとも。こうもりを追う時の唄に「コーモリ、コーモリ、来いやー、ねずみ (鼠) の化けたがやーる」というのがある。

ニャンコ 小猫。

トーリ 鳥の古い言い方。**関連**トットコ 子どもに対して鶏のことを言う言い方。イシタタキ せいらい (鶺鴒)。

ツバクロ つばめ (燕)。ツバメとも。

デデポポ 山鳩。

メモライ いもり。いもりを触るとメモライ (ものもらい <麦粒腫>) ができるからと言う。イモリとも。

ギヤワズ 蛙の総称。**大杉**ギャル。**関連**イボカエル ひき蛙 (蟱蛙)。

トキヤク とかげ (蜥蜴)。最近はトカゲと言う。**例**トキヤクワ ヘビノコ ヘビワ ジャノコ (とかげは蛇の子、蛇は蛇の子)。

トト 魚の古い言い方。オトトとも。**関連**コンカイワシ 米糠で漬けたいわし (鰯)。ニシンボ にしん (鰺) の米糠漬け。

フクノミ ふぐ (河豚)。

コゾクラ ぶり (鰯) の一番小さい時期の呼称。成長するにしたがって、フクラギ、ガンド、ブリと呼び方が変わる。

ザッコ 小さい雑魚。小さいふな (鮒) を煮たものも言う。

ヘコタ めだか (目高) よりもやや大きな小魚の呼称。

カキカイ かき (牡蛎)。カキ (柿) と区別してこう言う。

ジナ かわにな (川蛸)。たにし (田螺) を細くしたような形の巻き貝で蛸の幼虫の餌になる。

オンマトンボ とんぼ (蜻蛉) の大型のもの。鬼やんま。**大杉**ンマトンボ。**関連**カネツキトンボ 小さくて太い胴に青と黒の縞のあるとんぼ。

ブト ぶよ(蛎)。蚊よりも小さく、日中の野良仕事のときなどに飛んできて血を吸う虫。昔はこの虫が近づかないように、ぼろ布を巻いて火をつけたものを腰につけたりした。**大杉**ブト、ブトー。
オロ 小型のあぶ(蛇)。あぶはアブと言う。刺されると大変痛い。きれいな水の所にいる。
ヘクサンボ 触るとくさい匂いを出すカメムシ。
アリンコ 小さい蟻。
ゴットムシ かぶと虫。
スイッチョン うまおい。鳴き声からの呼称。
キラジ しらみ(虱)の卵。しらみはシラミと言う。
ハエボ 蠅の古い言い方。ハエとも。**例**ハエ タカル(蠅が止まる)。**大杉**ハイボンボ。
デンデンムシ かたつむり(蝸牛)。
クボ くも(蜘蛛)。**大杉**キボ。**関連**クボノス 蜘蛛の巣。
ナメクジラ なめくじ(蛞蝓)の古い言い方。**大杉**マメクジリ、マメクジ。
ハチマキミズ 縞みみず(蚯蚓)のことか。
ムカゼ むかで(百足)。**大杉**ムカジョ
オッポ 動物の尾。シッポ、オンボとも。
ボー〔動・五〕 追う。追いかける。
タツ〔動・五〕 飛ぶ。蟬や鳥が飛び立つ。
ツルム〔動・五〕 虫や動物が交尾する。**関連**サカル〔動・五〕 発情する。
ゴネル〔動・一〕 憎たらしいものが死ぬ。文句を言って駄々をこねる意も。
ツブス〔動・五〕 役に立たなくなった動物を殺す。シメル〔動・一〕とも。

3.3 〈植物〉に関する語彙

ヤサイモン 野菜の総称。
ナッパ 野菜の中の菜類(キャベツ、白菜、ほうれんそうなど)の総称。
スイカンボ いたどり(虎杖)。塩をつけて生のままで食べる。子どもの頃のおやつだった。
ニカ もみがら(粃殻)。
コンカ ぬか(糠)。米を精米すると出る粉。
ジネンジョ 細長い野生の山芋(自然薯)。ヤマイモとも。**関連**ツクリイモ 畑で作る長芋。ツクネイモ ごろっとした形の山芋。
イモノコ 里芋。**大杉**エモンコ。
ボブラ かぼちゃ(南瓜)。カボチャとも。ボブラはポルトガル語abóboraに由来し、同系の語は北陸では石川県内から富山西部にかけて広く分布している。頭の悪い人を馬鹿にして「ボブラヤ」と言うこともある。**関連**チリメンボブラ 表面がごつごつしたひだのあるかぼちゃ。トーボブラ 表面のつるつるしたかぼちゃ。**大杉**ポッバー、ポッパ。
カモリ 瓜の一種。煮て食べたり、おつゆに入れたりする。冬瓜のことか。**関連**キナウリ 黄色い色をした瓜で果物のように食べる。
ギンズイカ 黄色のすいか(西瓜)。クリームズイカとも。
デーコ 大根。
ゴンボ ごぼう(牛蒡)。
チソ しそ(紫蘇)。
ジェンマイ ぜんまい。**関連**オンナジェンマイ 食用のぜんまい。オトコジェンマイ 固くて食べら

れないぜんまい。**大杉**ジェンマイ、ゼンメー。

ボーダラ 山菜のたらの芽。

アゼマメ 大豆。田んぼの畦に植えることから。ダイズマメとも。**大杉**アジェマメ、ミソマメ、キナコマメ。

オタフクマメ そら豆。

キントキマメ 赤い色をした食用の豆

ダラマメ さやごと食べる豆の一種。

ジューロクササキ 長いさやごと煮て食べる豆。最近ハササキと言う。

ナンバ 唐辛子。ピーマン

ナンバキビ とうもろこし（玉蜀黍）。「南蛮きび」の意。今はトーキビ（「唐キビ」の意）と言う。

ナスビ なす（茄子）。

ネブカ ねぎ（葱）。ネギとも。

ヘー ひえ（稗）。戦時中に作って食べた。

ツクリブキ 畑で作るふき（落）。**関連**ノブキ 野生のふき。**大杉**フーキ ふきの総称。

ナタネナ あぶらな（油菜）。ただし、尾小屋町では作物としてあまり作らない。

フキント ふきのとう（落の薹）。胡麻和えにして食べる。フキノトとも。

モチクサ よもぎ（蓬）。ヨモギとも。

ナンキンマメ 落花生。ラッカシュとも。**大杉**ソコマメ、ナンキンマメ。

スモトリバナ すみれ（堇）の一種。うす紫色をして一本の茎から花と葉が出ている。この花の首を引っ掛けて引き合いをし、どちらの花が残るか競い合うことからこのように言う。これに似て、花と葉が別に分かれて出るものをスミレと言う。**大杉**スモートリバナ。

ベラ 花のがく。

アサシラキ はこべ（繁縷）。**大杉**アシャシャキ。

カタハ ミズナ（水菜）のこと。ヨイナとも。

ドクダメ どくだみ。赤ちゃんができてお腹が大きいとき、毒下ろしだからと言ってお姑さんが根をおろして煎じて飲ませてくれたと言う。

ハミズハナミズ ヒガンバナ（彼岸花）に似た花で、花が咲いたあとに葉が出ることからこう呼ぶ。

カキ 柿。**大杉**カーキ。**関連**柿の種類で、渋柿にサブロザ、ゴショーカキ、ミヨコカキ、ニホンザン、甘柿にフューカキ（富有柿）などがある。

ツバメ 桑の実。クワノミとも。**大杉**ツマメ、クマメ。**関連**クワ 桑の木。

スンノキ 杉の木。スキとも。**関連**スンバ 杉の葉の落ちたもの。乾燥して焚き付けに使った。スンカワ 杉の木の皮。杉の実を細い竹にこめて竹鉄砲の玉にして男の子が遊んだ。

コッサ 松の落ち葉。

バイタ 木を切って作った太い薪。**関連**ホエ 細かい枝の焚き木。タキモンとも。

ササンコ 笹竹の竹の子。**関連**竹の種類にはモーソーダケ（孟宗竹）、マダケ（真竹）、ハチク、カワフキダケ（川の縁に野生で生えている細い竹。カワブチダケとも。）などがある。

フジマメ 藤の木につく実。

コケ きのこ（茸）の総称。苔のこともコケと言う。**関連**マツタケ 松茸。スキノキコケ 杉の切り株に生える白い茸。おつゆやすき焼きに入れる。カップ 茸の一種で桃色をしている。茹でて塩漬けにしたり、煮しめに入れたりする。ネズミノテ 茸の一種。食べられるものと食べられないものがある。シバタケ 黄色い色をした茸。湯がいたりおつゆに入れたりするとつるつるする。

モー も (藻)。ウキクサとも。**関連**水の中に生える苔 (ミズゴケとも) をこう言うこともある。また地面に生える細かな苔を言う場合もある。

ヘビノゴザ しだ (羊歯植物) の一種。

ジク 植物の茎。**例**ナッパノ ハッパノ トコロト ジクノ トコロト (菜っ葉の葉の部分と茎の部分と)。

イロツク 紅葉する。

ズイ 樹木の先の部分。こずえ (梢)。

アメ 桃や桜の木、杉の木に出るやに (脂)。**関連**ヤニ 松の木のやに (脂)。

ミカイル〔動・五〕 果物が熟す。**関連**イロム〔動・五〕 稲が熟す。**例**ヨー イロンダ (く稲が) よく熟した)。**大杉**イロズク、ヨーダ。

ナラントシ 果実などがならない年。**関連**ナリドシ 果実などがよく実る年。

オエル 草などが生えることを言う古い言い方。ハエルとも。ただし、かび (黴) はハエルと言う。

トキシラズ 時期はずれに花が咲くこと。時期はずれに花が咲くと「コノハナ グラン ナイケ (この花、馬鹿じゃないの)」のように言うこともある。

シナビル〔動・上〕 植物などが水気を失って弱る。あるいは、土からはなれた作物が時間の経過で水気を失う。**関連**ウナグレトル 土に生えている植物がしおれている。(ただし、まだ元気になりそうな場合の表現)。

ネクソナル〔動・五〕 料理してあるものが腐って悪臭がする。クサル〔動・五〕とも。**大杉**ネンソナル〔動・五〕。

3.4 〈人体〉に関する語彙

コベ 頭部。コンベとも、ひたい (額) の意も。**関連**ウシロコベ 後頭部。ウシロコンベとも。マエコベ 前頭部。**大杉**コーベ。

オドリ ひよめき。赤ん坊の前頭と後頭の骨と骨の隙間で呼吸の度にぴくぴく動く所。

ボンノクソ 首筋の後ろ側の窪んだ部分。

チリ つむじ (旋毛)。ツムジとも。チリが2つあると倉を2つ建てる。つまり出世すると言われるらしい。**大杉**ズコ、ズリ、ズーリ、ズイ。**関連**ズコ 前頭部。

トク 髪を梳かす。トカス、スクとも。

パケ はげ (禿)。

ツラ 顔。対等以下の人にはしか使えない。目上の人にはカオ。

イチジューマブタ 一重まぶた (瞼)。ヒトエマブタとも。**関連**フタジューマブタ 二重まぶた。フタエマブタとも。

メンタマ 目。目の玉。

メカツヨイ〔慣〕 視力がよい。**関連**メカヨワイ〔慣〕 視力が弱い。

ヘンガラメ 斜視。ヤブニラミとも。

チカメ 近視。キンシとも。**関連**トーメ 遠視。エンシとも。カスミメ 疲労でかすむ目のこと。

トシヨリメ 老眼。

メモライ ものもらい (麦粒腫)。モノモライとも。藁を熟して結ぶと治ると言う。**大杉**メブツテ、メブツテー。

メクソ 目やに。

シバタキ まばたき (瞬き)。マバタキとも。**関連**シバタク〔動・五〕 まばたきをする。マバタク〔動・

五] とも。

マブイ〔形〕 まぶしい (眩しい)。マブシー〔形〕 とも。

ゴットバナ 子どもが垂らしているような粘りのある青色の鼻水。〔関連〕ハナミズ 風邪の時などに出る鼻汁。ハナジルとも。

テングバナ 高い鼻。天狗鼻の意。〔関連〕ハナビシャ 鼻が低いこと。シンバナ 鼻翼の広い鼻。

ハクショ ン くしゃみ。クシャミとも。

ゴロ 鳴かない蟬。先天的な聾啞者のことも言う。ゴロマとも。

ヌスツカブリ 頬かぶり。ホーカブリと言うことの方が多い。

ワニクチ 口の大きいこと。〔関連〕オチョボクチ 口の小さなこと。

クチブラ くちびる (唇) の古い言い方。

フケ° ひげ (髭)。ヒケ°とも。〔関連〕クチフケ° 口ひげ。アコ°フケ° 顎ひげ。

コトバニツモル〔慣〕 どもる。ドモル〔動・五〕 とも。〔関連〕ドモリ 言葉につまりどもる人。

ツバキ つば (唾液)。ツバとも。

ヘタ 舌。ベロ、シタとも。〔大杉〕ヘラ。

マサリバ 八重歯。〔関連〕ソッパ 出っ歯。オニバ 上の前歯2本が大きいこと。

ハキ°シ 歯茎。

ジャバラコ°エ 大声。

ゴタムク〔動・五〕 よく喋る。子どもが反抗的にものを言う。〔関連〕ダンマリ 口数の少ない無口な人。ダマリとも。

アケル〔動・一〕 食べた物を吐く。モドス〔動・五〕 とも。

シャクレアコ° 下顎が出た状態。

ノドカ°ホセル〔慣〕 喉がかわく。「喉が干せる」の意。

ウツブク〔動・五〕 うつむく。

コブシ ひじ (肘)。ヒジとも。手の指を握った状態はゲンコツと言い、コブシとは言わない。

ソラデ 手首の筋肉が痛くて力が入らない状態。

ベニサシユビ 薬指。女性がこの指で唇に紅をさしたことから。

ミカズキ 爪の根元の白い三日月型の部分。

アバラ 脇腹。肋骨。

チチクビ 乳首。

ハラソ ンゾー 内臓。「腹の臓」の意。

ドショボネ 背骨。

ケツベタ 尻。シリベタ、ケツ、ゲショ°とも。古くはヒチベタとも。ただし、ヒチベタは人によって尻の部分だけでなく、その下の太股の部分も言った。〔関連〕アカベ 脱腸。

チャンペ。 女性の性器の総称。〔大杉〕チャンペ、チャンペー。

ダンベ 男性の性器。陰茎。子どもにはチンポ、幼児にはチンチンとも言う。〔大杉〕ダンベ、チンポ。

〔関連〕タマ 睾丸。

ベーベスル〔動・サ〕 人間の男女が性交する。

ツキノモノ 月経。

オンコ 大便。クソ°とも。子どもに向かってはウンチと言う。〔例〕クソオ コク (大便をする)。

ションベン 小便。子どもに向かってはオシッコと言う。

キビス かかと (踵)。カカトとも。

モモタ もも (腿)。

ヒザカブ 膝。膝頭。ヒザコブシとも。

コブラ ふくらはぎ。こむら (腓) から。[例]コブラカ° ツル ふくらはぎが痙攣する。

ケツマズク〔動・五〕 つまずく (蹶く)。つまずき方の程度が大きい。つまずき方の程度が小さい時はツマズクと言う。

チンパオヒク〔慣〕 片足が痛いなどしてびっこをひく。[関連]カタッポチンパオハク〔慣〕 靴などを左右違うものをはく。

コチョバス〔動・五〕 くすぐる。[関連]コチョバイ〔形〕 くすぐったい。[大杉]コチョバシ〔形〕

カイ〔形〕 痒い。カユイ〔形〕 とも。

カタネ 吹き出物。

カク〔動・五〕 葛などを湯に入れて混ぜる。

エテ〔形〕 痛い。

エボ いぼ (疣)。

タッシャ 元気。「達者」から。

モノイ〔形〕 体がだるくて元気がない。新しい言い方。古くはダルイ〔形〕 と言った。

コワイ〔形〕 肉体的に疲れた状態。坂を上って「あーコワイナー」と言う。

クダル〔動・五〕 下痢をする。ハラクダル〔動・五〕 とも。

コエル〔動・一〕 太る。

ウツンバイ うつ伏せ。

オチョンコ 正座。オチャンコ、オツクバイ、オスワリとも。[大杉]ウツバ。

アクチ あぐら (胡座)。

ホーテアルク〔動・五〕 這って歩く。

カズク〔動・五〕 背中で物をかつぐ。セオウ〔動・五〕 とも。

カタク°〔動・五〕 天秤棒の両端に荷物を下げて一人でかつぐ。[関連]カツク°〔動・五〕 一人で物を肩で支えてかつぐ。

アビル〔動・一〕 泳ぐ。

オボタイ〔形〕 重い。

ヤイト 灸。

3.5 〈衣〉に関する語彙

キモン 着物 (和服類) の総称。[関連]サックリ 山仕事で着る木綿の着物。

ワタイレ 綿入りの着物の総称。ドンドコやハンチャもワタイレの一種。

ドンドコ 綿の入っている袖なしの胴着。[大杉]ドンブク。

ハンチャ 綿の入っている袖ありの胴着。着物の上に着る。

ネンネコタンゼン 子どもを背負う時に着る袖付きの綿入れ半纏。よそいきに着る。[関連]ガメ 子どもを背負う時に着る普段着の袖なしの綿入れ半纏。

ヒョージュンフク 着物の上に羽織のかわりに着るもの。^{ひとえ}単袖にカフスをつける。

エーモン 振り袖や留め袖といった女性の晴れ着。よそ行きの着物。イーモンとも。

サックリ 昔、山仕事で使った作業着。

オロシ お下がりのの着物や洋服。オフルとも。[例]コレ アネノ オロシヤ (これは姉のお下がりだ)。

アトラシカ° 新品の衣服。「新しいの (もの)」の意。

シカエシ 古くなった衣服を裏返して再製したもの。ウラカエシとも。

トンビ 男性が着る和服用の防寒着。袖がある。[関連]マント 洋服の上に着る防寒着。袖がない。

ウワッパリ 上着。

サルマタ 男性用パンツの古い言い方。

オコシ 和服を着るときに女性が使う腰巻き。

コシタ 男性用下着の股引の古い言い方。現在はステテコと言う。

パッチ 木綿の布を縫って作った男性用の下ばき。後にズボンになる。

タツキ もんぺが登場する以前に女性がいいた下ばき。後にモンペ、そしてズボンになる。

シェンダク 洗濯。汚れた衣服を洗うのはシェンダク。衣服以外の汚れ物を洗う場合はアライモンとも。[例]シェンダクモン ホシモンザオニ ホイテキタ(洗濯物を干し物竿に干してきた)。[関連]アライタ 洗濯板。アライイタとも。

ハリイタ 洗濯した布を糊付けして貼った板。[関連]ゴクンノリ ごはんを炊いてしぼった糊。枕カバーやシーツなどの糊付けに使った。

コテ 熱してしわ伸ばしに使った鉄製の道具。今はアイロンを使う。

コワジェ 足袋のこはぜ。[例]コワジェオ カケル(く足袋の)こはぜをかける)

コンモリ こうもり傘。[大杉]コンモリカサ

ハッシャク〔動・五〕 干せる。ハッシャイダ(干せた)。ホシエル、ホッシェタとも。[大杉]ハッセル〔動・下一〕

ハクモン 履き物の総称。[関連]アシタ 下駄の歯が高くなっている雨の日用の下駄。歯を入れ替えられる。[大杉]アシダ。カンカラ 歯の高さが普通のものとはアシタの中間ぐらいの下駄。シェッタ 男の人が着物を着るときに履く上等の履き物。雪駄。ホーバケ^{ほう}タ 枋の木で作った下駄。

カップリ 女の子が履く下駄。ぽっくり下駄のこと。[大杉]カップリ。

ツマカケ つまかわ(爪革)のこと。下駄のカバー。ツマカワとも。

ツカケ サンドルのような履き物をさして言う。

フカ 藁で編んだ長靴。フカグツとも。

ゴザブシ 蓑簾帽子。

カタIPP^イポチンパ 履き物の左右が揃っていない状態。フソロイとも。[大杉]カタラチンバ。

ジカタビ 地下足袋。[大杉]チカタビ。

カナ 糸。古い言い方。カタイトとも。

スピン^{しおり} 葉についている紐。[関連]キンシェン 菓子を結んである紐。

カンカンムスビ 固い(カンカン)結び方。[関連]オンナムスビ 蝶々結び、チョーチョムスビとも。

[大杉]チョームスビ。オトコムスビ 蝶々結びに対して簡単にほどけないようにする結び方。

ムスバカル〔動・五〕 (糸などが)もつれる。ムスバレル〔動・一〕、ムスバル〔動・五〕とも。[例]ムスバカッタノオ ホドク(もつれたのをほどく)。[大杉]ムスバル〔動・五〕、ムダケル〔動・一〕。

ホドケル〔動・一〕 ほころびる。[例]スソ ホドケタ(裾がほころびた)。[大杉]フクロベル〔動・下一〕。

オゾナル〔動・五〕 古くなって擦り切れる。オゾナルは、形容詞オゾイ(古い)の連用形オゾ(一)+ナルから。[例]クツカ^カ オゾナッタ(靴が古くなって擦り切れた)。

シャク〔動・五〕 裂く。[例]カミオ シャク(紙を裂く)。

イタム〔動・五〕 破れたり傷がつく。

アンモン 編み物。[関連]ウスラエル〔動・一〕 作る。

クケル〔動・一〕 まつり縫いをする。[関連]クケヌイ まつり縫い。

ユビワ 裁縫用の指貫。

オオク^ケ 一番太い針。【関連】モメンバリ 布団を縫うときに使う太い針。ツクミバリ 中くらいの太さの針。キヌバリ 細い針。

ハンノメ 針の穴。ハリノメとも。「針の目」の意。

ションバリ 編み物用の針。昔はイッポンバリとも。今はカギ^バリと言う。

キバサミ ^{ばさみ} 剪定鋏。

オカッパサン 幼女児の髪型。髪の毛を耳のあたりまでで切り揃えた髪型。

マエダカ 前髪だけを伸ばす男の子の髪型。

スル〔動・五〕 剃る。最近はソルと言う。【例】アタマ スッテモラウ（頭を剃ってもらう）。ヒケ^スル（髭を剃る）。【関連】カミスル ^{かみそり} 剃刀。ヒケ^スリとも。

ニオー〔動・五〕 似合う。ウツル〔動・五〕とも。【大杉】ニツク〔動・五〕。

シリマクリ 尻はしより。男性が言う言い方。

ウツクシー〔形〕 きれい（綺麗）。清潔な。普段はキレーよりウツクシーの方をよく使う。【例】キノウツクシー（着物がきれい）。アノ ウチワ ウツクシー（あの家は清潔だ）。ウツクシー カミ（きれいな髪の毛）。ウツクシー ヒト（きれいな人。美人。）。【関連】ハイカラナ ヒト（きれいに着飾った人）。

ハイカラナ〔ナ形〕 派手な。流行の。最新の。【例】ハイカラナ モン モットルナ（流行のものを持っているね）。【大杉】ハヤリモン 流行のもの。

メンデ〔形〕 醜い。メンデー〔形〕、メンダイ〔形〕とも。【例】メンデ ヒトヤ（ぶさいくな人だ）。

ビンボクサイ〔形〕 みすぼらしい。【大杉】ヒンソナ〔ナ形〕。

ダラシネー〔形〕 だらしない。【大杉】ショマダレ、ショマケ^タ、ダラシャナイ〔形〕。

ドロドロ 泥だらけ。【例】ドロドロン ナットル（泥だらけになっている）。

ベタベタ びしょ濡れ。

トバシリ 泥はね。【例】トバシリ カカッタ（泥はねがかかった）。

メカス〔動・五〕 おしゃれをする。【例】メカイテ ドコ イク（おしゃれをしてどこに行くんだ）。【大杉】ミー カマウ〔動・五〕。

オシロイツケル〔動・一〕 化粧をする。昔の言い方。【例】オシロイツケテ ドコ イク（化粧をしてどこに行くんだ）。

マエダレ 赤ちゃんのよだれかけ。

マエカケ 前垂れ。エプロン。

ツイボー 杖。【大杉】チボ、ツイボー、ツエ。

3.6 〈食〉に関する語彙

ママ ご飯。食事。

ヒンママ 昼飯。昔の言い方。【大杉】ヒーリ、ヒンマ、ヒンママ。【関連】ベントカ^ラ 弁当箱。

コビリ 午前・午後のおやつ。作業中の間食。【大杉】ナンカ。

スモノ 酢の物。【関連】ニタモン ^{びつ} 煮物。

コメガラト ブリキ製の米櫃。

モチアワ もち米と混ぜて搗いてアワモチ（やわらかく固くならない。普段そして正月に食べる）を作るための穀類。粟とは種類が異なる。

テンコモリ （ご飯などの）山盛りの状態。

メッコメシ うまく炊けず芯のあるご飯。

コケ° ご飯のお焦げ。**大杉**コケ°ツキ。

アカママ 赤飯。オコワとも。**大杉**コワメシ。

オカイ お粥。**例**ヒヤメシオ オカイニ スル(冷ご飯をお粥にする)。**関連**シラカ°ユ 何も具が入っていないお粥。

ニコリジル 米をといだ時に出る白い汁。昔は母乳の出ない人が母乳のかわりに赤ちゃんに飲ませた。

チャーカケママ お茶漬け。**大杉**チャーカケメシ、チャズケ。

コー 粉。昔の言い方。コナとも。

メリケンコ 小麦粉。コムキ°コとも。

イリコ 麦を鍋で煎ってひき臼でひいた粉。「煎り粉」の意。麦こがし。昔の言い方。今はウチラシと言う。**例**コムキ°オ イリコニ シテ タベル (小麦を麦こがしにして食べる)。イリコオ オユデカイテ タベル (麦こがしをお湯で混ぜて食べる)。**大杉**イッコ、エッコ。

トリコ 餅を搗いたあと、くっつかないように使う生米を挽いた米の粉。**大杉**米の粉はダコ°モン、コメノコ。

ナッパ キャベツ、白菜、ハウレン草などの菜類の総称。

コーコ 沢庵。^{たくあん}タクワンとも。**関連**コンカ 沢庵を漬けるのに使う米糠。**大杉**タックワン、タッカン。

カシワ 鶏肉。

ハベン 板付きのかまぼこ (蒲鉾)。

センマイオロシ 切り干し大根。

アブラケ° 油揚げ。アケ°とも。**関連**ミーデラ がんもどき。

ナット 納豆。甘納豆はアマナット。

オツケ 味噌汁などの汁物の総称。**関連**メッタジル 具のたくさん入った豚汁。

スマシ 醤油。ショーユとも。

クドイ〔形〕 塩味が濃い。

アマイ〔形〕 味が薄い。シオモネー〔形〕とも。砂糖の味もアマイと言う。

スイ〔形〕 酸っぱい。酢の味はスイだがレモンはスッパイ〔形〕と言う。

エカ°ライ〔形〕 あくが強く喉を刺激する状態。エカ°イ〔形〕とも。**関連**ハシカイ〔形〕 エカ°ライ程度が特に強い状態。

ウマネー〔形〕 まずい。おいしくない。ウモネー〔形〕とも。**大杉**ウモネ〔形〕

ネバコイ〔形〕 味、色、香りなどがあっさりしていない。シツコイ〔形〕とも。

トキカ°ラシ 水で溶いて作る粉の辛子。

タイハク 白砂糖。袋に「太白」と書いてあったところから昔こう言った。今はサトー。

シェンペー 煎餅。メリケンコ (小麦粉) で作った煎餅。

ボチ 餅の総称。語頭のモが同じ両唇音のボに変化した形。最近はモチと言う。種類によりシロボチ (何も入っていない白餅)、ノシボチ (伸した餅)、マルモチ (雑煮に入れたりする丸い餅)、カキモチ (ピーナッツを入れたりして焼いて作る。いわゆる「おかき」の類、アワモチ (粟餅)、キビモチ (黍餅)、ゴンダボチ (うるち米ともち米を混ぜて作る餅)、マメイタ (黒豆・白豆などの豆が8～9割入った棒状の餅で切って食べる) と言う。**関連**ボチツキ 餅つき。

ボタモチ おはぎ。

ゴツツォー 御馳走。**例**ゴツツォー シル(御馳走を作る。御馳走をする)。**関連**ゴハンノ ヨーイ シ

ル（炊事をする）。

ヨソウ〔動・五〕 ごはんを茶碗に注ぐ。酒や味噌汁はツク〔動・五〕と言うが、ごはんはヨソウと言う。モル〔動・五〕とも。

ヌクスル〔動・サ〕 あたためる（暖・温）。「あたたかい（暖・温）」意のヌクイ〔形〕の連用形ヌクー＋スルの形から。アツメル〔動・一〕、アツスル〔動・サ〕とも。

ヒヤカス〔動・五〕 水につけてふくらませる。ふやかす。

フキアケル〔動・一〕 ふきこぼれる。

サントク 囲炉裏に置いた鍋などをのせるための三本足の金具。五本足のものはゴトクと言う。

ソーケ 片方に口が開いた竹製のざる。普通のザルに比べ目が細かく、水切りなどに利用する。

ゴハンジャクシ ごんはをヨソウ（注ぐ）ための杓子。普通は木製だが最近はプラスチック製が多い。汁ものを注ぐための杓子はシャモジと言う。

マケワッパ 水を汲むためのやや大きいひしゃく。小型のものはヒシャクと言う。

フッキン 布巾。フキンとも。〔関連〕テフキン 手を拭くための布巾。

ワラダワシ 藁を丸めて作った束子。〔関連〕ニンゴタワシ 稲藁の芯の部分で作った束子。

ズンドーカメ ずん銅な形の甕。〔関連〕ゴショカメ 中身が五升入る甕。イトカメ 中身が一斗入る甕。ミソカメ 特に味噌用の甕があるわけではないが、味噌を入れるための甕をこう言うことがある。

ヒキウス 石臼。挽き臼。〔関連〕コニスル〔動・サ〕 粉にする。粉を碾く。

コメカツ〔動・五〕 精米する。

キウス 急須。キュースとも。

カラツモン 瀬戸物の総称。北陸ではかつて九州の唐津地方産の瀬戸物が多く流通したためこの名があると言われる。

チャンバチ どんぶり（丼）。茶碗鉢からの変化形。

サジ スプーン。さじ（匙）。〔例〕サジデ ヨソウ（スプーンで注ぐ）。

ヒラゴジェン 足のない平べったい御膳。〔関連〕タカゴジェン 足のついた背の高い御膳。

ユワカシ やかん（薬缶）。ヤカンと言うことの方が多い。

ショーネナシ 酔っ払い。「性根無し」の意か。意地汚い人を言うことも。

タバコニスル〔動・サ〕 仕事をひと休みして休憩する。休憩の時に煙草を吸うことから。

ハラヘッタ 「腹（が）減った」で空腹のこと。〔大杉〕ヒグルイ〔形〕

ソコナシ 大食いの人。オーメシクイとも。ソコナシは大酒飲みのことも言う。

クイケカカツ〔動・五〕 食欲がある。

アケル〔動・一〕 嘔吐する。〔関連〕ヘド 嘔吐物。

バイヤク 置き薬屋が置いていく薬。

ネクソナル〔動・五〕 ごはんが黄色く変色して食べられなくなる。〔関連〕ウメボシニ カビ ハエル ト ワリーコト アル（「梅干に黴が生えると悪いことがある」と言って、昔から穢れとされる若いお嫁さんにさわらせなかったと言う）。

3.7 〈住居〉に関する語彙

ウチ 家。

アマ 中二階の秋に藁仕事などをする部屋。

オモヤ 屋敷内の中心である建物。ハナレ（離れ屋）に対するオモヤ。分家に対する本家のことも言

う。

ドークコヤ 道具などを入れる納屋。

ヤスミコヤ 山や畑にある休憩用の小屋。

ガンショ 便所小屋。屋内の便所。便所を意味する「閑所」^{かんしょ}から。大杉 シェンチャコヤ

ニワ 家の玄関を入った所の土間。

ウチンマエ 家の玄関を出た前の場所。

シェド 家の背後の部分など玄関先を除いた家の周囲の部分。関連 シェドグチ 家の裏口。グルリ 周り。周囲。例 イドノ グルリ (井戸の周り)。

ハイト 家の入り口。

ナカシ 台所。ナカシバとも。

ドブス 下水を流す細い溝。ドブソ、ドボソとも。関連 エー 田と田の間の狭い用水溝。広い用水は ヨースイと言う。

シャボン 石鹼の昔の言い方。今はシェッケンと言う。

ハシコダン 階段。ダンバシコとも。

ハマイカ 土間から居間に上がる上がり口。

コバヤネ 丸太を薄く割った板で葺いた屋根。関連 スギカワヤネ 杉の皮で葺いた屋根。コケラブキ 神社の屋根の葺き方。他にカワラヤネ (瓦屋根)、トタンヤネ (トタン板葺の屋根) など。

ケムリヌケ 茅葺きの家の屋根にある煙出し。関連 スットヌケ 茅葺き屋根の家の天井がない部分。

ヒヤマ 煙突。

ハケシタ 軒下。関連 ハクチカワラ 軒先の部分に葺く瓦。大杉 ハクチ 家の軒先。

ハワイト 屋根の瓦を支える部分の板。関連 モヤ ハワイトの下に渡す横木。ツカ モヤを支える縦木。

ゴテバシラ 家の大黒柱。「ご亭柱」の意か。

コーマイカベ 草壁。関連 メイカタベ 板壁。

カラカミ ふすま (襖)。

ジョー 鍵。「錠」の意。カキとも。

スー すだれ (簾)。関連 ヨシスー (葦でできた簾)。

ハンダイ 食卓。「飯台」の意。

ケタツ 高さの低い脚立。キャタツの音変化形。キャタツとも。

フトキ^{ふとん} 布団。

チョーズバチ 手洗い用の鉢。今はシェンメンキ (洗面器) を使う。

ガンド^{のこぎり} 鋸の総称。ノコギリとも。関連 オカ^{おこ} 木挽きの人を使う幅広の大きな鋸。一人用と二人用がある。

ニナワ 荷物を担ぐための縄。「荷縄」の意か。自分の体に合わせて作ると言う。

ボンコ 木製の塵取り。取っ手がない。

ムコーザ 囲炉裏の四座の一つで玄関から入って奥の座。家の主人が坐る。大杉 ムコザ。

ヨコザ 囲炉裏の四座の一つでムコーザから向かって左の座。家の主婦が坐る。大杉 ヨコザ。

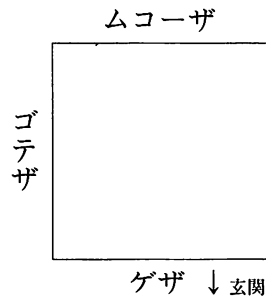
ゴテザ 囲炉裏の四座の一つでムコーザから向かって右の座。客が坐る。大杉 ヨコザ。

ゲザ 囲炉裏の四座の一つでムコーザの正面。玄関に近い座。子どもなどが坐る。大杉 シモザ

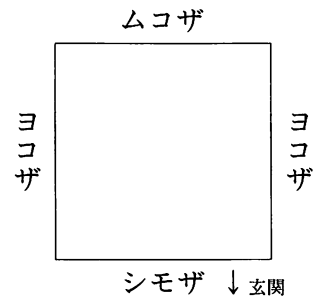
以上、尾小屋町と大杉町の囲炉裏の四座名称は次頁の図のようである。

ヘッツイサン 炊事用のかまど。ヘッツイとも。大杉 ヘッツイ

〈尾小屋〉



〈大杉〉



ビンズル 火鉢についている銅製の持ち手。高岡銅のもので持ち手に飾りがある。

ハイツケン 硫黄を塗った火付け紙。マッチ（燐寸）の昔の言い方。「早点け木」の意。今はマッチと言う。**大杉** ハヤツケン。

ゴバイ 灰の混じった炭。**関連** クズスミ 規格に合わない出来の悪い炭。

キヤス〔動・五〕 消す。**大杉** ケヤス〔動・五〕。

センバ 囲炉裏や火鉢で炭や灰をすくうのに使う金属製の道具。十能。スコップのこともセンバと言う。

サントク 囲炉裏や火鉢で鍋や薬缶などをのせるために置く三本足の金属製の道具。五本足のものはゴトクと言う。

ケブリ 煙。ケムリとも。

バイタ 囲炉裏などで焚く大きく太い薪。^{まき}**大杉** バイタ、バイダ。**関連** タクモン 囲炉裏で焚く薪の総称。

ホエ 囲炉裏などで焚く細かい枝の薪。^{たきぎ}シバとも。

タクマイ 囲炉裏の側の薪類を置いておく場所。

クワジ 火事。

ケナクサイ〔形〕 綿や髪の毛などが燃えたときに出る臭い。キナクサイ〔形〕とも。**大杉** ケナク[°]サイ〔形〕。

オル〔動・五〕 居る。

ネマル〔動・五〕 腰を下ろして坐る。正座・^{あぐら}胡座も含む。

ナコナル〔動・五〕 体を長くして横になる。

ヒンネマ 昼寝をする時間帯。**大杉** ヒンニョマ。

ウツラネ うたた寝。

ビブラ 竹製の熊手（落葉などをかき集める道具）。

ニンコ[°]ボーキ 稲藁の芯（ニンコ）で作った^{ぼうき}箒。**関連** キビボーキ 黍の穂で作った箒。シロボーキ ^{しゅ}棕櫚の葉で作った箒。

ゴミトリ 塵取り。**大杉** チットリ、チリトリ。

ムタムタニスル〔動・サ〕 散らかす。**大杉** ヤンチャニスル〔動・サ〕。

チョーケー 手桶のことを昔こう言った。テオケの音変化形。

ハヤジメ 早仕舞い。ハヤジマイの音変化形。**例** シコト ハヤジメスル（仕事を早仕舞いする）。

ウチシル〔動・サ〕 家を建てる。イエシル〔動・サ〕とも。

サイズチ 木槌。

ツッカエボー 支えの棒。

ツタコナル〔動・五〕 散らかる。〔関連〕ワケンネーコトニナル ひどいことになる。

3.8 〈民俗〉に関する語彙

オカカミ 鏡餅。〔例〕オカカミ カザランナンネ (鏡餅を飾らなくてはいけないね)。

オコサマ お講さま。浄土真宗の檀家の間で行われる定期的なお参り。2月にはお坊さんと呼んで新年会的に行なう。

ヒナサン お雛様。〔関連〕シカツセック 旧暦4月3日の桃の節句。雛祭り。〔例〕シカツセックヤネ。ヒナサン カザランナンネ (節句だね。お雛様を飾らなくてはならないね)。桃の節句 (オンナノセックとも) には菱餅ではなく落雁を供える。

オヒガシ 春と夏の彼岸。昔はおはぎを食べた。

オトコノセック 5月5日の端午の節句。鯉のぼり、武者人形を飾る。〔関連〕オンナノセック 3月3日の桃の節句。

ヤシコ 村全体で一斉にとる田植え終わりの休み。〔例〕タウエ スングラ ヤシコ センナンナ (田植えが済んだら田植え休みをしなくてはならないね)。

ヒチカツ 7月。

ショーライビ 昔、鉱山があった頃、8月のお盆に下流の方で古い茅を燃やした。「精霊火」の意。〔関連〕オボン (お盆) には尾小屋の神社で相撲をしたり、櫓を組んで尾小屋踊りというボンオドリ (盆踊り) をする。

マツリノツキ 10月のこと。秋祭りが10月であるところから。〔例〕マツリノツキヤワー (祭りの月だよ)。〔大杉〕マツリズキ (祭り月)。

ヤスンキョ 秋の稲刈りが終わったあと、村全体が一斉にとる休み。

ヒチコサン 七五三。神社でお参りをする。

ホンコサマ 報恩講。小豆をカラカラニ／サラサラニ (元の形をつぶさないように) タク (煮る)。

ススバライ 煤払い。竹の棒に縄を切ったものをつけてする。〔大杉〕ススハキ。

ボチツキ 餅つき。モチツキとも。〔例〕ボチツキ センナンネ (モチツキをしなくてはいけないねえ)。〔大杉〕ボツツキ。

ツキジメ 月末。ゲツマツとも。

オートシ 大晦日。オーミソカとも。

マイル〔動・五〕 仏様を拝む。仏様などに参る。オカム〔動・五〕 とも。〔例〕ウラ マインニ イッテクルワー (私、拝みに行ってくるよ)。〔関連〕オキョーサンアケル〔動・一〕 仏様にお経を上げてお参りする。

カンサマ 神様。

オソノエモン お供え物。

オミヤサン 神社。

シキビ^{しきみ} 桜。春に薄黄色の花が咲く。普段はシキビと言うが、小松の町の店で買うときなどはシキミと言う。

ホトケサン 仏様。

オジョーダン 仏壇、仏間 (仏壇を置いてある部屋) の古い言い方。「お上壇」の意か。今はブツダンと言う。〔大杉〕ブッダン

ホーミョー 位碑。「法名」からか。イハイとも。

オテラサン お寺。お寺のお坊さん。

ハカバ 墓地。墓場。

サオ 墓石の上部のこと。**大杉**ドボ。

イッシュキ 一周忌。イッシューキとも。

ジゾーサン お地藏様。

ドバコ 棺桶の古い言い方。15～20年位前までは真四角な箱に死人をあぐらをかかせて坐らせ、縄で縛ってコシ（輿）に乗せて運び、各村々で火葬し、夜中に焼けたかどうかを確認した。尾小屋にはドバコを作る職人もいた。最近の棺桶はネカンと言う。今は小松の火葬場へ運んで火葬にする。**大杉**トバコ。

サンマイ 火葬場の古い言い方。カソバとも。

ヨトキ° お通夜。オツヤとも。**例**ヨトキ° イカンナンネー（お通夜に行かなくてはいけないねえ）。

ミョートニナル〔動・五〕 結婚する。メオトニナル（夫婦になる）〔動・五〕、イッシュニナル〔動・五〕とも。**関連**アノヒトト イッシュニナレント（あの人と一緒にいる〈結婚する〉んだって）。

ニヤーニャ お嫁さん。お姉さん。

カンサマ 仲人の古い言い方。「神様」の意。ナカウドサン、ナコードサンとも。神社の氏神もカンサマと言う。

ショタイモチ 結婚していること。「所帯持ち」の意。

ナカモドリ 結婚して1週間目に実家に里帰りすること。オヤノウチ（実家）で1週間過ごす。

オバサ 年をとっても嫁に行かない女性のこと。

ウイノコ 初めての子。「初^{うい}の子」の意。

ネンネコヨバレ 出産後お嫁さん方の女性だけがおよばれすること。

オナカニクル〔動・カ〕 妊娠する。「お腹に来る」の意。**関連**ハラ デコナル（未婚の女性が妊娠する）。

トリアケ°ババ 産婆さんの古い言い方。サンバサンとも。

ネンネコタンゼン 子どもを背負う時に着る袖付きの綿入れ半纏。よそいきに着る。**関連**ガメ 子どもを背負う時に着る普段着の袖なしの綿入れ半纏。

ヒノタマ^{ひとたま} 人魂。ヒダマとも。

ニンブザケ 村の仕事を皆いっしょにやったあとの打ち上げの酒。

ヨンミヤ 本祭りの前夜祭。「宵宮」から。ジェンヤサイ（前夜祭）とも。昔（20年前頃）は祭りやお盆に夜太鼓を担いでたたいて村中を歩いた。

アトフキ 祭りや葬式、結婚式など大きな行事の後片づけ。片づけのあと皆で酒を飲む。

3.9 〈遊戯〉に関する語彙

アソンバ 遊び場。**大杉**アソッバ。

オンドトリ 盆踊りの時に歌を歌う人。**関連**オコ°ヤオドリ 尾小屋踊り。10月4・5日に行われるコスモス祭で踊って歌われる。

ジラアソビ 道楽。

バクチ 賭け事。カケコトとも。**関連**バクチコキ 賭け事の好きな人。

ユビキリカミキリ 指切りの昔の言い方。**例**ユビキリカミキリ センカ（指切りをしないか）。今はユビキリと言うことが多い。

オテマ 小遣い銭。コズカイとも。

カワオヨキ 川で泳ぐこと。ミズオヨキとも。**例**カワオヨキ イコサ(川に泳ぎに行こうよ)。**関連**
「川に泳ぎに行こう」と言うことを他に、ミズオ アベニ イコーサー(水を浴びに行こうよ)、カ
ワデ アソンデコーサ(川で遊んでこようよ)のようにも言う。

ウデクミ 腕相撲。**例**ウデクミ シトルコト(腕相撲をしているよ)。

ヨーイドン かけっこ。徒競走。カケッコとも。**例**ヨーイドン ショーカ(かけっこをしようか)。**大杉**
ハシリキョーソー。

ゴムデッポー Yの字の型の木にゴム紐を付けて、ゴム紐の真ん中に石をかけて飛ばすもの。

ホラトベ ソラトベ 縄跳びをしている人への掛け声。

ヒナサンカザリ お雛様飾り。

フクレンボ ゴム風船。富山の置き薬屋さんからフクレンボや四角いフーセン(紙風船)を貰った。
普通、カミフーセンと言うと丸い形のものを言った。

アカシモン 謎謎遊び。人に向かって、アンタ アカセマ(あなた謎謎の答えを当てなさいよ)と言
い、言われたほうは、アカイテ アゲル(答えてあげる)のように言った。

テマリ 毬。マリ、ボールとも。昔は自分で綿に木綿糸をカンカラカンニ(硬く)巻いて作った。

パッチ 主に男の子がする丸型の面子。打ち合いをして相手のパッチを裏返しにしたら貰える。**大杉**
カッタ。

タダ 嘘っこ(仮の勝負)。**例**イマ シルカ^カタダヤゾ。コレカラ ホントヤゾ(今するのは嘘の勝負だ
よ。これからが本当の勝負だよ)。

ミズチョンコ 水遊び。あまりよくない意味で言うことが多い。**関連**ドロチョンコ 泥遊び。

オトシアナ 雪道に作った落とし穴。あるいはそれを作って遊ぶ遊びのこと。**大杉**オチンコ。

スベランコ 冬雪のある時に、お尻の下にゴザバシ(蓑蓑帽子)の古いなどを敷いて滑る遊び。

オショライコ 真冬の寒い朝、雪の表面が固く凍った上を歩いて遊ぶこと。普段歩けない田んぼの雪
上などを自由に歩けるので、子どもの冬の楽しい遊びの一つだった。古くはオシラケとも。**例**オショ
ライコニノル(固くなった雪の上を自由に歩いて遊ぶ)。**大杉**ソラノビ、ソラアルキ。

ジャンケンボイ じゃん拳の掛け声。**関連**じゃん拳のグー、チョキ、パーにあたる言い方はグー、カ
イ、パーと言う。**大杉**へら、ハサミ、イシ。じゃん拳で二組に分ける時の掛け声は「グーとパー」
と言う。

チョンノクビ 肩車。チョンマノリとも。**大杉**サルボンボ、サルブンブ、サルノブンブ。

チッカコ 片足跳び。**大杉**ケンケン、ヒンダリコツキ。

オジャメ お手玉。オジャメの中には小豆や豆、小石などを入れた。**大杉**オジャミ。

ハジキ おはじき。ベッタラコイ(平たい)形をしている。**大杉**ハジキイシ。

チドリ 綾取り。アヤトリとも。毛糸でやる。綾取りをすることを、アヤトリオ ツカム、アヤトリ
オ トルのようにも言う。**大杉**モンド。

マゼル〔動・一〕 遊びの仲間に入れる。**例**ワタシモ マッテクレ(私も仲間に入れてくれ)。

3.10 〈教育〉に関する語彙

ナロー〔動・五〕 習う。当該方言では前掲の動詞活用表およびその解説からもわかるように、ハ(ワ)
行五段動詞の基本形は、本来の語末の、-アウ〔au〕が-オーと長音化しコー(買う)、ワロー(笑
う)、モロー(貰う)のような形となる。**例**ナロータ(習った)。

テーヤク〔慣〕 手を焼く。**関連**キカンボー 手を焼く子。きかない子。

オコル〔動・五〕 声を出してとめがめる。叱る、シカル〔動・五〕とも。

スム〔動・五〕 終わる。終える。オワルとも。〔例〕ガッコー スンダ（学校の授業が終わった／学校を卒業した）。ガッコー オワッタとも。

ハヤジマイ 早引け。早引き。早退。

イップク 休憩。〔関連〕ヒル お昼の休憩。

コーカ 小・中学校で同じ学校に通う地域。学区。「校下」から。

マチコー〔動・五〕 間違える。チコー〔動・五〕とも。〔例〕マチコータ、チコータ（間違えた）。

バツ 罰点。×印。

シキバン 字を書く時、ノートの間に挟む下敷き。

ハクボク チョーク。「白墨」の意。〔関連〕ゴフン 昔、ノートの代わりに石板を使っていた頃、石版に大きな字を書く時に使った筆記具。今で言うチョークのようなもの。先生も生徒も使った。

ナカオリ 半紙。

ボロガミ ダンボール紙。

ホンバコ 本しか入れてない小さ目の本棚。〔関連〕ホンダナ 本やそれ以外のものも入れるホンバコよりもやや大き目の本棚。

チョーメン ノート。「帳面」から。

カタイコ カタイ〔形〕は「お利口で聞き分けのよい」といった意味。従って、お利口で聞き分けのよい子。カテーコとも。

ダッチャンボー ダッチャンは「出来の悪い、駄目な」といった意味。従って、出来の悪い子。〔関連〕ダッチャンネンネ 出来の悪い女の子。

ゲット びり。ゲットー、ケツ、ケーツ、ビリとも。〔例〕ゲットーニ ナッタ（びりになった）。ゲットヤッタ（びりだった）。イチバン ケツ（一番びり）。

コーシャ 知恵。「巧者」からか。〔例〕コーシャカ° アル（何でもてきぱきやる）。〔大杉〕コーシャー。

ジー 文字。〔例〕ジー カク（字を書く）。

サンニョスル〔動・サ〕 計算する。勘定する。「算用する」から。

ウモナイ〔形〕 うまくない。下手。ヘタとも。〔関連〕ウマイ、ウンマイ

デッチボー よその人から見た弟子、見習の昔の言い方。「丁稚坊」の意か。〔大杉〕デッチボ。

ミナロー〔動・五〕 真似る。見習う。

コンキモン 根気のある人。ネバリノアルモンとも。

ゲバス〔動・五〕 貶す。^{けな}ケナス〔動・五〕とも。〔例〕ゲバイテヤッタ、ケナイテヤッタ（貶してやった）。

3.11 〈人間関係〉に関する語彙

ボー 男の赤ん坊。男の子。〔例〕ボーヤト イーナー（男の子だといいねえ）。

ネンネ 女の赤ん坊。女の子。嫁に行くまではネンネと言う。妹に対する言及称（話題にする場合）。

〔例〕ネンネカ° デキル（女の子が生まれる）。

ウイノコ 初めての子。「初^{うい}の子」の意。

ネー 女の人に対する呼称（直接呼ぶ場合）・言及称。

コドンドモ 子ども達。

ワカイシュ 若い人たち。「若い衆」から。

オヤジ 大人の男性。

トッシヨリ 年寄り。老人。

ジンジ 男性の年寄り。〔関連〕ジンジドモ 男性の年寄りたち。

バンバ 女性の年寄り。

ウラ 自分のことをさして言う自称代名詞。【関連】ウララ 私たち。ウラの複数形。

ワシ 男性が使う自称代名詞。オレは使わない。

ワテ 女性が使う自称代名詞。

ワカデモ 自分でも。

ワリヤ 同等から目下の相手に使う対称代名詞。【大杉】ワレ。

ベンコナ〔ナ形〕 年のわりに大人びた。ませた。オマセとも。【例】ベンコナ コヤナー（ませた子だねえ）。

ヒネクラシー〔形〕 老^ゝけている。

トー 父親に対する呼称・言及称。トートとも。【大杉】オツツァー、トー、オトトー。

トーチャン 夫に対する呼称・言及称。

トート 戸主。主人。亭主。父親に対する呼称・言及称としても使う。オヤジとも。年をとっていればジーとも。【関連】ショタイオ ヤル、ショタイオ ワタス 家長権を譲る。

カーカー 母親に対する呼称。カーカとも。【関連】カー 母親、妻に対するの呼称・言及称。カーカ、カーチャンとも。【大杉】オッカー、カー、オカカ。

カーカ 主婦。母親に対する呼称・言及称。【関連】シャモジオ ワタス〔慣〕 主婦権を譲る。シャモジオ ニキットル〔慣〕 息子の代になっているにもかかわらず、その母親が台所を取り仕切っている。

ジャーマ 自分の妻のことを話題にする場合の言及称。カカーとも。

ジー 祖父に対する呼称・言及称。子どもにはジーちゃんと言わせた。【大杉】ジー、オジジ。

バー 祖母に対する呼称・言及称。子どもにはバーちゃんと言わせた。【大杉】バー、オババ。

デケジージ 曾祖父に対する言及称。トッショリジージ、ヒージージとも。

デケバーバ 曾祖母に対する言及称。トッショリバーバ、ヒーバーバとも。

オッチャン 小さい子の伯父・叔父に対する呼称・言及称。成長するとオッサン、オバサンと言う。

【大杉】オッサマ。【関連】オバサン 伯母・叔母に対する名称・言及称。【大杉】オバサ

モライコ 養子。ヤシナイコとも。【関連】ムコトリ 娘の婿をもらうこと。

ムコサン 婿のことを話題にする場合の言及称。ムコサ、ムコとも。直接呼びかける場合はアンマと言う。

アトツキ 跡取り。アトトリとも。

アンマ 長男、兄に対する呼称・言及称。アンサ、アニキ、アンチャンとも。兄に対する呼称は自分が大きくなるとアニキとなる。【大杉】アンカ、アンサ。

ネンネ 長女、姉に対する呼称・言及称。アネサ、ニャーニャとも。ニャーニャは舅姑が嫁を呼ぶときの呼称、また言及称としても使われる。【大杉】チョー、アネサ、ニャー、ネーチャン。

ヨメサ 嫁のことを話題にする場合の言及称。ヨメとも。直接呼びかける場合はネーと言う。

ヨメドリ 結婚式。「嫁取り」から。【関連】ホンザケ 結納。

オッサ 次男以下の弟の言及称。オッサマとも。【大杉】ニバンオジ、オジボー。

オトコ 末っ子。

コッパオジ 男兄弟の末っ子。コッパとも。三男をさす場合も。【大杉】サンバンオジ、チサボー、コッパオジ。

スエノネンネ 女兄弟の末っ子。

ヒコ ひまご（曾孫）。ヒマコとも。

シャシャコ° やしゃご（玄孫）。

尾小屋町方言の親族語彙（言及称）体系

	+ 3 世代	+ 2 世代	+ 1 世代	0 世代		- 1 世代
				嫡子	それ以外	
男性	デケジージ	ジージ	トート	アンマ	オッサ	マコ°
女性	デケバーバ	バーバ	カーカ		ニャーニャ	

オイッコ 甥。

メイッコ 姪。

マタイトコ またいとこ（又従兄弟・又従姉妹）。

ヤシナイオヤ 養父母。

ミョート 夫婦。フーフとも。**【関連】**ヒトリミ 独り者。独身。

ゴケサ 夫を亡くした女性。後家。

イカズゴケ 適齢期を過ぎても未婚の女性。

ツレ 友達。仲間。

オモヤ 本家。

ショタイデ 分家。アトラシヤとも。**【関連】**ショタイワケスル 親の立場で分家させる。

イッケ 親類。親戚。同族・親族の総称。シンルイとも。**【例】**アソコノ ウチワ ウチノ イッケヤ（あそこの家はうちの親類だ）。**【関連】**ニショモチ 血縁が近い。イッショモチ 血縁が少し遠い。

ウチ 家。先祖代々の家。イエとも。

ネンネモリ 子守り。

エサカイ 喧嘩 ^{いさか} 諍い。**【大杉】**ヨサカイ。

エチャツク〔動・五〕 甘えていちゃつく。イチャツクとも。

イタメル〔動・一〕 手を出して力でいじめる。いびる。**【関連】**イビル〔動・五〕 言葉でいじめる。

セブル〔動・五〕 ねだる。せびる。

カスオコス〔動・五〕 親しい間柄でいたずらする。ふざける。

テンバムスメ お転婆。**【大杉】**コワロマサリ。

ダッチャンボー ダッチャンは「出来の悪い、駄目な」といった意味。従って、出来の悪い子。**【関連】**ダッチャンネンネ 出来の悪い女の子。

キカンボー 手を焼く子。きかない子。

ムズカル〔動・五〕 むずかる。

ジャマクセー〔形〕 わずらわしい。メンドクサイ〔形〕 とも。

ハデナヒト いい服を着て標準語を話すような人。

ウマイコトユーヒト 上品なことばを話す人。

モノシラズ 世間知らずな人。

アンカー 知恵遅れの人。

エチャキナ〔ナ形〕 かわいい。エチャケナ〔ナ形〕 とも。**【例】**エチャキニ ナル（かわいらしくなる）。エチャケナ コ（よく笑うかわいい子）。**【大杉】**エチャケナ〔ナ形〕

ナキメソ 気が弱くて涙が出やすい子。

ヨタカ 宵っぱり。夜遅くまで起きている人。子どもの場合には言わない。

3.12 〈社会・交通〉に関する語彙

オー〔動・五〕 会う。〔例〕ヒトニ オーテキタ（人に会ってきた）。コーツージコニ オータ（交通事故に遭った）。

ドーシトツタ 親しい人に久しぶりで会った時の挨拶ことば。ゲンキカ、シバラクブリなどとも。〔大杉〕ナニシトルンニヤ。

オワヨサン 朝の挨拶ことば。おはよう。オハヨーとも。

コンノヒト 昔の他家を訪ねて玄関で呼びかける挨拶ことば。昼でも夜でもこう言った。「この家の人（はいらっしゃるか）」の意。最近は昼であれば、コンニチワ、オヒルスンダのように言う。若い人はゴメンクダサイと言う。〔大杉〕コンネ。

オイデルカ 他家を訪ねて玄関でかける挨拶ことば。オイデルカは「はいらっしゃるか」の意で、相手の家の人の所在を尋ねている。古くはオツテカ（「いるか」の意）とも言った。夜であればコンバンワとも。〔大杉〕ゴザルカ、オルカ。

オヤスミー 寝るときの挨拶ことば。

ソンナラー 別れるときの挨拶ことば。別れる場合、夜の場合はオヤスミー、仕事の後であればゴクローサンと言う。他にマタネー、オサキニなども場合によって使う。

タダイマ 家に帰ったときの挨拶ことば。〔大杉〕イマキタワ、イマツタワ。

キノドクナー 何かしてもらったときのお礼の挨拶ことば。「ありがとう」に当たる。アンヤトーとも。古くはショッシャナ（主に女性が使った）、イトシキニとも言った。〔大杉〕ショッシャ、ショーシャ。〔関連〕ゴッツォサン 食べ物してもらったときのお礼の挨拶ことば。

ナンヤー 返事の「はい」にあたる言い方。アラ ナンヤーとも。〔大杉〕オイ、アイアイ。

ソンナイ 返事の「いいえ」にあたる言い方。ソンネー、ソンネーワ、ソンネーソンネーとも。いずれも「そうでない」の意。〔大杉〕ナーモ、ナンモ、イヤイヤ。

ヨル〔動・五〕 人が集まる。〔例〕タント ヒトガ ヨットルヨ（たくさん人が集まっているよ）。

ヒトマトメニスル〔動・サ〕 いっしょにする。〔大杉〕ヒトマジェニスル〔動・サ〕。

キカ°ネヤー 遠慮する。気兼ねする。

チャベチャベカモ 何やかやと構う。おせっかいをする。オシェッカイとも。チャベとはおしゃべりな人、おしゃべりなことを言う。〔大杉〕シェッカイ。

ベンタレ お世辞ばかり言う人。「弁垂れ」の意。〔例〕ベンタレヤー（お世辞ばかり言う人だ）。オセジュー（お世辞を言う）とも。〔大杉〕ベン タレル。

チョッカイカケル〔動・一〕 からかう。〔大杉〕カカリユー〔動・五〕、オチョクル〔動・五〕。

フロシキヒロケル〔慣〕 自慢をする。ハナタカイ〔慣〕とも。大袈裟に言う。嘘をつく。〔関連〕オーブロシキ 自慢ばかりする人。

ジェッコ 絶交。交際を一切やめること。

イランモンニスル〔動・サ〕 人を無視する。

カンニン 人に対して謝るときのことば。「堪忍」から。ゴメンナサイとも。

カンニンスル〔動・サ〕 許す。〔例〕カンニンシテヤル（許してやる）。小さな子どもに向かって言うことが多い。

テカ°カカル〔慣〕 世話が焼ける。

アシメニシル〔動・サ〕 他の人や親に頼る。**大杉**アシメル〔動・下ー〕
ダマカス〔動・五〕 ^{だま}騙す。**例**ダマカイテ ツレテク (騙かして連れて行く)。昔はウソコク〔動・五〕
 とも言った。**大杉**ウソコク〔動・五〕。**関連**ウソコキ うそをつく人。
スタル〔動・五〕 廃れる。
メンデー〔形〕 器量が悪い。体裁がよくない。みっともない。メンデ〔形〕 とも。心の醜さを表す
 場合は使えない。**例**アラ メンデー(あらみっともない)。メンデー イヌヤ(醜い犬だ)。メンデー
 アラソイ(醜い争い)。**大杉**メントナ〔ナ形〕。
ウチアケル〔慣〕 留守にする。
ダイジニスル〔動・サ〕 敬う。大切にする。**例**ダイジニシェー (大切に敬いなさい)。
メトニスル〔動・サ〕 人を見下ろす。**大杉**メトンシュル〔動・サ〕。
キッタネ〔形〕 ^{きたな}汚い。
ヨバレスル〔動・サ〕 人を呼ぶ。人を招く。ごちそうをしてもてなす。**大杉**ヨボル〔動・五〕。**関連**
 ヨバレル〔動・一〕 招かれる。ヨバレ もてなし。
ヨボル〔動・五〕 招く、呼ぶ、大声で叫ぶことの昔の言い方。今は、ヨブ〔動・五〕と言うことが
 多い。
エーハナシ おめでたい話。「よい話」の意。
シヤワシェ 幸せ。**関連**フコー 不幸せ。シヤワシェンナイ (「幸せでない」の意) とも。
コワイ〔形〕 (肉体的な疲労で) つらい、苦しい。コワイは「恐ろしい」の意味でも使う。**関連**ヒ
 ドイ〔形〕 (病気などで) つらい、苦しい。**例**ヒドカッタ (つらかった)。モノイ〔形〕 つら
 い。
ホヌオレル〔動・一〕 骨が折れる。苦勞する。ホネオレルの音変化形。
カスメル〔動・一〕 だます。ゴマカス〔動・五〕 とも。
テンポコキ 大げさな嘘をつく人。**例**ニシマタノ テンポコキ(西俣の大うそつき)。西俣の人を悪く
 言うことば。
ワヤク 人をおだてること。冗談。**例**ワヤク ユー (冗談を言う)。
ウタコー〔動・五〕 疑う。**例**ウタコーートル (疑っている)。
チャベヤ〔ナ形〕 おしゃべりだ。**関連**チャベチャベ よく話す人。
ハコタエ 口答え。
ハコムク〔動・五〕 口答えをする。人にことばで逆らう。**例**オヤニ ハコムクナ (親に口答えする
 な)。ゴタムク〔動・五〕 とも。
アテコスル〔動・五〕 皮肉を言う。意地悪を言う。
アッコー 悪口。「悪口」の音読みから。ワルクチとも。**例**アッコー ユー (悪口を言う)。
ワナル〔動・五〕 怒鳴る。ドナル〔動・五〕 とも。**例**ワナランカッテ イーワイネ (怒鳴らなくて
 もいいよ)。
オゾイ〔形〕 品物、野菜などが古くて悪い。
ヨーネー 悪い。「よくない」の意。**例**アタマ アンマリ ヨーネー (頭があまりよくない)。
サンニョワルイ〔形〕 都合が悪い。「算用悪い」の意。
カル〔動・五〕 借りる。**例**カッタ (借りた)。
ヘンカイスル〔動・サ〕 借りた物を返す。
マドー〔動・五〕 元どおりに弁償する。**例**マドッテクレ (弁償してくれ)。
ワケル〔動・一〕 配る。分配する。クバル〔動・五〕 とも。**大杉**キバル〔動・五〕。

モロー〔動・五〕 貰う。〔例〕モロタ (貰った)。
 ヤル〔動・五〕 殺す。コロス〔動・五〕とも。
 ヌスツ 泥棒。ドロボーとも。
 トル〔動・五〕 盗む。〔例〕アノヒト トッテッタワ (あの人が盗っていったよ)。
 ボー〔動・五〕 追う。追いかける。〔例〕ボーテキタ (追いかけてきた)。
 チミカク〔動・五〕 抓^{つね}る。ツメカク〔動・五〕とも。
 カヤル〔動・五〕 転ぶ。倒れる。
 ホリナケル〔動・一〕 投げる。放り投げる。
 タタッコム〔動・五〕 打ち込む。叩き込む。
 ザイショ 都会に対する田舎。村。「在所」から。〔大杉〕ザイコー, ザイシュ。
 ヤマンモン 山の方、山間地に住んでいる人。「山の者」の意。〔例〕ウララ ヤマンモンヤサケ (私たちは山の者だから)。
 グルジ 周り。周囲。グルリとも。〔例〕ウチノ グルジ (家のまわり)。
 ヘリコプター ヘリコプター。
 ダイハチ 大八車。
 ズリ そり (櫓)。〔例〕ズリニ ノッタ (そりに乗った)。
 コム〔動・五〕 混む。混雑する。手がこんで精巧である。〔例〕コンダ シコト シテアッタ (手のこんだ仕事が出来た)。
 イキアタル〔動・五〕 突き当たる。〔関連〕イキドマリ 行き止まり。〔大杉〕ユキアタリ。
 ハシッコ 外れ。端の方。
 アイソモナイ〔形〕 つまらない。
 オトナシー〔形〕 静かな。〔例〕オトナシガニ ユーナ (静かに言うんだね)。
 ツンダッテイク〔動・五〕 人といっしょに行く。「連れ立って行く」の意。
 カンニン 「ごめん」にあたる謝るときのことば。「堪忍」から。〔例〕カンニンシテモロー (許してもらう)。
 〔関連〕キノドクチャー 謝るときのことば。「すみません。申し訳ない」といった意味で使う。
 キノドクチャーとも。
 ラッキー〔ナ形〕 楽だ。ラクナーとも。
 リンキスル〔動・サ〕 やきもちを焼く。〔例〕アノヒトニ リンキスル (あの人にやきもちを焼く)。

3.13 〈行動・感情〉に関する語彙

アカス〔動・五〕 秘密などをばらす。バラス〔動・五〕とも。〔例〕アカイテヤッタ、バライテヤッタ (秘密などをばらしてやった)。
 ウマイガニ デキタ 上手にできた。「うまいのにできた」の意。
 ショマナ〔ナ形〕 もたもたした。
 エチャック〔動・五〕 甘えていちゃつく。イチャツクとも。
 セブル〔動・五〕 ねだる。ネダル〔動・五〕とも。
 オンデアケル〔動・一〕 おんぶをしてあげる。〔例〕ニンキョー オンデアケル (人形をおんぶしてあげる)。
 カタツケル〔動・一〕 片付ける。
 ヨル〔動・五〕 選ぶ。〔例〕サンニンノ ウチカラ ヨル (三人の中から選ぶ)。
 セク〔動・五〕 慌てる。急ぐ。〔例〕セクナ (慌てるな)。
 〔大杉〕シェク〔動・五〕。〔関連〕ハヨスル〔動・

サ〕 急ぐ。「早くする」の意。

ハケル〔動・一〕 落ちる。〔例〕イロカ° ハケル（色が落ちる）。

ヒラウ〔動・五〕 拾う。ヒロー〔動・五〕とも。〔例〕ホネ ヒライニ イク（火葬のあと）お骨を拾いに行く）。

アタル〔動・五〕 貰える。〔例〕メンキョカ° アタツタ（免許が貰えた）。

ケツマズク〔動・五〕 ^{つまず} 躓く。〔例〕ケツマズイテ コロンダ（躓いて転んだ）。

カヤル〔動・五〕 倒れる。カエル〔動・五〕とも。〔例〕イネ カヤルシ イヤヤネ（稲が倒れるし嫌だね）。

シル〔動・サ〕 する。

ホー〔動・五〕 這う。赤ちゃんの場合はホーとは言わず、ハウ〔動・五〕と言う。

オク〔動・五〕 ^や 止める。〔例〕タバコオ オク（煙草を止める）。

ガテン 納得。〔例〕ガテンカ° イカン（納得がいかない）。

ヘシネー〔形〕 退屈だ。ヘシナイ〔形〕とも。

オモシネー〔形〕 面白くない。つまらい。〔関連〕オモシー〔形〕 面白い。

キーツケル〔動・一〕 気を付ける。〔例〕クルマニ キーツケル（車に気を付ける）。

キーヤム〔動・五〕 心配する。キニヤム〔動・五〕とも。

ムサイ〔形〕 気掛かりな。心配な。かわいそうな。情けない。〔例〕ムサイ コ（心配な子）。ムソーナル（心配で気が重くなる）。

ハカイ〔形〕 残念だ。くやしい。しゃくにさわる。歯痒い。〔例〕ハコ°テ ミトレン（歯痒くて見てられない）。ハカイコトバッカ ユー（しゃくにさわることばかり言う）。

イトシケニ 「ありがとう」にあたる感謝の意のことば。エトシケニとも。他に「ありがとう」にあたる言い方として、キノドクナー、ショッシャナー（同輩に対して）も使う。

マア〔副〕 つい。ほんの。〔例〕マア サッキ（つい先程）。

ヨー〔副〕 よく。わざわざ。〔例〕ヨー キテクレタ（よく来てくれた）。

タイテー〔副〕 多分。〔大杉〕オーカタ〔副〕

シナシナ〔副〕 そろそろ。〔例〕シナシナ ユクカ（そろそろ行くか）。

シナート〔副〕 ゆっくり。古くはユールギト〔副〕（ゆっくりと）とも言った。〔大杉〕シナーット。

シカタナシニ〔副〕 仕方なく。しぶしぶ。古くはショーコタナシニ〔副〕とも言った。イヤイヤ〔副〕とも。

ナンデ〔副〕 なぜ。どうして。〔例〕ナンデヤ（どうしてだ）。

アク〔動・五〕 飽きる。〔例〕モー アイタ（もう飽きた）。

キーツケル〔動・一〕 用心する。「気を付ける」から。〔例〕キーツケヤ（気をつけなさいよ）。

コンジョヨシ 気が良すぎる人。お人好し。

ネンコ°ロナ〔ナ形〕 丁寧で気のいい。

コンジョワル 意地悪。〔関連〕ツムリ、マカ°リ つむじ曲がりの人。素直でない人。ツムジマカ°リ、コンジョマカ°リとも。

アテコスキ° 何の関係もないのに、いじめる目的で嫌なことを言ったり、やること。

イタメル〔動・一〕 手を出して力でいじめる。いびる。〔関連〕イビル〔動・五〕 言葉でいじめる。

ヘンクツモン わざと他人に逆らう人。

ショーワル 性格が悪い人。〔関連〕ショーノワルイ〔形〕 性格が悪い。

ゴーハル〔動・五〕 我を張る。意地を張る。「業を張る」の意か。

ケナルイ〔形〕 羨ましい。〔関連〕ケナルカル〔動・五〕 羨ましがる。

キノイーヒト 気持ちの優しい人。

キママニ〔副〕 好き勝手に。「気ままに」から。

カタイ〔形〕 感心な。利口な。素直な。カテー〔形〕とも。〔例〕カタイ ボー (利口な男の子)。カタ
イネー (お利口だねえ)。カテー コヤ (感心な子だ)。

キカン 「聞かない」の意で、言うことを聞かなくて駄目な。〔例〕キカンコト ユーナマ (わがままな
ことを言うなよ)。キカン コ (言うことをきかない、わがままな子)。キカン ボーヤ (言うこと
を聞かない男の子だ)。

グッチャン 駄目な。「埒明かぬ」からの変化形。グチカンとも。〔大杉〕グチャカン、グチカン。

タールイ〔形〕 馬鹿馬鹿しい。つまらない。ツマランとも。〔例〕タールイコト シンナ (馬鹿馬鹿し
いことをするな)。〔大杉〕オモッショナイ〔形〕。

オトロシカリ 怖がり。臆病な人。

ヤンチャナ〔ナ形〕 乱暴で行ないが悪い。

ボッコリ 性格が穏やかでおとなしい。

イチカイモン 頑固な人。ガンコモンとも。〔大杉〕ガンコナ〔ナ形〕。

コンキモノ 根気のある人。辛抱強い人。頑張り者。〔関連〕コンキケナ〔ナ形〕 根気のある。辛抱強
い。コンキエー〔形〕 根気がある。〔例〕アノヒトワ コンキエーナ (あの人は働き者だね)。

ムチャ 無理。ムリとも。〔例〕ムチャ シンナ (無理をするな)。

ゲン 縁起。〔例〕ゲンカ° ワルイ (縁起が悪い)。

ゴーヨク けち。欲張り。「強欲」から。〔大杉〕ヨクナ〔ナ形〕。

ガンコナ〔ナ形〕 程度が激しい。きつい。

マメナ〔ナ形〕 働き者。〔関連〕キマメナ〔ナ形〕 よく気のつく。コマメナ〔ナ形〕とも。

テンポ〔副〕 大変。すごく。〔例〕テンポ タカナイカ (すごく高くないか)。〔関連〕テンポナ〔ナ形〕
予想以上にひどい。〔例〕テンポナ コトヤ (予想以上にひどいことだ)。テンポナ ヒトデヤッタ (予
想以上に大変な人出だった)。

ドラ 愚かなこと。馬鹿。また、そのような人。ドラケ、アホンドラとも。語源的にはタラズ(く頭が)
足りない)→タラズ→ドラと変化したと考えられる。

ハシカイ〔形〕 主に知的に賢い、ずる賢い。

コーシャナ〔ナ形〕 行動が利口な。甲斐性がある。要領がいい。

リクツナ〔形〕 物分かりがよくおとなしい。リクツナは人以外に対しても言う。〔例〕リクツナ タテ
カタ (実に上手な建て方)。

ワロー〔動・五〕 笑う。

エチャケナ〔ナ形〕 愛嬌がある。女の子に対して言う。〔関連〕チャメ 愛嬌のある。お茶目な。アイ
キョーマク〔慣〕 愛嬌を振り撒く。

ニンカシ〔形〕 陽気な。愉快だ。賑やかだ。

イサドイ〔形〕 元気が良い。勇ましい。

シンキクサイ〔形〕 陰気だ。

オベンチャラコク〔動・五〕 ご機嫌をとる。

ミエバリ 見栄っ張り。〔例〕アノヒトワ ミエバリヤ (あの人は見栄っ張りだ)。

エサル〔動・五〕 威張る。エバル〔動・五〕とも。怒るの意でも。オコル〔動・五〕よりもエサル
の方が怒り方の程度が強い。〔例〕アノ センセー エサツトル (あの先生、怒っている)。

オトロシー〔形〕 恐ろしい。怖い。【例】オトロッシャー（怖いねえ）。
キョクナ〔ナ形〕 滑稽な。面白い。
ジョンナ〔ナ形〕 怪しい。おかしい。ヘンナ〔ナ形〕とも。【例】ジョンナ ハナシ（怪しい話）。
スッキヤ〔ナ形〕 好きだ。【例】タバコ スッキヤ（煙草が好きだ）。
イヤヤ〔ナ形〕 嫌だ。嫌いだ。キニクワンとも。【例】キョーワ コレ イヤヤ（今日はこれは嫌いだ）。
【関連】コスカン〔形〕 気に入らない。嫌いだ。
イリイリスル〔動・サ〕 他人の様子を見ていて歯痒くていらいらする。
アセクラシー〔形〕 気持ちが落ち着かなくて焦る。セワシナイ〔形〕とも。【関連】コゼワシー〔形〕
 自分のすべきことができなくて心が落ち着かない。
セーモム〔動・五〕 腹を立てる。【大杉】シェーモム〔動・五〕、シャモメル〔動・下一〕
ケッコーナ〔ナ形〕 気持ちの満足する。楽しい。タノシミナ〔ナ形〕とも。【例】アー ケッコーナ オ
 マイリヤッタ（ああ、ありがたい満足なお参りだった）。【大杉】オモイデナ〔ナ形〕。
ウレシヤ〔形〕 嬉しい。【大杉】ウルシヤ〔形〕。
アタケル〔動・一〕 おどける。ふざける。アダケル〔動・一〕、アザケル〔動・一〕とも。
カスオコス〔動・五〕 おどける。ふざける。【関連】カスンナル〔動・五〕 ふざける。
サビシー〔形〕 寂しい。サミシー〔形〕とも。
タッシャヤ〔ナ形〕 元気だ。【例】タッシャナ ヒト（元気なひと）。
ソクサイヤ〔ナ形〕 元気だ。【例】ソクサイデ アルヨーニ ショーブユ スル（元気でいられるよう
 に菖蒲湯をする）。【大杉】ソッサイヤ〔ナ形〕。
ダンナイ〔形〕 大丈夫だ。ジャマナイ〔形〕とも。【関連】ヘーデモネー 平気だ。大丈夫だ。ダンナ
 イ、ジャマナイに比べ、俗っぽいことば。
コワイ〔形〕 （肉体的な疲労で）つらい、苦しい。コワイは「恐ろしい」の意味でも使う。【例】コワ
 イメニ オータ（つらい目にあった）。イキカ° コワナッタ（息がづらくなった）。
ヒドイ〔形〕 （病気などで）つらい、苦しい。【例】ヒドカッタ（つらかった）。
モノイ〔形〕 体がつらい。
オンニキル〔動・一〕 世話になる。迷惑をかける。【例】アンタニ オンキタワー（あなたに迷惑をか
 けたなあ）。
ヨワル〔動・五〕 困る。
シャーネー〔形〕 仕方がない。シャーナイ〔形〕、シャーナシヤ〔ナ形〕とも。
チャーツカン 仕方がない。
ヒツコイ〔形〕 しつこい。シツコイ〔形〕、ネチッコイ〔形〕とも。
タチ 性質、性格。【例】タチ ワルイ（性質・性格が悪い）。
ママウマイカヤ けじめがない。【関連】ママウマイ カオ シトル けじめのない顔をしている。
キヨイ〔形〕 器用な。「器用ナ〔ナ形〕」が形容詞～イ（赤イ、白イ等）の形に類推し「器用イ」と
 なったものか。【例】テノ キヨイ ヒト（手の器用な人）。

3.14 〈時間・空間・数量〉に関する語彙

トキ 時間。ジカンとも。【例】トキカ° タツ（時間が経つ）。
キンノ 昨日。【関連】キンノノアサ 昨日の朝。
ヒラカリ お昼の食事のこと。【例】ヒラカリヤゾー（昼ご飯だよ）。
タッチ 夕方、日が暮れるまでの6時から7時頃の時間帯。

ヨサリ 夜。

イチニチハサミ 1日おき。イチニチオキとも。

ヨドーシ 一晚中。「夜通し」の意。

ヒナカ 午後の半日。

ツキジマイ 月末。ゲツマツとも。

ウッソー 後ろ。【例】ツイタテノ ウッソー (衝立ての後ろ)。【関連】ウッソームキ 後ろ向き。

アイサ^{あいだ} 間。アワシャとも。最近はいだと言ふことが多い。

トッパナ 一番端。【関連】キリッパシ 切れ端。キノコッパ 木の切れ端。キノコッパデモ サトーツ
カタラ ウマイ (木の切れ端でも砂糖を使つたらおいしい。つまり、どんな不味いものでも食べら
れるという意味)。

コンツキ[°] この次。また。コンタシャとも。【例】コンツキニ ショー (この次にしよう)。

ヨンベ 昨日の晩、ゆうべ、ユンベとも。

オトツイ 一昨日。

サキオトツイ 一昨昨日。

キンノ 昨日。

キャー 今日。「今日は」の意でも。

アシタンバン 明日の夜。

エマ 今。イマとも。【例】エマワ ヨイ ジダイヤ (今はよい時代だ)。

トーニ〔副〕 とくに。【例】トーニ オワツトル (とくに終わっている)。

ヤカテ〔副〕 もうすぐ。【例】ヤカテ クルヤロー (もうすぐ来るだろう)。

ニワカノ 急な。【例】ニワカノ オキヤクサン (急なお客さん)。【関連】ニワカニ〔副〕 急に。【例】ニワ
カニ ヒトカ[°] キテ (急に人が来て)。

アタマデ 初めに。最初に。「頭で」から。【例】アタマデ アジ ツケル (はじめに味をつける)。

セーテ〔副〕 すぐに。

ジキ〔副〕 すぐ。ジキニ〔副〕 とも。

ヘシネー〔形〕 遅い。待ち遠しい。【例】ヘシネーナー (〈長く待ちくたびれて〉遅いなあ)。アルクノ
カ[°] ヘシネー (歩くのが遅い)。

ハヤ〔副〕 早くも。【例】ハヤ キタカ[°]カ (早くも来たのか)。

マニオー〔動・五〕 足りる。間に合う。

タント〔副〕 たくさん。【例】タント ヒトカ[°] ヨツトルヨー (たくさん人が集まっているよ)。タント
アル (たくさんある)。タント タベル (たくさん食べる)。

ヨーケ〔副〕 たくさん。【例】ヨーケ モロタ (たくさん貰った)。【大杉】ヨーケ〔副〕、ヨケ〔副〕。

デカト〔副〕 たくさん。デカトー〔副〕 とも。【大杉】デーコ〔副〕、デッカイコト〔副〕。

エッペ〔副〕 いっぱい。たくさん。【例】エッペ アル (いっぱいある)。

テンポ〔副〕 大変。すごく。【例】テンポ タカナイカ (すごく高くないか)。【関連】テンポナ〔ナ形〕 予
想以上にひどい。【例】テンポナ コトヤ (予想以上にひどいことだ)。テンポナ ヒトデヤッタ (予想
以上に大変な人出だった)。

アツタケ〔副〕 あるだけ。ありったけ。【例】アツタケノ チカラオ グス (ありったけの力を出す)。

チョッコ〔副〕 少し。ちょっと。【例】チョッコシカ ナイ (少ししかない)。チョッコシカ フラナンダ
(少ししか降らなかった)。モー チョッコデ スンダノニ (もう少しで済んだのに)。

チョッコリ〔副〕 少し。チョッコとも。【例】チョッコ シッサケ (少しするから)。

エランコト 余計なこと。【例】エランコト ユーナ（余計なことを言うな）。【大杉】イランコト。

タラン 足りない。不足。

ドンダケ いくつ。いくら。どれだけ。【例】ドンダケ コータ（いくつ買った）。ドンダケ マッテモ コン（いくら待っても来ない）。

ヨム〔動・五〕 数える。【例】カズ ヨンドケ（数を数えておけ）。

ナンカ 七日。ナヌカとも。【関連】人が亡くなった後の1週間目をヒトナヌカ、3週間目をミナヌカなどと言う。

ヘン 回。イッペン（1回）、ニヘン（2回）、サンベン（3回）のように数える。

ワ 束。把。稲などの束を数える数え方。【関連】タバ 束。稲の場合は12ワをひとまとめにして縄で縛ったものを～タバと数える。

タンボ 田の面積の反。「反歩」の意。タンブとも。一反は10アール。イッタンボ（一反）、二タンボ（二反）と数える。

スッパリ〔副〕 すっかり。スッキリ〔副〕 とも。【大杉】ホッコリ〔副〕。

グルジ 周り。マワリとも。【例】ウチノ グルジ（家のまわり）。【大杉】グルリ。

コンノ 自分の家の。この家の。【例】コンノ トーチャン（この家の父さん）。

カド 玄関の外。家の前の場所。

トナン 隣。トナリのリガンに変化した形。【例】トナンノ ヒト（隣の人）。

タケー〔形〕 高い。タカイ〔形〕 とも。

セバイ〔形〕 狭い。シェマー〔形〕、セマイ〔形〕 とも。

ヨテ 自分に向いている。得意だ。エテ（得手）の音変化形であろう。【例】ヨテンネー シコトヤ（自分には向いていない〈得手でない〉仕事だ）。

ヨセル〔動・一〕 集める。【例】ヒトオ ヨセル（人を集める）。

エノク〔動・五〕 動く。

エク〔動・五〕 行く。イクの音変化形。【例】オヒサン エカッシャッタ（お日様がお沈みになった）。

オマス〔動・五〕 与える。【例】ヒトニ オマス（人にあげる）。

モー〔動・五〕 回る。マワル〔動・五〕 とも。【例】メカ° モートル（目が回っている）。

ホール〔動・五〕 投げる。捨てる。ホル〔動・五〕 とも。【例】ホーッテオイデ（捨てておいで）。。

ソンナリ そのまま。【例】ソンナリデ エーワ（そのままでもいいよ）。

デカイ〔形〕 大きい。広い。デケー〔形〕 とも。【例】デコナッタ（大きくなった）。デケー ハタケ（広い畑）。

チンチャー〔形〕 小さい。チーサイ〔形〕 とも。

ベッタラコイ〔形〕 平たい。

ハスカイ 斜め。【例】ハスカイ ナットル（斜めになっている）。

カタガル〔動・五〕 傾く。【例】ウチャ カタカ°ットル（家が傾いている）。

マルノミ まるまま全部飲むこと。【関連】グットノミ 嚙まずに飲むこと。

ホセホセンナル〔動・五〕 乾いてからからになる。【例】ノドカ° ホセホセンナル（喉がからからになる）。

シミル〔動・五〕 凍る。【関連】シメル〔動・五〕 湿る。

フルシー〔形〕 古い。ク活用の「古い」をシク活用に類推して変化させた形。【例】フルシナットル コト（古くなっていること）。フルシサケ ステヨ（古いから捨てなさい）。

オゾイ〔形〕 古くてぼろい。

ガンコナ〔ナ形〕 きつい。

エライ〔形〕 つらい。

ヤラカイ〔形〕 柔らかい。

キツイ〔形〕 強い、丈夫だ。〔例〕アノコ キツイネ(あの子強いね)。カラダカ° キツイ(体が丈夫だ)。

ネンコ°ロナ〔ナ形〕 丁寧な。〔例〕ネンコ°ロナ アイサツ(丁寧な挨拶)。〔関連〕キーハッテ 丁寧に。

「気を張って」の意。ジャジャムナイ〔形〕 だらしない。

ヤンチャナ〔ナ形〕 乱暴な。ぞんざいな。子どものすることに向かって言うことが多い。

ソソーナ〔ナ形〕 いい加減な。ソソナ〔ナ形〕 とも。

ダチャカン 駄目。駄目だ。「埒開かぬ」に由来する形。〔関連〕クツツリセン 納得がいかない。

ムツカシー〔形〕 難しい。〔例〕ムツカシー ヒトヤ(難しい人だ)。ムツカシー カオ シトル(難しい顔をしている)。

シナシナ〔副〕 ゆっくり。〔例〕シナシナ セーヤ(ゆっくりしなさいよ)。

アブネー〔形〕 危ない。アブナイ〔形〕 とも。〔例〕アブノテ ミトレン(危なくて見ていられない)。

〔大杉〕アンネ〔形〕。〔例〕アンネ メニ オータ(危ない目に会った)。

ヤブク〔動・五〕 破る。ヤブル〔動・五〕 とも。〔例〕フスマオ ヤブイタ(ふすまを破った)。

ヘク°〔動・五〕 剥ぐ。ハク°〔剥ぐ〔動・五〕〕とは意味が少し違えて用いられているようだ。

オンナシ 同じ。オンナジ、イッショとも。

チコー〔動・五〕 違う。変わる。

モル〔動・五〕 漏れる。〔例〕スイドーノ ミズカ° モットル(水道の水が漏れている)。

フタク°〔動・五〕 閉じる。ふさぐ。フサク°〔動・五〕 とも。〔例〕メオ フタク°(目を閉じる)。ホン
オ フタク°(本を閉じる)。

ヒツク〔動・五〕 くつつく。クツク〔動・五〕 とも。

クー〔動・五〕 刺す。食う。〔例〕カニ クワレタ(蚊に刺された)。

イロー〔動・五〕 手でもてあそぶ。「弄う」から。〔例〕モノ イロー(物を手でもてあそぶ)。

ヒーロー〔動・五〕 拾う。ヒラウ〔動・五〕 とも。〔例〕ヒーローテキタカ(拾ってきたか)。〔大杉〕ヘラウ〔動・五〕。

カバイロ 昔は橙^{だいだい}色のことをこう言った。「樺色」の意。

カキイロ 橙色。オレンジ色をこう言うことも。「柿色」の意。

チャラチャラカ°キ いい加減な書き方。

ムナイ〔形〕 体調が悪い。モノイ〔形〕、モナイ〔形〕 とも。

コワス〔動・五〕 お金を細かくする。クズス〔動・五〕 とも。

ズル〔動・五〕 下がる。〔例〕ズボン ズツテキタ(ズボンが下がってきた)。

ワリー〔形〕 悪い。

3.15 〈職業〉に関する語彙

ゴボサマ 僧侶。僧侶の丁寧な言い方。〔大杉〕ゴボサン、ゴボーサマ、〔関連〕ボンサン 僧侶。ポーズ 僧侶に対する蔑称。

マジナイシ 祈禱師。

シェンシェー 教師、先生。

ダンナサン 子どもに向かって親が警察官のことをこう言った。ジュンサとも。〔例〕ダンナサン ニューゾ(警察の人に言うぞ)。

エシャ 医者。

シッチャ 質屋。

タンモノヤ 呉服屋。「反物屋」の意。

シダッシャ 仕出屋。シダシヤとも。

ノンミヤ 飲み屋。

アンマサ あんま（按摩）。マッサージ師。アンマサンとも。

ニンブ 力仕事をする人夫の総称。土木作業をするドカタなども含む。

テショクオツケル〔動・一〕 手に職をつける。

カベヤ 左官屋。

カンショダイク 下手な大工。「閑所（便所）大工」の意で、便所しか作れないような下手な大工の意か。【関連】 テコ° 大工の手伝い人。

アキンド 商人。ショーバイヤとも。【大杉】アキナイヤ。【関連】ショーバイヤ 商家。

オロッシャ 問屋。トイヤ、トンヤとも。

フルドク°ヤ 古物商。【大杉】フルモンヤ、コットモンヤ。

ボテ 天秤棒に商品を下げて売り歩く商人。フリウリとも。【例】アノヒト アソコデ ボテ シトッタ（あの人があそこで天秤棒担いで行商していた）。

カンジャ 鍛冶屋。

クスリヤ 薬屋。薬局。クスリヤ、ヤッキョクとも。

アオクサヤ 八百屋。「青草屋」の意。【大杉】ヤサイモノヤ、アオクサヤ。

ヒャクショー 農夫。農業。農家。

テッポーウチ 鉄砲を使って狩りをする人。

コビキサ 木を切ることを職業にしている人。「木挽き」から。コビキサンとも。

アキナイ 商売。

ミシェ 店。

ハカイク〔動・五〕 はかどる（捗る）。物事が順調に進む。

オトクイサン 得意客。トクイサンとも。

オットメ 寺の僧の^{ごんぎょう}勤行。

3.16 〈農・林・漁業〉に関する語彙

ヒャクショー 農家。【大杉】ヒヤッショー、ヒャクショー。【関連】ヒャクショーコ°ヤ 農作業用の小屋。

バイタコ°ヤ ^{たきぎ}薪小屋。

ホシアカル〔動・五〕 晴天が続いて水田の水がなくなる。

ヒオイ 日除け。「日覆い」からか。ヒヨケとも。

ヌマダ 1年中水の抜けない湿田。【関連】ハンヌマ 半分ほど水がある田。ハサバダ まったく水が無い田。

ナキ°バタ 焼畑。ナキ°ハタとも。

クロカリ クロ（土手の高い畦）の草を刈ること。

アゼマメ 大豆。畦に植えて作ったことからこの名がある。

ヌカ 粃殻。モミヌカ、モミカ°ラとも。【関連】コンカ 糠。【例】ゲンマイ コーテ コンカオ オトス（玄米を買って糠を落とす〈精米する〉）。

イー ^{ゆい}結。田植えや稲刈りなどの農繁期に、お金を出さずお互いに労働を交換し合うこと。イーシア

ンコとも。**【関連】**イーシアンコ ショーサ（お互い仕事の手伝いをしあおうよ）。

アラコ[°]ネ 春の田植え前、一番最初に田を荒く起こしたあと、田に水を溜めて馬鍬で柔らかくすること。**【大杉】**アラコ[°]ナシ、アラコ[°]ネ。

イブリ Yの字型の棒に横長の細い板がついた農具。田植え前に水を入れた田の土をこれで平にならす。

ノシロダ 苗代田の昔の言い方。ナワシロダの音変化形。

ナエウチ 昔、手で田植えをした頃、植えるために予め田のあちこちに苗を投げておくこと。**【関連】**ウセナエ 田植えのあと、植えもらした所や苗が浮いた所に補植する苗。

カリアケ[°] ボタモチ 稲刈りのあとの祭りで食べるおはぎ。

ヤシコ 村全体で一斉にとる田植え終わりの休み。**【例】**タウエ スンダラ ヤシコ センナンナ（田植えが済んだら田植え休みをしなくてはならないね）。

スクル〔動・五〕 菜っぱ類の苗床から不要なものを間引く。大根などがたくさん生えている場合に不要なものを間引く。ツマム〔動・五〕とも。

ハヤイモン 収穫の早い早稲の稲。**【関連】**オクテ コシヒカリのような、収穫の遅い晩生の稲。ナカテ 収穫がハヤイモン（早稲）よりも遅くオクテ（晩生）よりも早い稲。

ナンバキビ とうもろこし（玉蜀黍）。

ナンキンマメ 落花生。**【大杉】**ソコマメ、ナンキンマメ。

ナッパ 野菜類の総称。

ソク 稲束のひとつまとまりのこと。12把^わで1束^{そく}。

イネコキ 稲や麦を茎から取り去ること。脱穀すること。**【関連】**ダッコッキ 脱穀機。ヤタスベ 脱穀の時に出る細かい藁しべ。

モミスリ 稲の籾殻を取り去って玄米すること。

ウススリ 精米。玄米を白米にすること。

ハサカケ 稲を乾燥させるためにハサ（稲架）に掛けること。

ジボシ 籾を乾燥させるために家の玄関先などに筵を敷いて干すこと。

ヤスンキ[°]ヨ 秋の稲刈りが終わったあと、村全体が一斉にとる休み。

ツクリ 「作」の意で収穫量をさして言う。**【例】**ツクリカ[°] ヨカッタ（よく収穫できた）。

ネツ いもち病。**【関連】**ヒエネツ 用水から田への水の取り込み口付近が冷えて発生したいもち病。

オドシ かかし（案山子）。

ネカリカ[°]マ 柄の長さが1 m50cm位ある大きくて丈夫な鎌。**【関連】**ノコキ[°]リカ[°]マ 刃の部分が鋸状になった稲を刈り取る鎌。イネカリカ[°]マとも。

ビブラ 除草用の鉄製の爪の熊手。竹製の熊手もビラブと言う。

ミツク[°]ワ 土起こし用の先が三つに分かれた鍬。**【関連】**ヨツク[°]ワ 畦塗りに使う先が四つに分かれた鍬。

ニンナワ 物を背負うときに使う縄。**【大杉】**ニナワ。

ユク[°]サ 畳表の材料になる藁草^{いぐさ}。

スイノ 一番目の細かい篩。石臼で挽いたものを粉と皮に分けるときに使う。

ケンドン 米用の篩。

トミ 籾、麦、豆などを風に当てて実と殻を選り分ける道具。唐箕^{とうみ}。**【大杉】**トーミ

ワラカチ 藁を打つ槌。

ヒキウス 石臼。

イズミ 藁で編んだ育児用の嬰兒籠。[大杉]イズメ。

ニナイボー 二人で物を運ぶときに二人で担ぐ棒。棒の真ん中に荷物を下げる。

タモケ 人糞を入れて運ぶための肥桶。^{こえたご}コヤシオケとも。

ミズグルマ 米搗きなどに使った水車。^{すいしや}

ミナクチ 用水から田への水の取り込み口。

シリミト 田から水を出すための水の落とし口。[大杉]シリント。

ヨースイニンプ 用水に水を引くために掃除などの作業をする人夫。

ツツミ 灌漑用水の水を溜める溜池。

セナカチ 背負って物を運ぶための木製の道具。「背中あて」から。[大杉]セータ。「背板」から。

エコ 背中に担ぐ藁製の籠。[例]アマデ ワラジ エコオ アム (中二階の作業場で草鞋や背中に担ぐ藁製の籠を編む)。

ハタケモン 畑で穫れる作物。[関連]ツクリモン 米を含む作物の総称。

ガンド ^{のこぎり}鋸。

バイタ 太い割木。[関連]ホエ 木の小枝を集めた柴。タクモン 焼き物の総称。

ウマオケ 馬の飼料を入れる桶。秣桶。[関連]マンサ 秣。

ウマクツワ 馬の轡。^{くつわ}

ガンバサミ 刃のついた罾。

カイコサマ 蚕。

コーソ 麻。

ハタ 織機。[大杉]ハタコ^{ごり}。

ホツタイ 川で鮓を獲るための竹で作った三角の籠。川下の方ではブツタイと言う。

3.17 〈勤怠・難易・経済〉に関する語彙

ドンダフル〔動・五〕 仕事もせず何もしないで遊んでいる。[例]ドンダフッテ ヤーナンネ (仕事もしないで遊んでいて嫌だね)。

ドンダクレ 仕事はするが、賭け事をしたり、酒ばかり飲んで怠けている人。ドンダクモンとも。ドーラクモンとも。

リキム〔動・五〕 頑張る。[例]リキンデ スル (頑張ってる)。

オーチャクモン 横着な人。

アンバイ 調子。グアイとも。[例]カラダノ アンバイカ° ワルイ

フンジョナ〔ナ形〕 〈何かが不足したりして〉不自由な。

コー〔動・五〕 買う。カウとも。

ジェン お金。費用。昔はジェニとも言った。[例]ジェンカ° カカル (お金がかかる)。

サンニョスル〔動・サ〕 計算する。予算を立てる。「算用する」から。[関連]ソロバンスル〔動・サ〕 利害の打算をする。

ネ 値段。ネダンとも。

カンジョーモロタ お金を稼いだ。

モーケル〔動・一〕 得をする。

オヤケ お金持ちの家。[大杉]ジェンモチ ダンショ ショタイモチ。

シンダイ 財産。

シンカイジェン ヘそくり金。ヘソクリとも。

ヨクンボ 欲張り。あるいは欲張りな人。ヨクバリとも。

アシェゴシェー〔形〕 次々に用ができて忙しいこと。[大杉]アッシェゴシ〔形〕。

ショワシナイ〔形〕 忙しい。せわしない。

アツラヤ〔ナ形〕 もったいない。「もったいない」の意の「あたら（可惜）」から。モツイナイ〔形〕とも。

キョクナ〔ナ形〕 突拍子もない。^{おか}可笑しな。[例]キョクナコト ユー（突拍子もないことを言う）。

ダラコキ 馬鹿なことばかり言う人。

ヤクンタツ〔動・五〕 役に立つ。

ジャマクサイ〔形〕 面倒くさい。面倒だ。メンドクサイ〔形〕とも。

3.18 〈助詞・助動詞・その他〉に関する語彙

前章「2. 尾小屋町方言の概要」〈2.3 文法〉で記述したのでここでは省略する。

4. 尾小屋町方言・松岡町方言の待遇表現

ここでは、今年度実施した尾小屋町方言の待遇表現調査の結果と、以前に筆者は担当した同じ郷谷川流域の松岡町方言の待遇表現調査の結果を報告する。後者は、現在刊行中の国立国語研究所編『方言文法全国地図』のための調査の一部で、1981年に実施したものである。

4.1 尾小屋町方言の待遇表現

今回の調査では、昨年の大杉町方言の待遇表現に続いて、尾小屋町方言の待遇表現の概要を知るために、独自に待遇表現調査票を作成し、尾小屋町出身・在住の一人高年層女性話者(川上トシ子氏 昭和5年生まれ)の使用形式を記述した。

調査票では、待遇表現をⅠ. 尊敬表現、Ⅱ. 謙譲表現の2つに分け(丁寧表現は省略)、それぞれに共通語による例文を挙げながら、待遇度の異なる対人A～Eにどのような表現形を使用するか尋ねた。今回の調査では、筆者がかつて八丈島方言の待遇表現調査の際にとった方法に倣って、〈E：見知らぬ観光客〉を除いた〈あ：土地の言葉で最も丁寧に話す人〉〈B：対等に話す人〉〈C：AとBの中間程度の丁寧さで話す人〉〈D：ぞんざいに話す年下の人〉という4つの対人設定に対して、それぞれにあたる具体的な人物名を話者の方に最初に挙げてもらい、例えば「土地の言葉で最も丁寧に話す人には？」でなく「〇〇さんには？」のように尋ねた。その方が、日常使用している待遇表現により近いものが得やすいと考えたからである。

以下、調査票の内容に従って結果を報告する。それぞれの項目ごとに、〈あ：土地の言葉で最も丁寧に話す人〉〈C：AとBの中間程度の丁寧さで話す人〉〈B：対等に話す人〉〈D：ぞんざいに話す年下の人〉、そして最後に〈E：見知らぬ観光客〉の順で、得られた表現形を表音的片仮名表記で示した。

なお、尾小屋町方言の待遇表現に関する調査票の作成と調査については、大学院生・高木ともえの協力を得た。

4.1.1 尊敬表現

(1) 「おまえ（あなた）は元気かね」

A：土地の言葉で最も丁寧に

ハッチョーノバーチャン ソクサイケ *ハッチョーは具体的に想定していただいた相手の

屋号。

C：AとBの中間程度で話す人に

アンタ ゲンキカ

B：対話に話す人に

アンタ ゲンキカ

D：年下の人にぞんざいに

アンタ ドーシトッタンヤ

E：見知らぬ観光客に

無回答（見知らぬ観光客にこういうことを聞くことはない）

ここでは「おまえ（あなた）」にあたる対称代名詞と、「元気かね」にあたる部分に注目してみる。

対称代名詞については、Aの「(ハッチョーノ) バーチャン」と「アンタ」の2つの使い分けられているものの、当該方言の対称代名詞としては待遇度にあまり関係なくアンタが多用されているようだ。

「元気かね」にあたる表現では、Aに対して「元気」の意の古い言い方である「ソクサイ（息災）」を使っている。「ソクサイケ」の文末の疑問の終助詞ケは、C・Bに対して使われている「ゲンキカ」のケより待遇度が高い。ケよりカの方が丁寧に優しい意味を持つというのは、石川・富山の両県の方言に共通する特徴である。

(2) 「あしたは家にいるか」

A：ハッチョーノバーチャン アシタ ウチニ オルンケ

C：アンタ アシタ ウチニ オリマスカ

B：アンタ アシタ ウチニ オルンケ

D：アンタ アシタ ウチニ オルンカ

E：アンタラ アシタ コノマチニ オリマスカ

ここでは、目上の相手に対するオルンケ（A・B）、オリマスカ（C・E）と、目下の相手に対するオルンカの使い分けが見える。今回の調査では、対人Cを、最も丁寧に話すAと対等に話すBとの中間の人と設定したが、話者が具体的に想定した対人C（同級生の夫）が、対人A・Bに比べ親疎で言うところに近いのか、あるいは男性であるためか、ここでのオリマスカのように、Aよりもむしろ改まった（共通語的）形式が答えられている場合がある。なお、オリマスカは共通語の敬語体系の中では誤用とされる（共通語では「おる」が「いる」の謙譲語となるため）ものであるが、当該方言では「いる」に相当する方言形がオルとなるために、共通語の「いますか」にあたるものとしてオリマスカが使われている。昨年度の大杉町、そして後述する松岡町においては、「いる」にあたる尊敬の動詞としてゴザルが使われている。ゴザルは加賀地方の方言では白山麓の白峰村方言にも聞かれる古い形式で、小松市内でも山間地域ではまだ使用する所もあるようだ。

(3) 「明日行くか」

A：アシタ イクンカネ

C：アシタ イキマスカ

B：アシタ イクンカ

D：アシタ イクンカネ

E：①アシタ イキマスカ ②アシタ イカレマスカ

ここでも対人Cにイキマスカを使用している。それに対して親しい対人A・B・Dにはイクンカネ、

イクンカを使用している。E（見知らぬ観光客）には共通語としてのイキマスカ、イカレマスカである。この項目についても、大杉町や松岡町では敬語助動詞ッシャルやマッシャルを用いたイカッシャル（大杉・松岡）、イクマッシャル（大杉）が聞かれたが、今回の尾小屋町では聞かれなかった。尾小屋町の社会構造の特殊性、すなわち鉱山の町として県外からの人の入り込みが多く、新しい民主的な人間関係が成立したために、伝統的な方言の敬語体系が周辺集落よりも早くに変化したためであろうか。

(4) 「行かないか」

- A：イコーッサ
- C：イコーッサ
- B：イコーッサ
- D：イカナダメヤカ°イネ
- E：イキマセンカ

ここでは勧誘表現のバラエティーについてみようとした。対人Eには共通語的イキマセンカが答えられているが、他は、対人A・B・Cにイコーッサという勧誘スタイル、目下のDにはそれよりも待遇の低くなる、行くことを強要するスタイルのイカナダメヤカ°イネとなっている。

(5) 「見たか」

- A：ミタケ
- C：ミタカ
- B：①ミタンカイネ ②ミタンカ
- D：ミタケ
- E：ミマシタカ

(6) 「(タベ祭りに) 行ったか」

- A：(ユーベ オマツリニ) イッテキタンカネ
- C：(ユーベ オマツリニ) イッテキタンカ
- B：(ユーベ オマツリニ) イッテキタンカ
- D：イッテキタンカネ
- E：イッテキマシタカ

(5)(6)はともに「見たか」「行ったか」と、相手に、過去にその行為をしたかどうか確認する例文である。(5)では、文末の疑問の終助詞ケとカの使い分けで、親しみを込めて優しく丁寧なニュアンスをもつケがAとDに使用されている。Aでは優しく丁寧なニュアンスが、Dでは親しみのニュアンスがそれぞれ込められていると思われる。一方(6)では、やはりAとDにイッテキタンカネが使用され、B・Cに対するイッテキタンカよりもネが付加されることで優しい言い方となっている。対人Eに対しては、(5)(6)いずれも共通語的表現が使用されている。

(7) 「(どうぞ) 食べてくれ」

- A：タベテ
- C：タベテ
- B：①タベテ ②タベマッシ
- D：タベマッシ

E：タベテクダサイ

(8) 「(代わりに) 行ってくれ」

A：カワリニ イッテモラエンケ

C：イッテキテモラエマセンカ

B：①イッテモラエンケ ②イッテホシーワ

D：カワリニ イッテキテモラエン

E：イッテキテモラエマセンカ

(7)(8)は依頼表現についてみようとした。(7)では、A・Cに勧誘スタイルのタベテが、目下にあたるDには軽い命令の意を含むタベマッシ（「お食べなさい」に近い意）、対等のBにはその両方が使用されている。一方(8)では、「～てもらえないか」タイプの表現のバリエーションとして待遇差が示されているようだ。C・Eに共通語的やや改まった表現形、A・Bにはイッテモラエンケと終助詞ケを付加した表現形、Dにはイッテモラエンとケの落ちた表現形が用いられる。

(9) 「今何をしているのか」

A：イマ ナニシトルンヤ

C：イマ ナニシテルンデスカ

B：イマ ナニシトルンヤ

D：イマ ナニシトルンヤ

E：イマ ナニシテルンデスカ

ここでは、A・B・Dに共通のナニシトルンヤ、C・Eに共通語的ナニシテルンデスカが使用されている。C・Eに対するナニシテルンデスカは、ナニシトルンヤのような方言のアスペクト形式～トルを含まない点で、それが共通語的表現形式であることを物語っている。どうも同じ集落内の親しい人間関係の中では、方言としての高い待遇度をもつ表現形式を使用しない（表現形式としては存在したとしても）というのが尾小屋町における敬語運用の傾向のようである。

4.1.2 謙譲表現

(10) 「私も元気だ」

A：土地の言葉で最も丁寧に

ワタシモ ゲンキヤ

C：AとBの中間程度で話す人に

ワタシモ ゲンキデス

B：対等に話す人に

ワタシモ ゲンキヤ *「ウラモ ソクサイヤ」と言う人もいる。

D：年下の人にぞんざいに

ワタシモ ゲンキヤ

E：見知らぬ観光客に

無回答

今回の調査では、昨年の大杉町方言と同様に、いわゆる謙譲の意味を担う当該方言独特の表現形式は確認できなかった。この(10)でも、Cにやや改まったゲンキデスがみられる他はゲンキヤのみである。(Bに対して関連してソクサイヤも答えられているが)。また、「私」にあたる自称代名詞の部分もワ

タシが相手の区別なく使用されており、話者によれば対等の親しい間柄ではウラを用いる人もいるということである。

(11) 「私が持とう」

A：ワタシ モッテアケ^ル

C：ワタシ モチマスカ

B：ワタシ モッテアケ^ッサ

D：モッテアケ^ル

E：モッテアケ^マスヨ

ここでは、共通語形とも一致する謙譲表現形式の～テアケ^ルの形がA・B・D・Eでみられる。やや改まったモチマスカ、モッテアケ^マスヨ以外は、本来方言として使用されてきた表現形式であろうが、対等関係のBにはより親しみを込めて気楽な形式であるモッテアケ^ッサが使用されている。

4.2 松岡町方言の待遇表現

次に、尾小屋町から郷谷川を4kmほど下った松岡町の待遇表現について見ることにする。

本稿で取り上げる資料は、先にも触れたとおり、筆者が国立国語研究所の『方言文法全国地図』作成のための調査に協力して、1981年に小松市波佐羅町・松岡町で行なった方言文法および表現法の調査結果の一部である。なお、この調査結果の一部はすでに『方言文法全国地図』1～3として公刊されているが、その中に待遇表現は含まれていない。待遇表現については松岡町の本木喜代一氏（大正3年生まれ）の教示を得た。

国立国語研究所の表現法調査では、20余りの調査文例について、〈A：この土地の目上の人に向かって非常に丁寧に〉〈B：近所の知り合いの人に向かってやや丁寧に〉〈C：親しい友達に向かって〉という3つの対人設定をし（17の文例についてはA・B2つの対人設定のみ）、それらに対する待遇表現形式を尋ねた。

以下その結果を、I. 尊敬表現、II. 謙譲表現、III. 丁寧表現に分けて報告する。

4.2.1 尊敬表現

(1) 「(これは) お前の傘か」

A：この土地の目上の人に向かって非常に丁寧に

オマエサンノ カサカ

B：近所の知り合いの人に向かってやや丁寧に

オマエノ カサカ

C：親しい友達に向かって

ワンノ カサカ

ここでは、対人による「傘か」の部分のバリエーションは見られないが、対称代名詞「おまえ」にあたる部分が待遇差をもって使い分けられている。当然、ワン、オマエ、オマエサンの順に待遇度は高くなる。ワンはワレからの変化形であろう。昨年度の大杉町方言同様、オマエが目上の人に対して用いられる対称代名詞として使用されている点にも注目しておきたい。

(2) 「どこへ行くのか」

A：ドコ イカッサルカ^ヤ

B：ドコ イクカ°ヤ

C：ドコ イケン

ここでは、Aに敬語助動詞ッシャルの付いた形が使われ、Bのイクカ°ヤを挟んでCにはイケンという形が見られる。

(3) 「(今日は) 家にいますか」

A：①ウチニ ゴザラッシャルカ ②ウチニ オラッシャルカ ③オッテカ

B：ウチニ オラルカ

(4) 「(明日も) ここに来ますか」

A：①ゴザルカ ②オイデルカ

B：コラルカ

(5) 「(あの事件を) 知っていますか」

A：①シットラッシャルカ ②シットッテカ

B：シットラルカ

(6) 「(ひと月に何通手紙を) 書きますか」

A：カカッシャルカ

B：カカルカ

(7) 「(あなたは普段パンを) 食べますか」

A：クワッシャルカ

B：①クッテカ ②クワルカ

(8) 「(あなたは今) 何と言いましたか」

A：①ドー イワッシャッタ ②ドー イワシタ *①よりも②をよく使う。

B：ドー イワッタ

これら(3)～(8)では、Aで「いる」「来る」にあたる尊敬の動詞ゴザル、敬語助動詞ッシャルとテ(ヤ)、Bで敬語助動詞ル(一段動詞、カ変、サ変ではラル)などの使用が確認できる。待遇度としては、例えば(3)では、ゴザラッシャルカ、オラッシャルカ、オッテカ、オラルカの順に低くなる。(8)のAの②イワシタはイワッシャッタと同じッシャルの連用形の異形態、Bのイワッタはイワルのタに接続する場合の音便形と考えられる。

(9) 「(こちらの方へ) 来なさい」

A：ゴザッシャイ

B：コラレイ

(10) 「(この部屋に) いなさい」

A：①ゴザラッシャイ ②オラッシャイ

B：オラレイ

(11) 「(あそこへはバスで) 行きなさい」

A：イカッシャイ

B：イカレイ

(9)～(11)は相手に丁寧に命令する場合の類似した文例である。3つの文例に共通して、Aに対しては敬語助動詞ッシャルの命令形にあたるッシャイを用いた表現形が、Bに対しては敬語助動詞ル(ラル)の命令形にあたるレイ(イは終助詞とも考えられるか)を用いた表現形が見られる。

(12) 「(そこにある本を) 取ってくれないか」

A: ①トツテクタツシェ ②トツテモラエンヤロカ

B: トツテクテ

(13) 「(ちょっと) 待って下さい」

A: マツテクタツシェ

B: マツテクテ

(12)(13)は相手にある行為をすることを依頼するという点で共通する。Aに対しての非常に丁寧な依頼表現として～テクタツシェ、Bに対するやや丁寧な依頼表現として～テクテが使用されることがわかる。

(14) 「自分の父に向かって／(明日は) 家にいるか」<身内尊敬用法の有無>

ウチニ オラルカ

この結果からは、自分の父親でも目上と待遇して敬語助動詞ルを用いたオラルを使っていることがわかる。松岡町方言での身内尊敬用法の存在が確認できる。

(15) 「尊敬している先生のこと話題にして友達に／(あの先生はいつ東京に) 行くのか」<第三者への敬語>

①イカッシャルカ ②イクマッシャルカ

①の方が多用されるようだが、待遇度としては②の方が高い。おそらく、ッシャルに比べてマッシャルの方が当該方言として新しく使用し始めた(小松市の町部で使用されていたものが伝播した)敬語助動詞であるため、ッシャルの上位に位置づけられたものと思われる。そのために、第三者に対する敬語として使用されやすい傾向があるとすれば興味深い現象であるが、その点については確認できていない。

4.2.2 謙譲表現

(16) 「(この傘は) 私のだ」

A: この土地の目上の人に向かって非常に丁寧に

ウラン カサヤ

B: 近所の知り合いの人に向かってやや丁寧に

ウラン カサヤ

C: 親しい友達に向かって

ウランカ^パヤ

A・Bに対するウランカサヤは「私の傘だ」の意。Cに対するウランカ^パヤは「わたしのだ」の意。いわゆる自称代名詞レベルではウラのみが使用され、待遇的な使い分けは見られない。

(17) 「うん、行くよ」

A: オー イクワノー

B: オー イクー

C: ウン イク

ここでも特に謙譲表現にあたるものは見られない。いわゆる相手の問いに対する返事のオーとウンの違い、そしてイクに終助詞のワ、ノーが付加されるかどうかという違いである。

(18) 「(私は明日は家に) います」

A：オル

B：オル

(18) 「(私は明日は家に) います」

A：オル

B：オル

(19) 「(私は明日もここに) 来ます」

A：クル

B：クル

(20) 「(その荷物は私が) 持ちましょう」

A：①モツサカイニ ②モツサケーニ

B：モツワ

(21) 「(私の父は) すぐに来ます」

A：ジキ クルサケ

B：ジキ クルサケ

これら(18)～(21)でも特に謙譲表現にあたるものは見られない。(20)のAに対しては、①の方が②よりも丁寧だと言う。モツサカイニ、モツサケーニのサカイ、サケーはともに「から」の意。サカイ[sakai]の[ai]が融合変化したサケーの方が待遇度が低くなるというのも一般的傾向と言えよう。

(22) 「(これを) あなたにあげましょう」

A：オマエニ オマス

B：オマエニ オマス

ここでのオマス(動・五)は「あげる」に相当する謙譲の動詞であろう。珍しい形である。

4.2.3 丁寧表現

(23) 「(今日は) 寒いな」

A：この土地の目上の人に向かって非常に丁寧に

サブイネー

B：近所の知り合いの人に向かってやや丁寧に

サブインノー

C：親しい友達に向かって

サブインナー

ここでは、Aに対するサブイ、B・Cに対するサブインに加え、終助詞(ネー、ノー、ナーの順に待遇度が低くなる)の違いによって待遇差が示されている。

(24) 「いや、役場ではない」

A：ヤクバンネーカ°ヤ

B：ヤクバンネー

C：ソンネー

それぞれ、ヤクバンネーカ°ヤは「役場ではないのだ」、ヤクバンネーは「役場ではない」、ソンネーは「そうではない」の意。

(25) 「(これは) 珍しい本ですね」

A：メルラシ ホンヤネー

B：メルラシ ホンヤノー

ここでも先の(23)に対応する形で、終助詞レベルの待遇差がネーとノーの違いとして見られる。

以上、今年度の尾小屋町方言の結果に比べると、尊敬表現を中心に比較的是っきりとした対人による待遇表現の使い分けが確認できる。尾小屋町方言の結果が、先にも言及したとおり、尾小屋町の特殊な社会構造を反映したものなのか、あるいは多分に個人差が現われたものなのか、今後の検証が必要と思われる。

5. 尾小屋町方言の挨拶表現

今回の調査では、小松市方言においてどのような挨拶表現が行われているかを確認するために、尾小屋町においてその記述を試みた。

調査にあたっては、日常生活での挨拶行動を、I. 人と出会った時の挨拶<(1)～(7)>、II. 人と別れる時の挨拶<(8)～(12)>、III. 訪問・外出に関する挨拶<(13)～(30)>、IV. 買い物をする時の挨拶<(31)～(34)>、V. 見舞いの挨拶<(35)～(37)>、VI. 祝儀・不祝儀の挨拶<(38)～(42)>、VII. 感謝の挨拶<(43)～(44)>、VIII. 特定の日の挨拶<(45)～(50)>、の8つ(それぞれの後の<>内の括弧付番号は文例番号)に分け、計50の場面を設定した調査票を用意した。そして、それぞれの場面ごとにどのような挨拶表現を使用するかについて、尾小屋町出身・在住の一人の高年層男性話者(山本三郎氏 昭和10年生まれ)から教示を得た。なお、挨拶表現に関する調査票の作成と調査については、大学院生・田中有希子の協力を得た。

以下、調査票の内容に従って記述する。

5.1 人と出会った時の挨拶

(1) 朝(早朝)

①オハヨー ②オハヨーサン ③オハヨーゴザイマス

* ①②③の順に丁寧になる。年齢の高い人はオワヨサン(オハヨサンのハがワに変わった形)とも言う。

(2) 昼(ご飯時)

①コンニチワ ②モー オヒルヤネー ③オヒルニ ショ

(3) タ方

コンバンワ

(4) 夜(ご飯時、深夜)

①コンバンワ ②オヤスミ *②は出会ったあとに別れる際の挨拶。

(5) 久しぶりに会った人に

②オー ゲンキヤッタカ ②ドーシトッタ

(6) 仕事の人に

①ガンバトルジェー ②ガンバトルネー

*①の文末詞のジェはゼの口蓋化したもの。金沢市方言ではガンバトルジーとなるところがあるが、当該方言を含む小松市方言では、ゼあるいはジェとなる。文末詞ゼは富山県でも広く使用されるものである。

(7) 人の前を通る（遮る）

- ①チョット ゴメン ②ゴメン

5.2 人と別れる時の挨拶

(8) 朝

- ①ホンナラ ②ソンナラ ③マタネ ④ジャーネ *①ホンナラはソンナラのソがホに変わった形。

(9) 昼

- ①ホンナラ ②ソンナラ ③マタネ ④ジャーネ

(10) 夕方

- ①ホンナラ ②ソンナラ *夕食前の時間帯。

(11) 夜

- オヤスミ *夕食後の8～9時、あるいはそれ以後。

(12) 仕事に行く人と別れる（側を通りかかって）

- 無回答。特に決まった言い方はない。

5.3 訪問・外出に関する挨拶

(13) 他家を訪問

- ①イルカ ②オイデルカ ③オイデマスカ ④コンニチワ

*自分は言わないが、古くはコンノヒト（「この家の人」の意）、オッテカ（「居るか」の意）のようにも言った。「3.12＜社会・交通＞に関する語彙」を参照。待遇的には①イルカとオッテカがほぼ同じ。②オイデルカはそれよりも丁寧で、③はさらに丁寧。

(14) 客を迎える

- ①ヨーキタ ②ヨーオイデ ③オー ハイ *①よりも②の方が丁寧。

(15) 食事時に訪問

- オジャマシテモイーカイネ

(16) 客に座を勧める

- ①＜座布団を渡しながら＞コレヒーテ ②＜座布団を渡しながら＞オアテクダサイ

(17) 正座している客に足をくずすように勧める

- ①マー キラクニ ②キカ^ルニ

(18) 接待を遠慮する

- ①アンマリ カマワントイテ②オカマイナク *①よりも②の方が丁寧。

(19) ご馳走になった後

- タンナ ゴッツォンナッテ *タンナは「大変な」の意。全体で「大変ご馳走になって」の意。

(20) 上記への返事

- イヤイヤ

(21) 帰る時、客として

- ①オジャマシマシタ アリカ^トー ②アラ ショッシャナー

*②は昔の言い方。ショッシャナーは「笑止な」に由来する（ショーシヤナ＞ショーッシヤナ＞ショッシヤナ）もので、相手のもてなしを「気の毒に思う」意が感謝の表現となったもの。後掲の「5.7 感謝の挨拶」の(43)を参照。

(22) 上記への返事

①マタオイデー ②イヤイヤ *②は上記②に対する返事

(23) 客を送り出す

マタオイデー

(24) 客が帰ろうとするのを引き止める

モーチョット ユックリシテイキマッシ

*「もうちょっとゆっくりしていきなさいよ」の意。ユックリシテイキマッシのマッシは当該地方に分布する敬語助動詞マッシェルの命令形相当の形。命令を和らげる（勧めの）形として今もよく使用されている。

(25) 自家から外出する

チョット イッテクルワ

(26) 上記への返事

オー イッテラッシ

(27) 外出から自宅に帰る

①タダイマー ②イマ キタゾー

(28) 上記への返事

オカエリ

(29) 旅行に出る時残る家族に

トジマリ ヒノヨージン キーツケヤ

(30) 上記への返事

①キーツケテ イッテコイヤ ②キーツケテ イッテラッシ

5.4 買い物をする時の挨拶

(31) 個人の店に入る時

コンニチワ

(32) 上記への返事

①ナンヤー ②ナニ ホシインヤ ③イラッシャイ *①②は普段からの行きつけの店の場合。

(33) 店から出る時

アリカトー

(34) 上記への返事

アリカトー

5.5 見舞いの挨拶

(35) 病氣見舞い

①ドーヤ ダイブ イーカ ②ダイブ ヨーナッタナー ③タイヘンヤッタナー

(36) 火事見舞い

①サイナンヤッタナー ②タイヘンヤッタナー

(37) その他の災害・災難見舞い

①サイナンヤッタナー ②タイヘンヤッタナー

5.6 祝儀・不祝儀の挨拶

(38) 婚礼

オメデトーゴザイマス

(39) 上記への返事

①アリカトー ②オカケサンデー アリカトー

(40) 葬儀

①ゴシュショサマデス ②サミシナッタケド キーオトサント カラダ ダイジニセンナンゾ

*①は「ご愁傷さまです」の意。

(41) 上記への返事

①ゴテーネーニ ドーモ ②ゴテーネーニ ドーモ アリカトー

(42) 子どもの誕生

①ブジニ シュッサン オメデトーゴザイマス ②ニキヤカニナッテ

5.7 感謝の挨拶

(43) 感謝

①キノドクナ ②アンヤトー ③イトシギニ ④イトシケニ ⑤ショッシャナー

*③④そして⑤は古い言い方。④は主に女性が言った。ショッシャナーは先にも述べたとおり「笑止な」に由来する形で、「気の毒に思う」意が感謝の意に変わったもの。その意味では①（「気の毒な」）、③④（「愛しげ」）も同様に、相手に負担をかけたことを気の毒がる意味の挨拶表現である。感謝の意を表す挨拶表現にこの種のもの（特にキノドクナ）が聞かれるのは北陸地方の方言の特色と言えよう。アンヤトはアリカトーからの変化。

(44) 上記への返事

①イヤイヤ ②ナンノナンノ

5.8 特定の日挨拶

(45) 年始

①アケマシテオメデトー ②オメデトー

*①は正月三が日の間、②は三が日の後から15日頃までの挨拶。

(46) 上記への返事

コトシモ ヨロシク

(47) 盆礼

ボンモ ハヤ キマシテ *「盆も早く来まして」の意。

(48) 上記への返事

①ヨー マイッテクダサイマシタ ②ヨー オマイリクダサイマシタ

(49) 祭礼

無回答。特に決まった言い方はない。

(50) 上記への返事

無回答。特に決まった言い方はない。

5.9 尾小屋町方言の挨拶表現の特色

以上の結果のうち、ここでは尾小屋町方言の挨拶表現のうち、比較的定式化した挨拶表現になっていると思われるものに注目してみる。

「5.1 人と出会った時の挨拶」では、「(1)朝」のオハヨー、オハヨーサン、「(2)昼」のコンニチワ、「夕方」～「夜」のコンバンワ、オヤスミなどがそれであろう。ただし表現形式としては、いわゆる共通語形に近いものが多くなっている。これら以外にも当該方言で古くから使用された伝統的な挨拶表現があったかどうかは不明である。

「5.2 人と別れる時の挨拶」では、時間帯に関係なく用いられるホンナラがそれに当たるだろうか。

「5.3 訪問・外出に関する挨拶」では、「(13)他家を訪問」のコンノヒトが特徴的である。尾小屋でも年齢の高い人にしか使われなくなっているが、他のイルカ、オイデルカ、オイデマスカなどに比べ、コンノヒトは「この家の人 (は居るか)」と家人に対して直接呼びかける形をとっている。昨年度の調査地域である大杉町でもこの類の挨拶表現コンネ (尾小屋で言えばコンノヒトのヒトが省略された形であろう) が聞かれた。他には、「(14)客をむかえる」のヨーキター、ヨーオイデ、「(18)接待を遠慮する」のアンマリ カマワントイテ、「(21)帰る時、客として」のオジャマシマシタ、「(23)客を送り出す」のマタオイデー、「(27)(28)外出から自宅に帰る」のタダイマー、オカエリなどがある。このうち「(13)他家を訪問」でのオイデマスカは、金沢市を中心とした加賀北部地域に広く用いられており、共通語形「おいでになる」との形の上での類似もあって、いわゆる丁寧な表現として方言とあまり意識されていない挨拶表現である。

「5.4 買い物をする時の挨拶」では、(31)～(34)のコンニチワ、イラッシャイ、アリガトーのいずれも共通語と一致する形で定式化された挨拶表現となっているようである。

最後に「5.7感謝の挨拶」の「(43)感謝」について見ておこう。当該方言の挨拶表現の中では、先の(13)におけるコンノヒトと並んで特徴的なものと言ってよいだろう。先にも述べたとおり、キノドクナ、イトシケニ (イトシキニ)、ショッシャナーは、いずれも相手の気遣い、相手の負担に対して感謝の気持ちをこめて「気の毒に思う」と表現しようとしたもので、北陸地方の広い範囲に分布する感謝の挨拶表現の例である。

以上、当該方言の挨拶表現を概観し、あわせてその特色を簡単に述べた。

6. 丸山町方言・中海町方言の自然談話

本稿では、自然談話資料として、今回の調査地域の中で最も山間の地に位置する大日川流域の丸山町と、湊上川下流域の中海町の自然談話を文字化し、あわせてその共通語訳を示した。両地点の地理的位置については、図1「調査地域図」で確認されたい。

丸山町、中海町の自然談話は、前者が8月30日、後者が8月31日に行なった言語地理学的調査の際に録音されたものであり、本稿はその一部 (丸山町が約10分間、中海町が約9分間) を文字化したものである。文字化資料の草稿作成にあたっては、調査に参加した大滝優子、児玉聖子、佐々木結実子、田中鉄哉の協力を得た。

また、成稿の後に残った不明箇所の確認にあたっては、小松市立博物館学芸員山崎みどり氏をはじめ話者の方々の協力を得た。記して感謝申し上げる。

《凡例》

- (1) 方言談話の文字化にあたっては、できる限り実際の音声に近づけた表音的片仮名表記 (文節分かち書き。アクセント・イントネーションは省略) とし、その下に漢字仮名交じりで共通語訳を付した。
- (2) それぞれの会話の冒頭に話者を示す略号を付した。略号と各話者の対応は後に示す。

- (3) 表音的片仮名表記のうち、ガ行音については、当該方言では原則として語頭が破裂音、語中・語尾が鼻濁音となるので、破裂音はガ・ギ・グ・ゲ・ゴ、鼻濁音はカ°・キ°・ク°・ケ°・コ°と区別して表記した。
- (4) 録音内容が聞き取りにくい箇所や、内容不明の箇所には片仮名表記の下に波線~~~~~を付した。
- (5) 複数の話者の声が重なっている箇所は、その部分に下線_____を付した。
- (6) 言いよどみの箇所には片仮名表記に網掛けを付した。
- (7) ある話者の話に別の話者が短く相づちを打ったり、口を挟んだりしている箇所は、片仮名表記と共通語訳の両方に、その話者の略号を付し（^B ）のように括弧付で示した。
- (8) その他必要と思われる箇所には、片仮名表記の上に適宜注番号を付し、末尾に注記した。

6.1 丸山町方言の自然談話

<話し手>

- A 林 金策 男 大正8年生まれ 丸山町
B 久保すゞ 女 明治43年生まれ 丸山町

<同席者>

- C 後藤長平 男 大正12年生まれ 調査協力者（小松市東町）
D 加藤和夫 男 昭和29年生まれ 調査者・筆者

A モー ゴハン タベタカッテユーコトオ ヒリタコ^(注1) ヒリタコ ヒ マ ホンデア マー コトバカ°
もう昼ご飯を食べたかと言うことを ヒリタコ ヒリタコ それで まあ 言葉が

ナレンサケネ ハヤイヨーニ^(注2) オモウ。 アノー モー デー アノー チョード コートーショー
慣れないからね 早いように 思う。 あのう それで あのう ちょうど 高等小学校に

カッコン ナルト ミナ ゴカソン ジェ^(注3) (^B 笑) コーリユーオ シタ。 ホイデ
なると みんな 五ヶ村 (^B 笑) 交流を した。 それで

ヒリタコッテ ヒリ……。
昼ご飯を食べたかって。

C ヒリッチュノ ソンデ オヒルチュー イミヤロイネ。
ヒリというのは それで お昼という 意味でしょうが。

A ソヤ オヒルオ クターカイト。 ソレカ° ハヤイ^(B) ハヤイサケー イエタモンナイ)
そうだ お昼を 食べたかいと。 それが 早い… (^B 早いから 言えたものではない)
アー ソヤ。 クター クターカイツテユー (^B 笑) (^C アンタカ° (笑) ユータカ°ヤ)
ああ そうだ。 食べたかと言う (^B 笑) (^C あなたが (笑) 言ったんだよ)

ヒリタコ ヒリタコテ^(B,C) ユートル。 ホンデ アクセントワ シンボワ ソノワリンネ。^(注4)
昼を食べたか 昼を食べたかと (^{B,C} 笑) 言っている。それでアクセントは新保は その割にない。

(注5)
ハナタテカ° アノー (B シー ヨケーヤッタ) (C チカ°ウ) アクセントァ (B ウン) ツヨイ。
花立が あのー (B うん たくさんだった) 違う アクセントは (B うん) 強い。

B ソーヤッター。
そうだった。

A ウン。ホイデ アノー ハナタテノホ アルシ シンボワ ワリト ナンヤシ オハラモ (注6) ワリニ
うん。それで あのう 花立の方は あるし 新保は 割に 何だし 小原も 割に

マルヤマヨリモ コトバワ ハイカラヤッタンヤ。
丸山よりも 言葉は ハイカラだったんだ。

B ソーヤ。
そうだ。

A ヤッパ (注7) クチノホーヤ。ダンダン アノー ヤマテノホーホド コノ マー ドッチカユート
やっぱり 口の方だ。 だんだん あのう 山手の方ほど この まあ どっちかというと

アノー ケッキョク ヤマテノホーエ ヒトカ° スミツイタワケヤサカイ トリヤ ケダモノ
あのう 結局 山手の方に 人が 住み着いたわけだから 鳥や 獣を

トッテ。ソヤカラ テイジュースルノデノーテ ナツバ コノ ヤマテノ オクノホー
獲って。だから 定住するのではなくて 夏場に この 山手の 奥の方

オクノホーエ ミンナデイッテ ソーユモン トッテ シェーカツシトッテ マー ソシテ
奥の方へ みんなで行って そういうものを獲って 生活していて まあ そして

デタンデ アノー コッチノホーカ° オクホド ナンヤー (C コトバ ノコランヤ)
出たので あのう こっちの方が 奥ほど 何だ (C 言葉が 残るんだ)

ン ノコル。
うん 残る。

D ウン。
うん。

C アノー キジコ°ヤッチューモノァ (注8) ドノテード アノー スンデ オッタンヤノ。
あのう 木地小屋というものは どの程度 あのう 住んでいたんだろう。

A キジコ°ヤカ。(C オー) ダイテー アノー サイセーキ ニジュッケンホドヤワ。
木地小屋か。(C うん) 大体 あのう 最盛期は 20軒ほどだよ。

D オー。
うん。

C ソンニ アッタノ。
そんなにあったの。

A オン ニジュッケンヤシ ソレカラ アノ ^(注9)トラタニ ソレカラ ^(注10)ヨシジマ アコニ アノー
うん 20軒ほどだし それから あのう虎谷 それから 吉島 あそこに あのう

ニケンカ サンケ°ン アッテ シンボノホーカ° マルヤマノ ザイショヨリモ コノー
2軒か 3軒 あって 新保の方が 丸山の 村よりも この

マルヤマモ ダケオ イレテモ ヒャクニジュッケンホドカ モット オーキカッタンエ。
丸山(も) だけを 入れても 120軒ほどか もっと 大きかったんだ。

E ホー アー。
ほう ああ。

C オー。
うん。

A イゼンワ コノ マルヤマカ°ネ コリヤー アノ メイジイシンナッテ アノー ナッタケド
以前は この 丸山がね これは あのう明治維新になって あのう なったけれど

ワシラノ オヤノオヤラ ワルドシントシ ^(注11)ハイカワ アノー フクイケンヤ カッ (^E ハイ
私たちの 親の親たちは 凶作の年に 川 あのう 福井県だ (^E はい

ハイ ハイ ハイ) エッゼン エッゼン エッゼンノホーカ° チカイン。 ホラー コッカラ
はい はい はい) 越前 越前 越前の方が 近いんだ。 それは ここから

アルイテー コマツニ ハハオヤラ ンナ ホーコーニ イッタンヤケドノー アノー ハチリモ
歩いて 小松の町に 母親たち みんな 奉公に 行ったんだけどね あのう 8里も

アルデショー。ムコワ ロクリヤ。 (^E アー) シンボヤッタラ イチジカンホドデ イケル。
あるでしょう。向こうは 6里だ。 (^E ああ) 新保だったら 1時間ほどで 行ける。

ホンデー アノー ^(注12)カッチャマエ (^C アノ) アノー シナモン カイニイッタンヤ マルヤマデモ。
それで あのう 勝山へ (^C あの) あのう 品物を 買いに行ったんだ 丸山でも。

E オー オー オー オー。
ああ ああ ああ ああ。

C アノー タ アノ タケダコ^(注13)エ シンヤロ。
あのう あの 竹田越え するんだろ。

A ウン ソー ソー。
うん そう そう。

E ア タケダ。
あ 竹田(越え)。

C ソレ イマ タケダコ^(注13)エ アノー ミチァ ナイチュー イデ イマ ソコニ オッテン
それ 今は 竹田越えは あのう 道は ないという それで今 そこに いた

ヒトァー マルヤマカラ ゴザッタンヤッテ ア ウチァ ココニ アルカラ。
人は 丸山から いらっしゃったんだって 家が ここに あるから。

A ウン ウン。
うん うん。

C ホイテ オコ^(注14)ヤマワリデ イッテン (A アー) イツイツ (B イン インキョケ ソレ)
そして 尾小屋回りで 行ったんだ。(A ああ) いつ行っ… (B 隠居か それ)

(A サー) イヤ ソコニ イタ トラック オイテアル ヒトヤ。
(A さあ) いや そこに いた トラック 置いてある 人だ。

A アー ソノヒトヤ。
ああ その人だ。

B アー ソリャー アンシトァ ア ミツチャ。^(注16)
ああ それは あの人は あ 道場。

A デトルムネ。アノ イマー アノ コクドー ハシットルトコワ チョット ミチカ^(注17) イゼンワ
出ているものね。あの 今 あの 国道が 走っている所は ちょっと 道が 以前は

コッチノホーノー コレモ ジゾーサン アルケド ソコオ カヨテ ワシワ アノ シューセンコ^(注18)
こっちの方の これも お地蔵さんが あるけれど そこを 通って 私は あのう 終戦後

ナンベンモ マー アノー カッチャマニー オジサンカ^(注19) オルモンデー アノー チョイチョイ
何度も まあ あのう 勝山に おじさんが いるもので あのう ちょくちょく

イマ アノー ユー キジコ^(注20)ヤワ ソレカラ アノー コッチノ ワルドシントキ ヨー コイヤ
今 あのう 言う 木地小屋は それから あのう こっちの 凶作の時に よく 来いよ

ユーテ アノー セーザノ ^(注17) (B アー) ウラントコノ ジージーノ (B アー ソーカ)
と言って あのう セーザの (B ああ) 私のところの おじいさんの (B ああ そうか)

アニキカ° キッツァンノ イエヤ。 (C アー アー ソーカ) アレカ° エッゼンニ オル
兄が 岸さんの 家だ。 (C ああ ああ そうか) あれが 越前に いる

(B ウーン) カッチャマニ (B アー ソーカ) ソンデ チョイチョイ イッタカ。 (C ン
(B うん) 勝山に (B ああ そうか) それで ちょくちょく 行ったのか。(C うん

ヤマコ°エ イカッシャッタ) ヤマエー イッタンエ。アー チカイ。 アー。
山越えて いらっしゃった) 山の方へ 行ったんだ。ああ (その方が) 近い。 ああ。

C ソナラ コチラノ シラキコ°エヤ ^(注18) ハナダテコ°エチュー モノワ イツカラ ソンデー
それなら こちらの 白木越えや 花立越えという ものは いつから それで

イケンヨーニ ナッタンヤ。
行けないようになったんだ。

A シラキコ°エワー アレワー アノー トーケ°ワ トーラナンダ イゼンカラ。
白木越えは あれは あの 峠は 通らなかったんだ 以前から。

C ア ソーデスカ。
あ そうですか。

A ウン シラ コッチノホーノー アノー アレアー (C ハナダテコ°エカ) ハナ ハダダテコ°エ
うん こっちの方の あのう あれは (C 花立越えか) 花立越えて

ッテ シラ アノ ジゾーサンカ° フタツモ アルケドー (C ウン) イマー ズイドーオ
あの お地蔵さんが 2つも あるけれど (C うん) 今 トンネルを

トーソート スルノワ アソコワ アノー トーケ° アノー ミチワー アッタカシランケド
通そうと するには あそこは あのう 峠 あのう 道は あったかどうか知らないけれど

アノー コッチノー アノー アレアー ヒラダニジャナイワ アノー ベンテンバシノ チョット
あのう こっちの あのう あれは 平谷ではないよ あのう 弁天橋の ちょっと

テマエオ ミキ°テニ アカ°ッテ アノー ^(注19) カブトノ ダイニチノ チョージョーエ アカ°ル
手前を 右手に 上がって あのう 兜の 大日の 頂上へ 上がる

(C ウン) アノー ホンリユーオ ホ ミ ヒダリノワ ホンリユーデナイサケ (C ウン)
(C うん) あのう 本流を 左の方は 本流でないから (C うん)

ミギノ カブトノカ° ホンリユーデ ソレオ イッ ソレオ ホンリユーニ ソーテイクノカ°
右の 兜の方が 本流で それを それを 本流に 沿って行くのが

アノー イゼンノ カイドーヤッタンヤ。
あのう 以前の 街道だったんだ。

- C ウン。ソ ソンデ アノー シラミネー イカレタノ イツコ°ロマデ イカレタモンヤイネ。
うん。 それで あのう 白峰に 行けたの いつ頃まで 行けたものだね。

シェンコ° ヤッパリ イットツタンヤロ。
戦後も やっぱり 行っていたんだらう。

- A ンー ワシラモ イットツタ。イッタ。(° ネー) オン オン。(° ソレ) アー ソレカラ
うん 私たちも 行っていた。行った。(° ねえ) うん うん。(° それ) ああ それから

アノー エーリンショノー アノー サキョーインカ° (° オー) カッチャマカラ ヨケー
あのう 営林署の あのう 作業員が (° うん) 勝山から たくさん

キトツタ。
来ていた。

- C ホー イヤ ソシテー シラミネモ ヤッパリ イッタモンケネ。
ああ いや そして 白峰も やっぱり 行ったものかね。

- A シラムネカ。
白峰か。

- C オン シラミネヤ。
うん 白峰だ。

- A シラムネコ°エワ^(注20) ワシ イッタコトアネー。
白峰越えは 私は 行ったことはない。

- C アー ソースカ。
ああ そうですか。

- A ウン。
うん。

- C フーン。トユーコトワ (° アカダニエ アッ ン) シ シ アイヤ シラミネト ココラカ°
ふうん。と言うことは (° 赤谷へ) 白峰と このあたりが

コーリユーカ° アッテ コトバカ°ー (A ン) ニトランカドーヤラト オモテヤ。
交流が あって 言葉が (A うん) 似ていないかどうかと 思ったからだ。

- A シラ ウーン アノー マー オダケーワ (注21) シラムネ (C カラキタモンヤロ) オー マ
ううん あのう まあ 織田家は 白峰 (C から来たものだろう) ああ ま

ソーユーカ°ヤケドモ (C ウン) ツエカラモ オダケーワ サー スイ ツエカラモ
そう言うのだけれども (C うん) 杖からも 織田家は さあ 杖からも

(注22)
トーブケーヤ デ オダケーワ サ シラムネ マ シラムネノ ヤッパリ アノ デズクリヤワナ
藤部家や で 織田家は さあ 白峰 まあ 白峰の やはり あの 出作りだよ

(C オー) アノ ソレカラ キタノモ アル。
(C ああ) あの それから 来たのも ある。

- C アルカ°カ。ヤッパリ オ コッチノー マルヤマナリ シンボデ。
あるのか やはり こっちの 丸山なり 新保で。

- A ソレモ アル。
それも ある。

- C オー。
ああ。

- B マルヤマワ シラミネカラ キタモノァ オランナー。
丸山は 白峰から 来た者は いないなあ。

- A マルヤマカラ キタモノァ オラン。
丸山は 来た者は いない。

- B オランナー。
いないねえ。

- C オーン。
ううん。

- B ホヤ。
そうだ。

- A スノダニワ オルカモシレン オダケカ° (B オー) ソーユカ°ヤ。
須納谷は いるかもしれない 織田家が (B ああ) そう言うんだよ。

C ソンナコトモ ダー アレア マダー エチジェントー コンデ コーリユー アッタカ[°]インネー。
そんなことも あれは まだ 越前と これで 交流が あったんだねえ。

A ソヤ ソヤ イジェンワ。(C オー) イゼンワ ハイカカ[°] アノ ダイクワン^(注23)……。
そうだそうだ 以前は (C うん) 以前は 配下が あの 代官……。

B ソコァ サブカッタラ コッチ コイヤ。
そこは 寒かったら こっちへ 来いよ。

A イヤ サ サムネ。ヌクイ ヌクイ。
いや 寒くない。暖かい 暖かい。

B ココエ コイ ココエ。ココエ ハヤシサン ココエ コイ。
ここへ 来い ここへ。ここへ 林さん ここへ 来い。

C ココァ コンデ ヤッパ コンデ ンナ テンリョーヤサケンネ^(注24) (A ソヤ ソヤ) オー。
ここは これで やはり これで みんな 天領だからね (A そうだそうだ) うん。

A テンリョーヤサカイニ。(C オー) ソンデー コノ ハイカワ コレア アノー (B ココエ
天領だから。(C うん) それで この ~~~~~ これは あのう (B ここへ

コーヤレ ココエ オー アノー (B ココエ ココエ) ダイクワンカ[°] アノ カッチャマヤ。
いらっしゃい ここへ) うん あのう (B ここへ ここへ) 代官が あのう 勝山だ。

C オン カッチャマエノー。
うん 勝山へねえ。

A オン。ソヤサエ アノー イゼンワ コッチャ チカイ。コーリユー アッタノ コッチノ ホーヤ。
うん。だから あのう 以前は こっちは 近い。交流が あったの こっちの 方。

C アー ソースカ。
ああ そうですか。

A ウン。
うん。

C ソンナラー ホラ ウチノー カ[°] アレ ンナ マユ コシラエタワレ ワタシラ。
それなら ほら 私の家(の)が あれ みんな 繭を 作ったよ 私たち。

A ウン ウン ウン。
うん うん うん。

B ホユト マユオ カンデー^(注25) ヤマコ[°]エデー アレア ドコ イッタンエ イヤ エ アノ マユ
そう言う と 繭を 担いで 山越えで あれは どこに 行ったのか いや あのう 繭

ウンニ イッタンニヤワレ。ホラ イチニチカ[°]カリデ アーシャ イテ イッテクルト イッカモ
売りに 行ったんだよ。 ほら 1日ばかりで 足が 痛い 行ってくると 何日も

アーシャ イテー ユーテワ ンナ オッタワレ。キタローヤラ^(注26) セーキラ。^(注27) マユオー ワタシラ
足が 痛いと言っ ては みんな いたよ。 喜太郎や 誠喜たち。 繭を 私たち

シタン。マユ カンデー ソコエー ウンニイッタヤワレ マユオ。
したの。繭を 担いで そこへ 売りに行ったんだよ 繭を。

A マユオカ。(B ソユトー) ソレアー (B ダーケ コエテ) カーチャン イクツク[°]ライノ トキヤ。
繭をか。(B そう言う と) それは (B 山を 越えて) かあちゃん 何歳ぐらいの 時だ。

B ア ソレ イクツヤ オボエネーケド ソレカ[°]ー ワタシラ マユ コシラエタラ (A オー)
ああ それは 何歳だか 記憶はないけれど それが 私たちは 繭を 作ったら (A ああ)

ソノ マユオー ホラ ヤマコ[°]エ イクツモ コエタリ アカ[°]ツタリ ソエッテ イケテ
その 繭を ほら 山越え いくつも 越えたり 上がった り そうして いらっしゃって

ホイト キタロートー セーキトア コンド アーシカ[°] ミッカホド イトーテ オエン。
うすると 喜太郎と 誠喜とは 今度は 足が 3日ほど 痛くて たまらない。

A ソリヤー アノー ウシクビ^(注28) イツタカ[°]。
それは あのう 牛首に 行ったの。

B ドコ イツタカ シランカ[°]ヤゼ ワタシア アイトケ キョーミア ナイサケ。
どこに 行ったのか 知らないんだよ 私が そういうところに 興味がないから。

C ア ナルヘ シラミネ ヒザブ ウシクビニ シヤナイ。(笑)
ああ 白峰 ~~~~~ 牛首に 仕方ない。(笑)

B ウシクビカ。(A オー) ヤマコ[°]エ ヤマコ[°]エシテ マユ ウンニイッタンヤワ
牛首か。(A ああ) 山越えして 繭を 売りに行ったんだよ。

C ア ソシテー ウシクビ ソ ツムキ[°]ニ シタカ[°]ヤ。
ああ そして 牛首紬に したんだ。

A マー ドヤシランデー。
まあ どうだか知らないが。

C オー ア ウシクビヤ。

ああ あ 牛首だ。

A アー。

ああ。

B ソーユーコトラモ アルワ。

そういうことなどもあるよ。

A オー ウシクビ。

ああ 牛首。

B ウン。ハヤシサンワ ヨー シットルンヤ。 (^C アー ソーカ) (^A イヤ) ア ジーチャンモ
うん。林さんは よく 知っているんだ。 (^C ああ そうか) (^A いや) あ おじいさんも

ホラ ユービンキョクヤシ フルイモー (^C オー) コノヒトラモ ソーヤシ。ワタシワ ウチニ
ほら 郵便局だし 古いもの (^C ああ) この人たちも そうだし。私は 家に

オッテ タート ヒャクショーバックヤサケーナー。 (^A 笑) ウチー ジーチャンラー
いて 田んぼと 農業ばかりだからねえ。 (^A 笑) うちの じいちゃんなど

(注29)
コンキトー ソーユー ホーメンバックー アーシテ チュラベテアルイテ ホン コシラエルヤラ
一所懸命 そういう 方面ばかり あのようにして 調べて歩いて 本を 作るやら

(注30)
アーユーカニ カ カワーセンセントコエー サイサイ イッターシテワ キター ユーテオイデタ。
ああいうのに 川先生の所へ 度々 行ったりしては 来たと言っていた。

C ソーカ ソンナ ハヤシサン ア ^(注31) ウエモントコエ ツトメテ オイデ オイデタンヤ。
そうか それなら 林さん 卯衛門の所に 勤めて いらしたんだ。

A ソヤソヤ (^B オー) ウヨモンテ (^B ソコナ ユービンキョク) サイゴア コマツンキョクエ
そうだそうだ。 (^B ああ) 卯衛門で (^B その 郵便局) 最後は 小松の郵便局へ

デテ (^C アー ソーカ) オー (^C ウーン) アノー ショムニ オットンヤケドー (^C オー)
出て (^C ああ そうか) ああ (^C ああ) あのう 庶務に いたんだけど (^C ああ)

アノー ダイブン コッチニ ニジューナンネンモ オットンヤ。ウン ソシテ ダンダン ヒトカ
あのう 大分 こっちに 20何年も いたんだ。 うん そして だんだん 人が

オランシー。

いないし。

B ホイテ ココラ ユーキヤッテ ヨケー フルヤロー。(C オー) サンメータン ヨンメートル。
そして こちら辺は 雪だって たくさん 降るだろう。(C ああ) 3メートル 4メートル。

(C オー) ヨノモノァ アルケンケンド ハヤシサンダキャ ^(注32) ユ ノ ナンカ ユーキ ホラ
(C ああ) 他の者は 歩けないけれど 林さんだけは 何か 雪 ほら

ヨノモノワ シズムサケ アルケンケド ファーファーファート イクンヤト。ソノ アトア
他の者は(足が) 沈むから 歩けないけれど ファーファーファーっと 行くんだと。その あとは

ミンナ アルケンカヤト。ホラ ウワツラニ ワー アルケド ワカメァ アルクト ホレ
みんな 歩けないんだって。ほら 上面に 輪が あるけれど 自分が 歩くと ほれ

スボスボー オチルサケ。ソーユー ヤマーノ (C カンジキ) アルキカタカラ (C カンジキ
ズボズボっと 落ちるから。そういう 山の (C かんじき) 歩き方から (C かんじき

ハイテ) アノー ソーソー (C シットルカヤ) カンジキカラッチュ ハキカタカラ
履いて) あのう そうそう (C 知っているんだ) かんじきからという 履き方から

アルキカタカラ チコ°ー。
歩き方から 違う。

A カ カラダ ホソテ メカ°タモ… (B.C 笑) (C イチジニ シズマンテ)
体が 細くて 体重も… (B.C 笑) (C いっぺんに 沈まないって)

B ガンバッタンヤゾー ソレデ。
頑張ったんだよ それで。

B ア アンケ°ー アノ オロッチューテ アブユーモン (C ア オランカ) アンケ°ー コトシ
案外 あの オロと言って 蛇というもの (C あ いないか) 案外 今年

スクナカッタ。
少なかった。

A オ コトシア ドーナッタヤラー (C オー) ドーナッタヤラ アノー アブワ オラン。
うん 今年はどうなったのか (C ああ) どうなったのか あのう 蛇は いない。

B ウン ナー。(C アレア ジブ…) カーモ オランダネーケ オーカ (A エッ) カー
うん ねえ。(C あれは …) 蚊も いないではないか 大蚊 (A えっ) 蚊

^(注33)
ヨーカ° ユーテ。
ヨーカ°(夜蚊)と言って。

- A カーモ ソヤ (B オーカ オランナ) ヨー ヨーカ° オー ソヤ。
蚊も そうだ。(B 大蚊は いないね) ヨーカ° うん そうだ。
- B カトリセンコ イランノヤデー。
蚊取り線香 いらないんだから。
- C イヤ ソレア アミヤ フランサケー アノー ミズタマリニ カー オランカ°ヤワ。(B アー
いや それは 雨が 降らないから あのう 水溜まりに 蚊が いないんだよ。(B ああ
ソーカ) オー アリヤ ナー アメ フルト ミズタマリニ カー ンナ フェルンヤケンドネ。
そうか) ああ あれは ねえ 雨が 降ると 水溜まりに 蚊が みんな 増えるんだけどね。
- (注34)
(A,B アー) セケド オ オロッチュモノア アレ アイワ タニカ°ワニ オルンジャケドノー。
(A,B ああ) だけど オロというものは あれ あれは 谷川に いるんだけどねえ。
- B ア アレワ (笑)。
ああ あれは (笑)。
- A ソヤ ソヤ。(C オー) ソヤケドー オロモ オラン。
そうだそうだ。(C ああ) だけど オロも いない。
- C オロモ オランケ。
オロも いないか。
- B オランナー。(A オン マエ イッピキホド ハイ…) ウチンナカエ ハイッテコンワヤナー
いないねえ。(A うん 前に 1匹ほど 入っ…) 家の中へ 入ってこないんだねえ
コトシワ。
今年は。
- A ハイッテコン。ホシテ ヤマニ オラン。(B ウーン ソーカモシレン) オー マー イッピキカ
入ってこない。そして 山に いない。(B ああ そうかもしれない) ああ まあ 1匹か
ニヒキー ア チーセー ヤツワ オラン デケー ヤツカ° ブーン ブーント (B オッタカ°ニ
2匹 小さい やつは いない 大きい やつが ブーン ブーンと (B いたのに
ソーヤ) タマニ オルケド。 アンナ メズラシー。
そうだ) たまに いるけれど。あんなのは 珍しい。

(注1) ヒリタコとは、ヒリ(昼ご飯)とタコ(食べたかの意のタベタコの省略形)のくつついた形か。

(注2) 聞きなれない言葉は話しの速度が速いように感じるという意味。

(注3) ここでの5ヶ村とは、新保(新保出^{しんぼで}=木地小屋を含む)、須納谷^{すのだに}(現在の花立町)、丸山、杖^{つえ}

(現在は津江と書く)、小原の5集落をさす。

(注4) 新保は大日川流域の集落。丸山町のさらに上流部にある集落。

(注5) 花立も新保同様、丸山町よりもさらに大日川上流部の集落。新保と丸山の間位置する。

(注6) 小原は丸山よりも大日川の下流部にあり、現在は大日ダムのために水没した。

(注7) ここでの「口」とは、大日川流域の谷の口(下流域)の方をさす。

(注8) 木地小屋とはかつて新保の出作り村としてあった新保出のこと、焼畑をするための出作り村。

福井県との県境にあり、ここを通過して福井県へも出かけたと言う。

(注9) 新保の奥(東側)にある集落。

(注10) 新保と木地小屋の間にあった。出作り小屋が2軒あった。

(注11) 地名か。福井県勝山市の地名らしいが不明。

(注12) 福井県勝山市のこと。

(注13) 福井県丸岡町の竹田に抜ける峠越えの道。

(注14) 竹田越えの話をしている場面であるので「丸山」ではおかしい。福井県丸岡町の「丸岡」と言おうとしての言い誤りか。

(注15) 久保喜代治氏の家の屋号。

(注16) 人の名か。道場さんのことを言おうとしたか。

(注17) 岸清左衛門氏の家の屋号。父親の名が清三郎であったところからセーザと呼ばれた。

(注18) 白木越え、花立越えのいずれも、かつて新丸村から東の白峰村に向かうために利用された峠道。

(注19) 山の名。次の大日も同じく山の名。

(注20) かつて新丸村から山越えで東の白峰村へ行くための道。

(注21) かつて白峰から丸山に来て住みついた家の名。

(注22) かつて杖(注3参照)から丸山に来て住みついた家の名。

(注23) ダイクワンのクワは、かつての歴史的仮名遣いの「くゎ」にあたる合拗音。当該方言をはじめ石川県内の方言では、高年層で今もなお比較的よく聞かれる。

(注24) 丸山町を含む旧新丸村が、東に隣接する白山麓の白峰村などとともに、江戸時代に幕府直轄の天領だったことをさしている。

(注25) 「担いで」の意にあたるカンデは、当該方言以外にも、白山麓白峰方言や、昨年度の調査地点であった小松市大杉町方言でも使用される。カンデの終止形に相当するものとしてカク[°]、カム、カヌが考えられるがその形は確認できず、テ形としてのカンデのみが使用されている。

(注26) 王生喜太郎^{いくるみ}氏の家の屋号。

(注27) 久保誠喜氏のこと。話者B久保すゞ氏の夫の名。

(注28) 現在の石川郡白峰村字白峰の旧字名。今も白峰の特産品牛首紬という織物にその名が残る。

(注29) コンキトは「根気と」から。

(注30) 川良雄氏のことであろう。

(注31) 郵便局をしていた堀口家の屋号。

(注32) ダケワ→ダケァ→ダキャと変化した形。

(注33) ヨーカ[°]とは「夜の蚊」の意。確認はしていないが、当該方言では日中田畑などで飛ぶ^{ぶよ}蚋をカ、それに対し夜に飛ぶ蚊をヨーカ[°]と呼んでいるものと思われる。つまり、同じ血を吸う虫として同じカの仲間と認識していた古い状態を示すものであろう。これと同じ現象は、隣接する白峰村方言でも確認できる。

(注34) 小型の^{あぶ}蛇の称。大型の蛇に比べ刺されたときの痛みが強い。

6.2 中海町方言の自然談話

<話し手>

A ^{ひがし}東 幹雄 男 大正8年生まれ 中海町

B 北 浩 男 大正13年生まれ 中海町

<同席者>

C 田中鉄哉 男 昭和51年生まれ 調査者(小松市安宅新町)

A マー イマカラ ンナー ジューネン ニジューネン イクト コンナコトナンカ ^(注1)ジェンジェン
まあ 今から そんな 10年 20年 過ぎると このようなことなんか 全然

(^B ワカラ^ンヨー) ワカラ^ンヨー ナルシー (^C ソーデショーネー) ナル。イワンヨニナル。

(^B 分からないように) 分からないようになるし (^C そうでしょうねえ) なる。言わないようになる。

C ケッコ イマデモー イミ ワカッテモ ツカワナイ コトバッテ アリマスネ。
結構 今でも 意味はわかってても 使わない 言葉って ありますね。

A テ アリマスナ。
て ありますね。

C ダカラ ホント アト シバラクシタラ ナニカ サミシク ナリマスヨネ。
だから 本当 あと しばらくしたら 何か 寂しく なりますよね。

A ソシテー ソンナコト ソヤ ソンナコト ユータ オボエ アルカンナッテ ソンナユーナ
そして そんなこと そうだ そんなこと 言った 覚えが あるかなって そのような

ケーコンナッテ。

傾向になって。

C オーカッタデスネ ケッコー (^A ウーン) ソーユーノ キータコト アルケド (^A ウーン)
多かったですね 結構 (^A うーん) そういうの 聞いたこと あるけれど (^A うん)

イマ ツカワナイ。

今は 使わない (というもの)。

A ホンデー イマー コレ ンナ ^(注2)スワットリヤ コー ミナ アノー ヨーソーン ナッタヤロネ。
それで 今 これ 皆 座っていれば こう 皆 あのう 洋装に なっただろ
う。

フクナンテ ムカシアー ドッカー イクトキ チョッコ ハイカラナ ヒトァ アノー ナンジャ
服なんて 昔は どこかに 行くとき 少し おしゃれな 人は あのう 何だ

ヨビコァ タイカ^(注3)イ インナー アノー ケット カブッテ ホィテ コー ナンシルカ ソレカラ
大概是 皆 あのー 毛布を 被って そして こう 何するか それから

アツシ ユーテ ラシャノンネー ナニカー キモノ キテ ホィテ オビ シメテ ホンナ
アツシと言って 羅紗のね 何か 着物を 着て そして 帯を 締めて そんな

イッタンヤ。ホンデ ポーシナンカモ インナー シ ネカッタンヤ。ホーカブリヤ。ンデー
行ったんだ。それで 帽子なども みんな なかったんだ。頬かむりだ。それで

アンシェーゴネンニ ウマレタ ジーァ ユータカ° ニチロセン アノ ニッシンシェンソーニ
安政5年に 生まれた 祖父が 言ったが 日露戦争 あのう 日清戦争に

アノー カナザワカラ ヘータイァ シュッパツシルン。^(注4)(^c ウン) ツルカ°マデ アルイタンヤ
あのう 金沢から 兵隊が 出発するの。 (^c うん) 敦賀まで 歩いたんだ

ラッパ フィテ (^c カナザワカラ) オン (^c ツルカ°マデ) ラッパ フィテ イッタンヤ。
ラッパを吹いて (^c 金沢から) うん (^c 敦賀まで) ラッパを 吹いて 行ったんだ。

ホイデ ソントキヤー アノー メイジジューネンノ セーナンエキニ ツカッタ ブキオ アノ
それで その時は あのう 明治10年の 西南の役に 使った 武器を あのう

テッポヤラ ケンヤラ ミナ カタンデイッタ ワケヤ。ソレカラ ジューネン タッテ
鉄砲や 剣などを 皆 担いで行った わけだ。それから 十年が 経って

ニチロシェンソー。シー ナノー ニチロシェンソン ナッタラ ソントキワ エノー アツシ
日露戦争。 ううん あのう 日露戦争に なったら その時は あのう アツシを

キトルモンカ° ハンブン アトノモノァ インナー ケット カブッテ コー コーシンシタンヤ
着ている者が 半分 残りの者は 皆 毛布を 被って 行進したんだ

アノー キョートエ。ホンデー ジューネンノ アイダニ ソノー イワユル ケーザイシェー
あのう 京都へ。 それで 10年の 間に その いわゆる 経済成長が

チョーカ° ソレデ イミサレルワケヤロ。ホンデ ソノコロァ マダ フクナンチュノァ
それで 意味される 訳だろう。それで その頃は まだ 洋服などというのは

ガッコノ シェンシェーカ アルイワー アノー ケーサツカンク°ライァ フク キタンヤワ。
学校の 先生か あるいは あのう 警察官ぐらいは 服を 着たんだよ。

ソンデー オメーラ ガッコ イッタラ ベンキョーシター フクギルヨナモンニ ナラナダチカン^(注6)
それで お前たち 学校に 行ったら 勉強をして 服を着るような者にならなくては駄目だ

トユーコトワー ンー ナー^(注7) エレモンニ ナレトユー イミネ イタラ ウチノ ショタイデノ^(注8)
と言うことは ううん 偉い人に なれという 意味に そうしたら 私の家の 分家の

シンダ オヤジャ フククライ ンデ イクラデモ キテヤルヤー ン イマ ユーテ イマデモ
死んだ 父親は 服ぐらい それで いくらでも 着てやるよ うん 今 言って 今でも

キレルワイッテ シデ ユーター ナンシタッチュー ハナシオ ヨー キーター。ホイデー
着られるよって 言って 何したという 話を よく 聞いた。 それで

サギョーギンANCHUノァ コノゴロァ ンナ キフルシタトコロノ アノー ズボンヤトカ
作業着などというのは この頃は みんな 着古したところの あのう ズボンだとか

アルイワ シャツナンカオ キトルケド アノコロァー ナンモ サックリーチュテンネ モメンノ
あるいは シャツなんかを 着ているけれど あの頃は 何も サックリといってね 木綿の

アノー マエカケ タンボヨーノ モー ウチデ ンナ ヌータモンナンエ。ホイデー アノー
あのう 前掛け 田んぼ用 もう 家で みんな 縫ったもんなんだ。そして あのう

サシコユーテ マー イマー マー アノー ショーボーショーアタリァー サシコナンカ
刺子といって まあ 今 まあ あのう 消防署 あたりは 刺子なんか

キトランカヤ。アレワ モー コー アサデ アンデ ホイデー ソレデ チョット イタメタ
着ていないよ。あれは もう こう 麻で 編んで そして それで ちょっと 傷めた

トコロモ マター アノー アノー ヌーテ ホイデー イワユル シャックリトユーノ
ところも また あのう あのう 縫って そして いわゆる サックリというのを

コシラエテ ホイデー ソレ キトッタモンヤ。ンー シェーカツヨーシキモ ンナー
作って そして それを 着ていたものだ。うん 生活様式も みんな

ヨーシキカサレトルシ イジェンナ ナ^(注9) ンナ アノー フウンナリャー カヤブキノ ヤネカラ
洋式化されているし 以前は みんな あのう 冬になれば 茅葺きの 屋根から

イノー ア^(注10) サッキ イッタヨナモンジャ アノ タルギァ サカッテ ナカデ バイタ タクノ
あのう さっき 言ったようなものだ あの 氷柱が 下がって 中で 薪を 焚くのは

ジージャツゾネ。ホンデ トケタカオ ホレー ソレ アノー ヨナベ ネットッ ネットル
おじいさんだったよ。それで 解けたのを それ それ あのう 夜なべ 寝ている

アイダニ ソトノ キオンカ° サカ°ッサケ コールワケヤ。ソノ ソレオー コヤッテ オッテ
間に 外の 気温が 下がるから 凍るわけだ。 それを こうして 折って

クワエタ クタコトモ アル。(B クタコト アルンナ) ンー。イマ ソンナ ユキモ
啜えた 食べたこともある。(B 食べたことあるな) うん。今 そんな 雪も

サイキンナ フランシ ソレニ ンー。
最近 は 降らないし それに うん。

A アノー アンコロアー モー ハルサキンナー ウチ タンボ イッテ チク°サオ ヒッパッテ
あのう あの頃は もう 春先にね 家の 田んぼに 行って 地草を 引っ張って

コイドケァ シロイ ネァ ツイテン。ソレオ カムト アマイニエ。エマン ナッテモ
扱いでよくと 白い 根が ついている。それを 噛むと 甘いんだ。 今に なっても

アモネーヤロート オモンニャカー。(C ムカシワ) ンー。ソイデ チク°サン ネーッコ
甘くないだろうと 思うんだけど。(C 昔は) うん。それで 地草の 根っこを

コイデア ソレオ カンデ クトッタモンジャ。イマク°レニ コイドモラー ソンナー アノー
扱いでは それを 噛んで 食べていたものだ。今頃の 子供たちは そんな あのう

タンボ イッテ コノネオ コイダシャ ソレ クエルトユーヨナコト シランワイ。ソンナコト
田んぼに 行って この根を 扱いだら それを 食べるということを 知らないよ。そんなこと

シテ アソベンノヤサケー。アー。ホンデー アノー ワシントコノ アノー ハハオヤノ
して 遊べないんだから。 ああ。それで あのう 私の家の あのう 母親の

アノー キョー アノー オヤノ キョーダイヤ コリャー オースキ°ダンノ ハサダニカラ
あのう あのう 親の 兄弟だ これは 大杉谷の 波佐谷から

ナンベー ワタッテ (C ンー) イミンシタワケヤ。ソイデ ソノヒトカ° ソノヒ アー
南米に 渡って (C うん) 移民したわけだ。 それで その人が

アノー コチラエー キター ソノヒトァ ムッツカ ナナツノトキニ ハサダニノ ガッコー
あのう こちらへ 来た その人は 6歳か 7歳のときに 波佐谷の 学校を

ソツキ°ヨーシテ ホイデ ムコー ワタッテ ホイデ ソノヒトノ クローバナシ キートツカ°
卒業して それで 向こうに 渡って それで その人の 苦勞話を 聞いていたが

アノー タベモノカ° ナインヤサケネー。ホイテ ハラヘルノニー ヨナベワ ハラヘッテ
あのう 食べ物がないんだからねえ。そして 腹が減るのに 夜なべは 腹が減って

(注12) ネレンケ°。ホイテ ナイタッチュア オトコカ° ナンジャイッチュナ フツカニ ミッカ ママ
寝られないんだ。そして 泣いたというと 男が 何だいというような 2日か 3日 ご飯

クワンダカッターテ タタカレタモンヤ。ソーシトー ンー コンシュー アスニ シェドクー
食べなかったからといって 叩かれたものだ。そうすると うん 今週 明日に

シェド イッテ クサ ムシッテ ソレ ソレー シオデ モンデ クエッチュテ (° ウーン)
家の裏庭に 行って 草を むしって それを 塩で 揉んで 食べろと言って (° うん)

(注13) ホイテー ナニト コレト コレト クテモ ドンネーチュコトア ドチャクノ ニンケ°ンニ
そして 何と これと これと 食べても 大丈夫ということは 土着の 人間に

キーテ (° ンー) ホイテー ワカッタンヤ。ホイテ ンナ コー シルシシタンヤ。ソレオ
聞いて (° うん) そして わかったんだ。そして みんな こう 印をしたんだ。それを

ヒリコニ ホイテ シオデ コヤッテ モンデー デー ネオ スナ ダイタ。ウシカ ウマンテナ
そして 塩で こうして 揉んで それで 根を 砂を 出した。牛か 馬みたいな

(注14) モンヤ。ホンデ ソーユー マー イワユル ンナー ホントニ ヤシェーテキナ シェークワツ
ものだ。それで そういう まあ いわゆる そんな 本当に 野生的な 生活をだね

オヤンナー アノー スルトユーコトアー ユッタ オヤカ° コノヘンニ オッテモ チク°サノ
あのう するということは 言った 親が この辺に いても 地草の

ネヤトカ ソレカラ オバコヤトカ ソーユモンカ° タベラレルッチュコトオ トシヨリカラ
根だとか それから 車前草だとか 車前草 お お ば こ だとか そういうものが 食べられるということを 年寄りから

キーテ (° ン ン ン) ホイテー ナンエー ムコーエ ワタットルモンヤ ドチャクノ
聞いて (° うんうんうん) そして 何だ 向こうへ 渡っている人が 土着の

モンニ オマエラー ココニ クエル ンナ タベレル クサワ ドレト ドレヤーッツ
人に お前たち ここに 食える そんな 食べられる 草は どれと どれだと

トユーヨーナコトオ キーテ シットッテン。ホンデー オソラク イマカラー イマン コンナ
というようなことを 聞いて 知っていたんだ。それで 恐らく 今から 今の こんな

ケーザイジョータイ ツズクノ ナンシルトキニワ モシ キキントユーコトン ナッテクット
経済状態が 続くの 何するときには もし 飢饉ということに なってくると

イマノ アノー マー コドモアタリ ワシラモ マズ ソヤケンドカー マー マー
今の あのう まあ 子どもなどは 私たちも まず そうだけれども まあ まあ

ヤソーナンカワ マー カンデ コリャ タベレントユーコトオ シットルモノワ オランヤロト
野草なんかは まあ 噛んで これは 食べられないということを知っている者はいないだろうと

オモウ。 ソンナー シューカツ ソンナ アソビ シトランモン。(^c ウーン ソーデスネ)
思う。 そんな 生活 そんな 遊びを していないもの。(^c うん そうですね)

ン。ホンデ シジェンノ ナンヤラッチュモノア コリャ ヤクソー ヤクソーツチュケンドカ
うん。それで 自然の 何とかというものは これは 薬草 薬草というけれども

モ ヤスデニ タベトッテン。(^c ンー) ソレニヨッテ イヤ コレ クタラ ハライタ
もう 既に 食べていたんだ。(^c うん) それによって いや これを 食べたら 腹痛が

ナオットカンネ ホレ コレ クタケンドカ ドーモナランダトカッチュナ。 ソシタラ
治ったとかね ほら これを食べたけれど 何ともならなかったとか言うの。そうしたら

クエンテ。イマノモノア ソーユーコトン ナット オー ソンナ アソビ ヘージェーコイテ
食べられないって。今の者は そういうことになると ああそんな 遊びを 普段から

シトランヤロー。ホンデ ソレワ マター サイキン コドモガ^o モノスコイ ヒドイ ハンザイ
していないだろう。それで それは また 最近 子どもが ものすごい ひどい 犯罪を

オコシトルネー。(^c ンー) サツジンジケン オコシタリー。アーユコトナンカッチュー
起こしているねえ。(^c うん) 殺人事件を 起こしたり。 ああいうことなんかという

ヤッパリ ソーユー ソノ ノソダチノ ソノ アソビガ^o デケンサカイニ マン ソーユーナ
やはり そういう その 野育ちの その 遊びが できないから まあ そういうような

トコエー イク ニンゲンカ^o デケテクランナイカトー。(注15) ンナー アケテモ カオサエ
ところへ 行く 人間が できてくるんじゃないかと。そんな 明けても(暮れても) 顔さえ

ミリャ ベンキョシェー ベンキョシェーテ オシマクルンヤゾ。ホンデー ムカシャー アノー
見れば 勉強しなさい 勉強しなさいと言って 押しつけるんだよ。それで 昔は あのう

ウラカ^o チシェ コドモントキャー ワルイコト シタリ ソーユコト シタンジャ。ンナー
私が 小さい 子どもの時は 悪いこと したり そういうことをしたんだ。みんな

アカベニー アノー バイタノー アノ サキニ ヒー アルヤロ。(^c ン) ソレ ソレア
お尻に あのう 焚き物の あのう 先に 火が あるだろう。(^c うん) それ それは

ピシャーット ヒッツイタモンヤ。ブクブクーッテ コンナンシテ (^c ンー) ヒブクレン
ぴしゃっと くっついたものだ。ぶくぶくと このようにして(^c うん) 火脹れに

ナッタン。(°アー) エマン コドモニ ソンナコト ショーモンナラ ンナ ヒデコトン ナル。
なったの。(°ああ) 今の 子どもに そんなことをしようものなら そんな ひどいことになる。

(° ンー) ウー ソーユーコトオ オヤワー ワルイコト シルト コヤゾーッテユー ナンヤラ
(° うん) そういうことを 親は 悪いことを すると こうだぞっていう 何やら

ヤレン。(° ンー) ソシテ クライレルゾーッテューター アノー ユーモンノ ウチニ クラ
やれない。(° うん) そして 蔵に入れるぞと言って あのう 言う人の 家に 蔵が

アルヤロ。ソレオ ホリコンデ ソイテ イチニチモ ホッタンヤ。 マ ソンナコヨア
あるだろう。それを 放り込んで そして 1日もの間 放っておいたんだ。まあ そんな~~~~~

デキンサケ コドモラ。(° エー デキマセンネ)
できないから 子どもたち (° ええ できませんね)

(注1) コンナコトナンカとは「方言のことなど」の意。

(注2) 同じ調査会場に同席した話者の方々が座っているのをさして言っている。

(注3) 毛布地で外套のように着たもの。

(注4) 福井県敦賀市。金沢から京都へ行軍の途中敦賀までの意。

(注5) 五段活用動詞カタク°は「片方の肩で物を担ぐ」意を表わす。

(注6) ~ナダチカンは動詞未然形に接続して「~なくてはならない」の意を表わす。ダチカンは「埒明かぬ」に由来する形。

(注7) ホイタラのホが聞こえない形。

(注8) ショタイデは「所帯出」で「分家」の意。

(注9) ンに後接する助詞「は」(ワ)は、ここでのように時にナで実現することがある。この談話資料中にも他にサイキンナ(最近は)などの例が見られる。

(注10) タルキは福井県嶺北地方から石川県にかけて分布する「氷柱^{つらら}」の方言形。「垂氷^{たるひ}」に由来するが、北陸地方では「屋根の垂木の先に下がるから」との民衆語源によりタルキと変化したようだ。

(注11) サクサとは道に生えている草の総称。「地草」の意か。具体的にはスイバのことをさして言ったことのこと。中海では方言でスリコンボと言う。小松ではスイカンボという呼称が一般的。

(注12) ネレンケのケは「~のだ」の意の~カ°ヤが~カ°イ→~ケ°を経て変化したもの。

(注13) 「どうもない」の意のドモナイがドンナイ→ドンネーと変化した形。

(注14) シェークワツ(生活)のクワは、かつての歴史的仮名遣いの「くわ」にあたる合拗音。当該方言をはじめ石川県内の方言では、高年層で今もなお比較的よく聞かれる。

(注15) デケテ克蘭の克蘭はクルカン[kurun]の下線部の音声脱落して発音されている。当該方言を含む小松方言や小松市以北、金沢周辺の方言までに男性を中心に盛んに聞かれる現象である。

7. 郷谷川・湊上川・大杉谷川流域の方言分布

小松市方言調査では、小松市の言語地図(方言地図)を作成するために5年間で市内全域および周辺地域の言語地理学的調査を行うことにし、昨年度の大杉谷川流域(8地点)を皮切りに調査を開始した。最終的には100地点以上の分布調査をめざしているが、今年度は、昨年度の大杉谷川流域の東と北に隣接する郷谷川(大日川流域の丸山町を含む)、滓上川流域の計24地点で調査を行なった。以下では、今回の調査結果に昨年度の調査結果を加えた計32地点の資料に基づいて作成した言語地図(「小松市方言地図 Dialect Atlas of Komatsu City」)の中から、前稿でも取り上げた項目を中心に15項目を取り上げ、言語地図でその分布を示すとともに若干の言語地理学的考察を試みた。なお、同一地点で複数の語形が得られた場合は、それらの語形にあたる複数の記号(各地図の凡例参照)を言語地図中のその地点の場所に併記し、それらの記号をへで結んで示した。

ではまず、遊びを中心とした子どもの世界のことばかりいくつかを取り上げる。

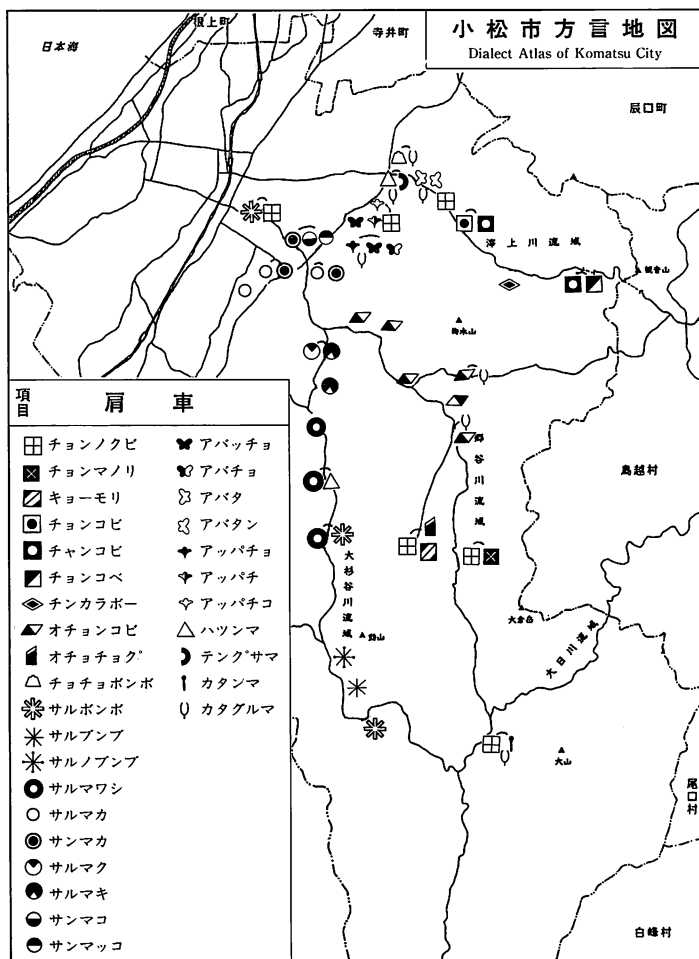
7.1 肩車

図3の分布および凡例を見てまず気がつくことは、調査地点32に対して31種もの方言形が分布することである。国立国語研究所編（1968）『日本言語地図 第3集』で「肩車」方言の全国分布を見ると、全国の他地域に比べて何故か北陸地方には肩車方言の種類が多い。その理由は不明だが、小松市東部だけでも実にさまざまな肩車方言が分布している。

まず、チョンノクビ類の分布を見よう。大日川上流域の丸山から郷谷川上流部の尾小屋、西俣にかけて、郷谷川下流域、滓上川下流域の北浅井、五国寺、中海にチョンノクビ（チョンマノリ、キョーモリを含む）が分布する。さらに、郷谷川中流域の観音下から金野までにオチョンコビ、そして滓上川上流域にチョンコビ(チャンコビ、チョンコベ、チンカラボーを含む)が分布する。これらチョンノクビ類は、「首にちょっと」乗るその様子からと考えることもできそうだが、かつて祭りの稚児行列で神聖な稚児を汚れた大地から隔離するために肩車をして歩いたと言われていることから、「稚児の首」に由来するものと思われる。チコノクビは、その語源が曖昧になるとともにチョンノクビに変化し、それはさらに親から子へ、あるいは、子どもたちの口から口へと伝えられるうちにさまざまな音声変種を生み出したに違いない。チョンノクビは、石川県内ではほかに能登半島奥能登地方にも分布が見える。

次に分布が目立つのが大杉谷川流域と郷谷川下流域に分布するサル類（方言形

图 3



の前部要素に「サル」を含むもの)である。小松市だけでなく北陸地方にはサル〜の類の肩車方言が広い範囲で分布し、この地方特有の方言形として注目される。サル〜類は、かつて農閑期や祭りの際にこの地方を訪れた伊勢の大神楽や大道芸の中に、猿回しの芸(人が猿を肩車するもの)があったことによるらしい。大杉谷川流域では、赤瀬より上流の地点にサルボンボの類(サルボンボ、サルブンブ、サンノブンブ)、赤瀬から下流の瀬領までと郷谷川下流域には、サルマワシ、サルマキ、サルマカ、サンマカなどが分布している。サルボンボのボンボは「おんぶ」の意であろう。これらの方言形も、猿回しに由来することが忘れられていくうちに、さまざまな音声変種を生じたと思われる。なお、筆者も調査に協力した、佐藤茂(1983)「辰口町のことば」(695頁)に載る辰口町およびその周辺の「肩車」の方言分布図(1981・1982年調査。作図は筆者が担当)を見ると、辰口町の東の鳥越村から鶴来町にかけての地域でもサルボンボがまとまって分布している。

チョンノクビ類とサル〜類については、分布状況から見て、チョンノクビ類の方が古い分布と考えられる。

このほか、図3で加賀産業道路に沿った中海、五国寺、花坂、大野にまとまった分布の見えるアバッチョ類(凡例でアバッチョからアッパチコまで)は、形態的に辰口町に広く分布するアンバカイ、アブラカイ、川北町に分布するアバタンコなどと類似しており、それらとの関連がありそうである。また、上り江のハツンマも、辰口町やそれに隣接する寺井町東部、小松市北部などに点々と分布している。川北町では正月1月20日に行われる行事(各家の玄関先に福俵を投げ込んだり、そこで餅を貰ったりする)をハツンマと言うので、何かそうした行事内容との関連で肩車の方言形になったものかもしれない。

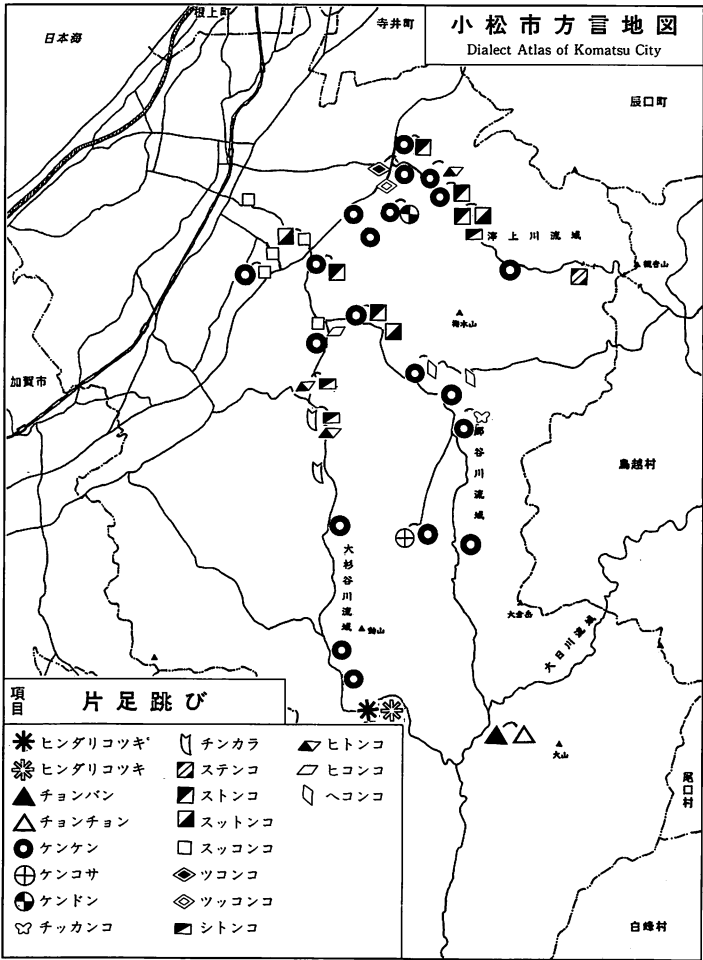
図 4

7.2 片足跳び

次に、片足でピョンピョン跳ぶ「片足跳び」のことをどう言うかの分布を見てみよう。

図4ではまず、大杉谷川最上流部大杉本町のヒンダリコツギ、ヒンダリコツギと、大日川上流域の山間の地丸山のチョンパン、チョンチョンという方言形が目进行く。この地域にかつて分布した方言形の残存分布とも考えられるが、それぞれに独自に生じた可能性も否定できない。特に丸山のチョンパンは片足跳びをしながらする遊びの名称から転じた可能性もありそうだ。

これに対し、小松東部に広く分布するのはケンケンである。『日本言語地図』によれば、ケンケンは関西を中心に中国・四国の瀬戸内海側に分布する「片足跳び」の最も新しい方言形と見られ、それが当該地方にも伝播し分布を拡大したものと考えられる。



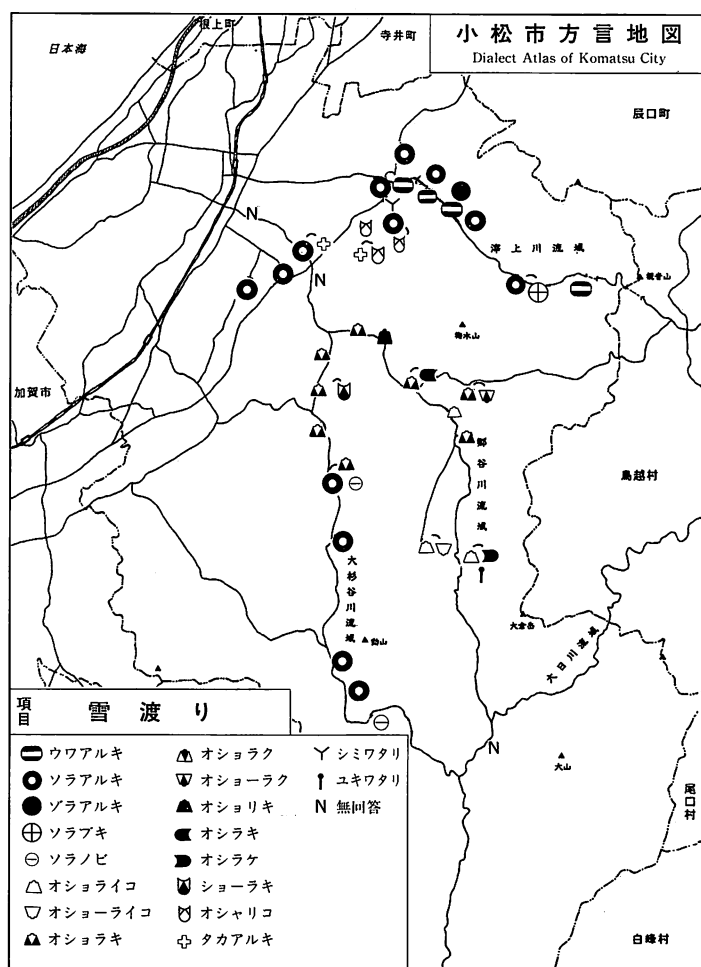
一方、ケンケンの分布と重なるように、大杉谷川下流域にはヒトンコ、シトンコ、ヒコンコ（瀬領、波佐谷、長谷）が、郷谷川中・下流域にはヘコンコ（松岡、沢）、ストンコ、スットンコ、スッコンコが、さらに滓上川流域にもステンコ（中ノ峠）、ストンコ、スットンコ、ヒトンコ、ツコンコ、ツッコンコ（原、岩淵、中海、荒木田、軽海）の分布が見える。これらのうちどれが古い語形なのか、何に由来するものなのかは不明だが、その形態からみて同じ系列の方言形と考えられる。おそらく、ケンケンがこの地方に分布を広げる以前から分布していた方言形であろう。そのことがまた、微妙に発音の違う多くの音声変種を生み出した要因でもであろう。

7.3 雪渡り

「雪渡り」とは、冬の晴天の寒い朝に雪の表面が固く凍り、その上を歩いても足が雪にもぐらないので、普段歩けない田の上などを自在に歩いて学校に行ったり、駆け回って遊ぶことをさす。共通語形は存在しないと思われるが仮に「雪渡り」としておく。雪国（多雪地域）に暮らした経験があれば、子どもの頃の楽しい冬の遊びの1つとして記憶に残っているものであろう。

図5では、大きく分けて3つの分布勢が見られる。ウワアルキは滓上川流域（中ノ峠、岩淵、中海、軽海）に、ソラアルキ（ゾラアルキ、ソラブキ、ソラノビを含む）は大杉谷川中・上流域（上り江～大杉）と郷谷川下流域（本江、蓮代寺、三谷）と滓上川流域に、そしてオショライコ、オショラク、オシャリコといった一連の似た方言形（凡例のオショライコ～オシャリコ）が郷谷川流域と大杉谷川下流域に分布している。このうちソラアルキは、北に隣接する辰口町、さらには寺井町や川北町にも広く分布するもので、この地方の代表的方言形と言ってよいものである。「上の空」という言葉があるが、ソラアルキのソラは（雪の）上の意の「空」に由来するものであろう。分布から見て、かつては小松東部の全域にこのソラアルキが分布していたと考えられる。滓上川流域のウワアルキは、ソラアルキのソラが「（雪の）上」を意味することがわかりにくくなって、語源を明確化するために後に生まれたものと思われる。また、多くの音声変種が見られるオショライコ、オショラク、オシャリコの類のうち、比較的分布の広いオショラクは、瀬領の話者の一人が「オソラアルキが縮まった形」と説明しているように、ソラアルキからの派生形とみることができる。オショラクに変化するといよいよその語源はわからなくなり、それゆえに様々な音声変種が生じたと考えられる。筆者の出身地である福井県武生市ではオシャラ（シノル＝に乗る）と言っていたが、これもオソラ（ニノル）から変化した形であろう。

図 5



は寺井町や川北町にも広く分布するもので、この地方の代表的方言形と言ってよいものである。「上の空」という言葉があるが、ソラアルキのソラは（雪の）上の意の「空」に由来するものであろう。分布から見て、かつては小松東部の全域にこのソラアルキが分布していたと考えられる。滓上川流域のウワアルキは、ソラアルキのソラが「（雪の）上」を意味することがわかりにくくなって、語源を明確化するために後に生まれたものと思われる。また、多くの音声変種が見られるオショライコ、オショラク、オシャリコの類のうち、比較的分布の広いオショラクは、瀬領の話者の一人が「オソラアルキが縮まった形」と説明しているように、ソラアルキからの派生形とみることができる。オショラクに変化するといよいよその語源はわからなくなり、それゆえに様々な音声変種が生じたと考えられる。筆者の出身地である福井県武生市ではオシャラ（シノル＝に乗る）と言っていたが、これもオソラ（ニノル）から変化した形であろう。

7.4 面子^{めんこ}

面子とは丸い小さな（大判のものもあった）ボール紙に絵が描かれた玩具である。かつてはよくその面子を地面や床にたたきつけて相手の面子をめくって遊んだりした。主に男の子の遊びであった。

図6の分布および凡例を見ると、丸系の記号を与えたマルウチ、マルケンなどのマル～類の方言形と、三角系の記号を与えたパッチ、パスなどのパ～類の方言形が当該地域を代表する二つの勢力とすることができる。分布からは、小松市街地に近い北浅井から東山、そして大野、花坂、五国寺、荒木田にまとまって分布し、大杉谷川中・下流域と郷谷川上流部にも点々と分布するパ～系の方が新しい方言形と考えたい。おそらく面子が地面や床に当たるときに出る音から名付けられたパッチがもとで、後にその分布領域の中でパス（パスウチ、パース、パッス、パスを含む）に変化したものと思われる。丸山のシッペン、尾小屋のベッタ、金平のベッタも面子遊びの音に注目した名であろう。分布からはそれぞれ独自に発生した可能性が高い。

一方、マル～類のマルはその丸い形に由来するに違いない。大杉谷川、郷谷川流域のマルウチ（「丸打ち」の意か。その変化形と思われるマルチ、マッチ、マルを含む）に対し、滓上川流域ではマルケン（「丸拳」の意か。その変化形と思われるマルゲン、マッケン、マルキン、マッキンを含む）と、同じマル～類でも二つの分布勢力に分かれている。

マルウチとマルケンのいずれが古いかは判断し難いが、パ～類とマル～類の新古関係については、分布から見てマル～類がパッチ、パスなどよりも前に分布していたものと思われる。

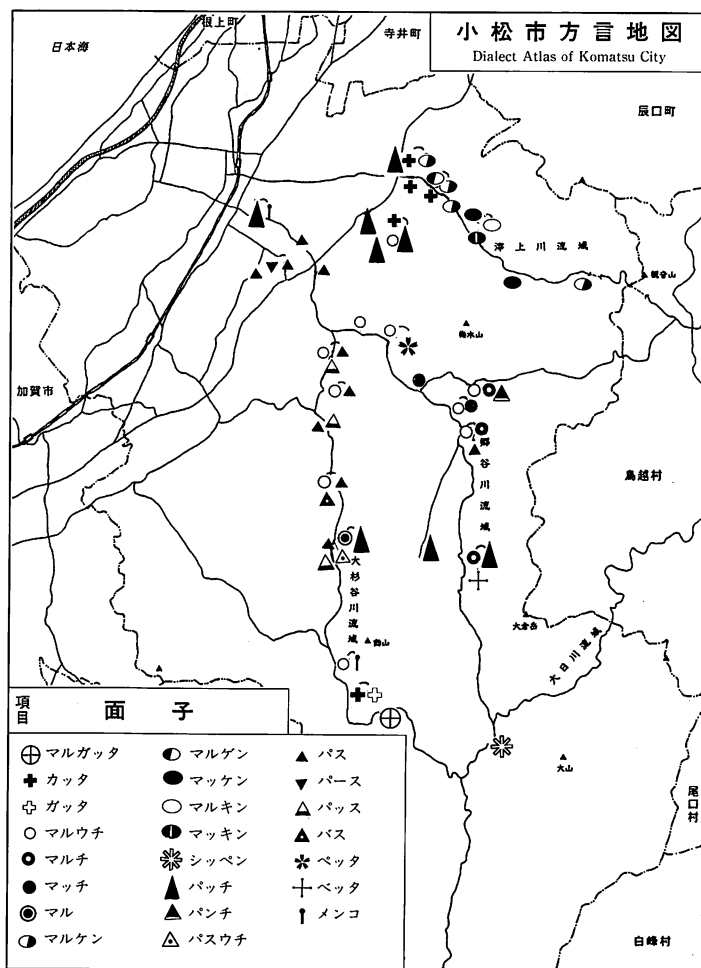
なお、他にもう一つ、大杉谷川最上流部の大杉本町と大杉中町、離れて滓上川中流域の中海、軽海、荒木田にカッタ類（マルガッタ、カッタ、ガッタ）の分布が見える。カッタはおそらくカルタ（骨牌）からの変化であろう。古くは丸でなく四角い面子もあったらしいので、もしかすると四角い形の時代に名付けられた、マル～類よりもさらに古い形の残存かもしれない。

では、次は動物や虫の名の分布を見てみることにする。

7.5 蛙

図7の分布からは、当該地域の「蛙」の方言形の歴史がはっきり読み取れる。大杉谷川上流部の大杉本町、大杉中町、下大杉町の3地点、大日川上流域の丸山、郷谷川支流の松岡、そして滓上川上流部の中ノ峠と、当該地域の周辺部にギャル（ギャールも）が分布している。いわゆる周囲分布の典型とも言えるもので、当然ギャルが古く、その内側に広く分布するギャワズ（それからの音声変化形と

図6



思われるギュワズ、ギョワズ、ギワズ、ギャオズ)の方が新しい分布勢力と考えることができる。ギャルはカエル→ガエル→ギャルと変化したもの、ギャワズはカワズ→ガワズ→ガワズ→ギャワズと変化したものであろう。

なお、興味深いのは、「蛙」の呼称としては周辺部でわずかにしか確認できないギャルが、次に述べる「おたまじゃくし」の呼称の一部としては、ギャル～からの音声変化形であるジャル～、ジャリ～、ジャレ～等を含めて全域で確認できる点である。それに対し、「おたまじゃくし」の呼称としてのギャワズ～は大野でしか聞かれなかった。同じ「蛙」に関わる語でありながら、＜ことばは一語一語すべて違った歴史をもっている＞ことを教えてくれるの例でもある。

7.6 おたまじゃくし

図8およびその凡例を見るとわかる通り、共通語形と一致するオタマジャクシ(今年度の重点調査地点であった尾小屋ではオタマジャクシしか聞かれなかった。他県からの人の入り込みが多かったために比較的共通語化の進んでいる尾小屋の一面が現われているとも見ることができよう)、蓮代寺のオタマ(オタマジャクシの下略形)、大野のオタンポを除くと、他はすべて「蛙の子」の意の方言形である。本来の形は、先に見た図7「蛙」の方言分布図からも明らかなように、ギャルノコ、ギャルコ°(蛙の子)であろう。それが大杉谷川中・下流域、郷谷川中流域ではギャルンコ、ギャンノコ、ギャンノコ°、ギャリコ°等に変化し、またさらには、音声変化の自然な方向として、それらの語頭のギャーが口蓋化してジャー～に変化したものが大杉谷川、郷谷川、湊上川の下流部にまとまって分布しているジャルコ°、ジャリコ°、ジャレコ°であろう。

図7

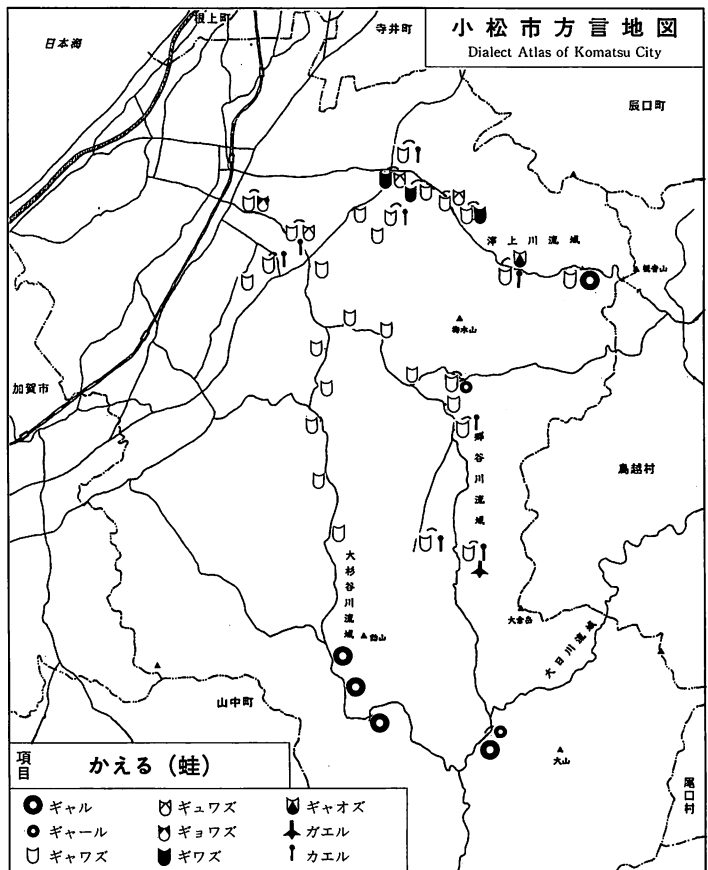
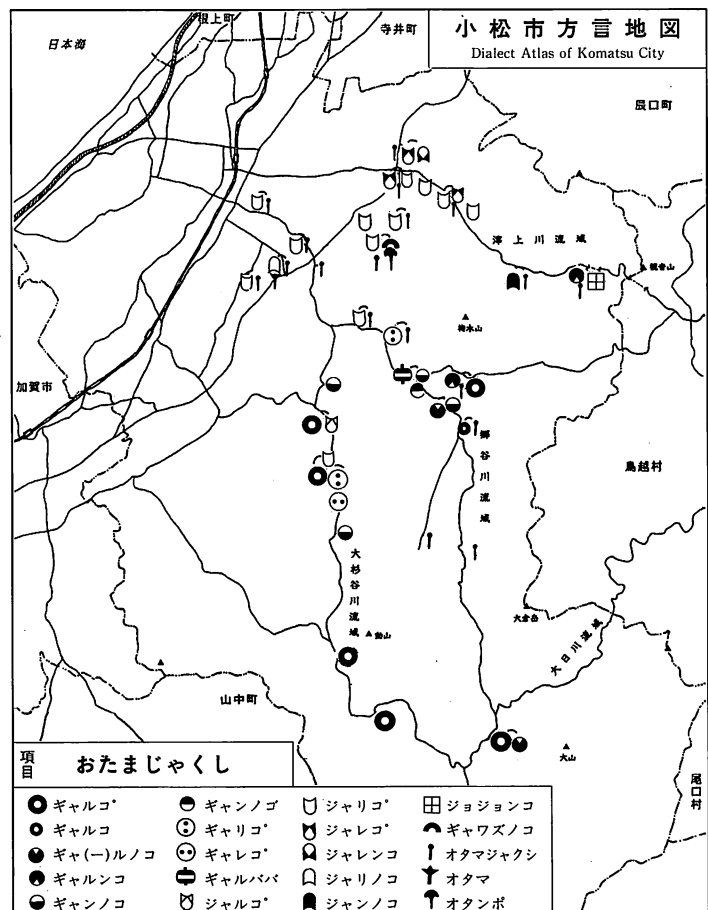


図8



7.7 あめんぼ

図9で当該地域の「あめんぼ」の方言分布を見てわかるとおり、無回答（特に名前がない、知らないなどの回答）の麦口を除いた31地点で、共通語形と一致するアメンボを含めてさまざまな方言形が聞かれた。このことは、「あめんぼ」との関連で次に触れる「みずすまし」の方言分布図（図10）に無回答の地点が多いのとは対照的である。何人かの話者から「この虫を獲って食べると泳ぎが上手になると言われた」といった説明が聞かれたのも、「あめんぼ」がそうした民間伝承とともにこの地方の人々にとって昔から親しまれていた虫であることを示すものであろう。

具体的に分布を見よう。大杉谷川上流部の大杉の3地点と大日川上流部の丸山を除いて広い分布が確認できるのはミズスマシ（ミズサマシ、ミズムシ、スマシ、ミズカキを含む）である。共通語ではミズスマシは別の虫「みずすまし」をさすことになるが、図10の分布を見る限り、当該地方では「みずすまし」は本来方言形を持たず、ミズスマシは「あめんぼ」をさす名称として用いられていたことがわかる。

先にも触れた「この虫を獲って食べると泳ぎが上手になると言われた」という「水」に関わる民間伝承がミズスマシに代表されるミズ〜という方言形を広く分布させた理由かもしれない。

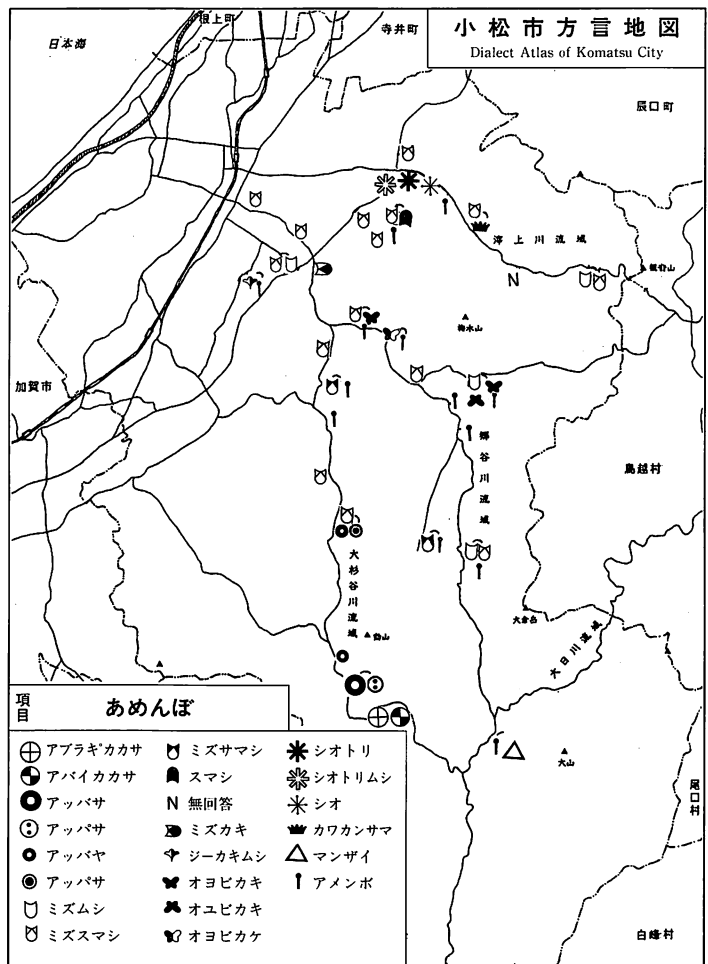
他には、大杉谷川流域の赤瀬から上流部にアブラギカカサ、アバイカカサ、アッパサ、アッパヤ、アッパヤの類（アッパサ、アッパヤはそれぞれアッパサ、アッパヤからの変化形）が、郷谷川中流域の松岡、金平、金野にはオヨビカキ、オユビカキ、オヨビカケの類が、そして湊上川流域の中海、軽海にはシオトリ、シオトリムシ、シオの類が、それぞれ小さな分布域を形成している。

7.8 みずすまし

この「みずすまし」は、昨年度の大杉谷川流域の言語地理学的調査で、「あめんぼ」の方言形としてミズスマシ類が多く聞かれたことから、本来の「みずすまし」にどのような呼称が用いられているのかを確かめるために今年度から調査に加えたものであった。従って、図10には大杉谷川流域の調査資料は含まれていない。

調査前には、「あめんぼ」のミズスマシと「みずすまし」のミズスマシの同音衝突をめぐって興味深い分布状況が見られないかと期待したが、結果的には「あめんぼ」のところでも言及したように、当該地域では「みずすまし」に対する呼称が本来なかったらしいことがわかった。図10に点々と（小松の町部に近いあたりでは比較的多く）見えるミズスマシはおそらく共通語としての新しい分布で、以

図9



前から用いられていたものとは考えにくい。「あめんぼ」が「この虫を獲って食べると泳ぎが上手になると言われた」といった民間伝承とともに人々に注目されていた虫であったのに対し、「みずすまし」はほとんど注目されることのなかった虫らしい。わずかに見える、モモタロー（本江）、ガメムシ（三谷）、ハチノジムシ（五国寺）、マイムシ（軽海）、モンモン（中海）などは、共通語としてのミズスマシが入り込む以前にそれぞれの地点で独自に発生、使用されていたものであろう。ハチノジムシ、マイムシなどは「みずすまし」の水面を泳ぐ様に注目しての命名に違いない。

今後はむしろ、「みずすまし」の共通語形ミズスマシの普及にともない、「あめんぼ」をさすミズスマシがそれとの同音衝突を避けようとして次第に共通語形アメンボに取って代わられることになるものと予想される。

7.9 かめ虫

誰もが一度や二度は触ってあの嫌な臭いの被害にあっているであろう「かめ虫」の呼称の分布である。

図11を見ると、小松の町部に近い郷谷川・滓上川の下流域でヘーコキムシ類（ヘーコキムシ、ヘータレムシを含む）のややまとまった分布が見えるほかは、ほぼ全域でヘクサンボ類（その音声変化形・下略形等であるヘッサンボ、エクサンボ、ヘクサ、クサンボ、ヘクサンムシ、ヘクソ、クサムシ、クサヤ）が分布している。分布から見て、当該地域の「かめ虫」の呼称としては、このヘクサンボが古い形であろう。ヘクサンボとは「屁の臭い坊（主）」の意であろう。それが、後に郷谷川・滓上川の下流域で「屁をこく虫」「屁をたれる虫」の解釈を新たに生み、ヘーコキムシ類が分布することになったと思

図10

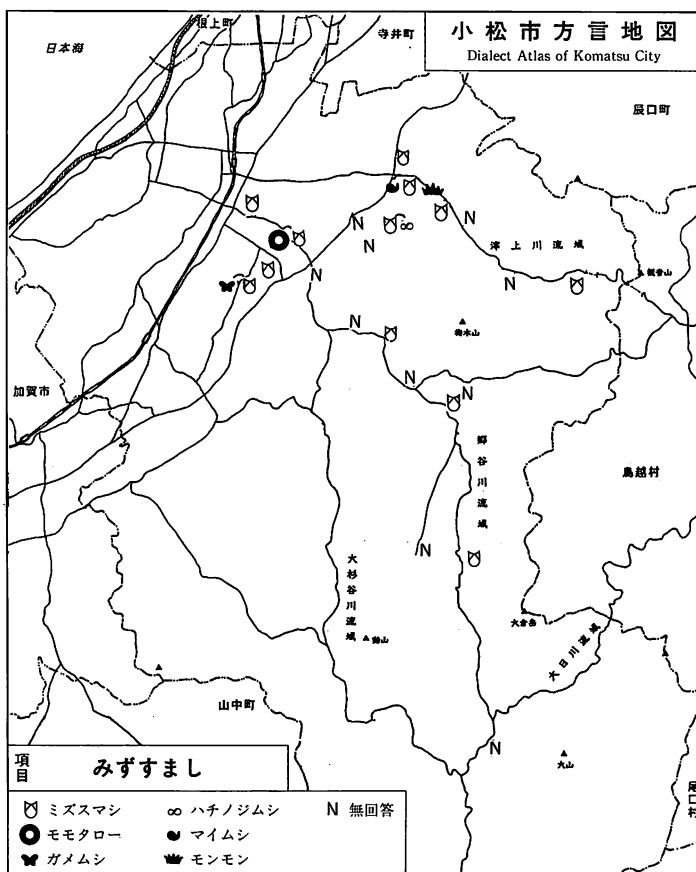
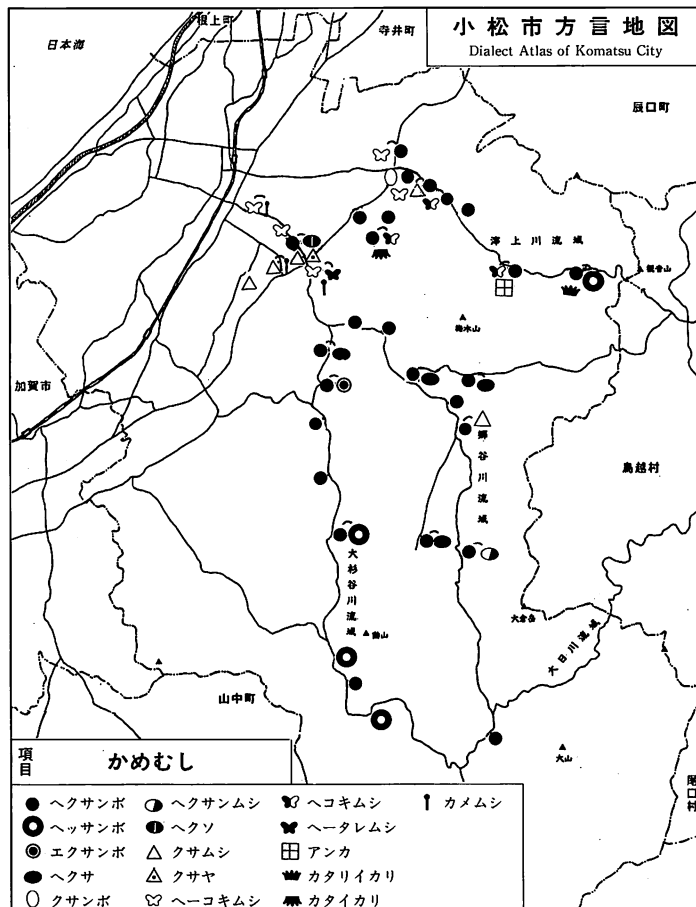


図11



われる。図11では、ほかにカタリイカリ（中ノ峠）、カタイカリ（大野）という呼称も見られるが、これは「かめ虫」の肩を怒らせたような形に注目して命名されたものかもしれない。

7.10 蛇の抜け殻

図12ではそれほど多くの方言形は見られない。キヌ、キン、それにキンからの音声変化形と考えられるケンの分布がほとんどで、カワ、カラ、ヌケガラはわずかな地点に点々と見えるのみである。

一部の話者の説明にもあったが、本来「蛇の抜け殻」を蛇の衣服に見立てて「蛇の衣^{きぬ}」と言っていたものが、音声変化形としてのキンを生み、キンに変化した時点で「衣^{きぬ}」との語源が意識しにくくなって、さらにケンに変化し、それが当該地域で広く分布する結果になったと思われる。沖縄の首里方言などで衣服のことをチン（キヌからの変化）と言うのに似ている。

次は人体に関係するものを2つ取り上げる。

7.11 つむじ（旋毛）

一般に後頭部の頂上付近にある毛の渦巻いた部分の名称の分布である（図13）。

大杉谷川流域の上流域と郷谷川中流域の沢にズイ、ズリ、ズコ、ズイダレ（ズオ、ズンノも同類か）といった方言形が分布している。滓上川上流部の中ノ峠のイジは加賀南部地方のところどころに分布の見える形である。他の地点にはチリが広い範囲に分布している。

チリは小松市の北の辰口町、寺井町、川北町などを含め、能登地方にまで広く分布する石川県内の「つむじ」方言の代表とも言える形である。チリの分布域の中では、チリからの音声変化形と考えられるチジが見える。滓上川上流部の中ノ

図12

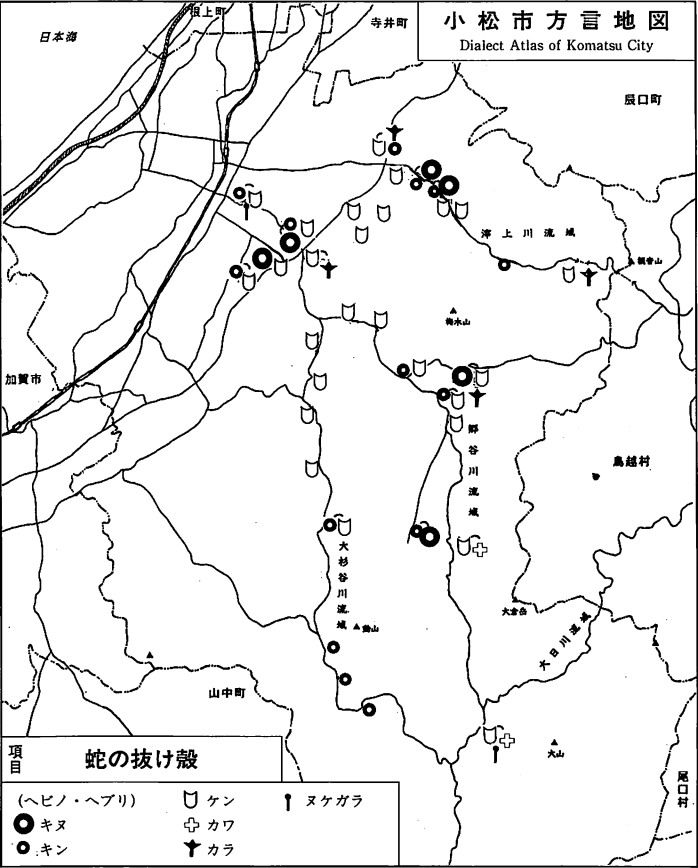
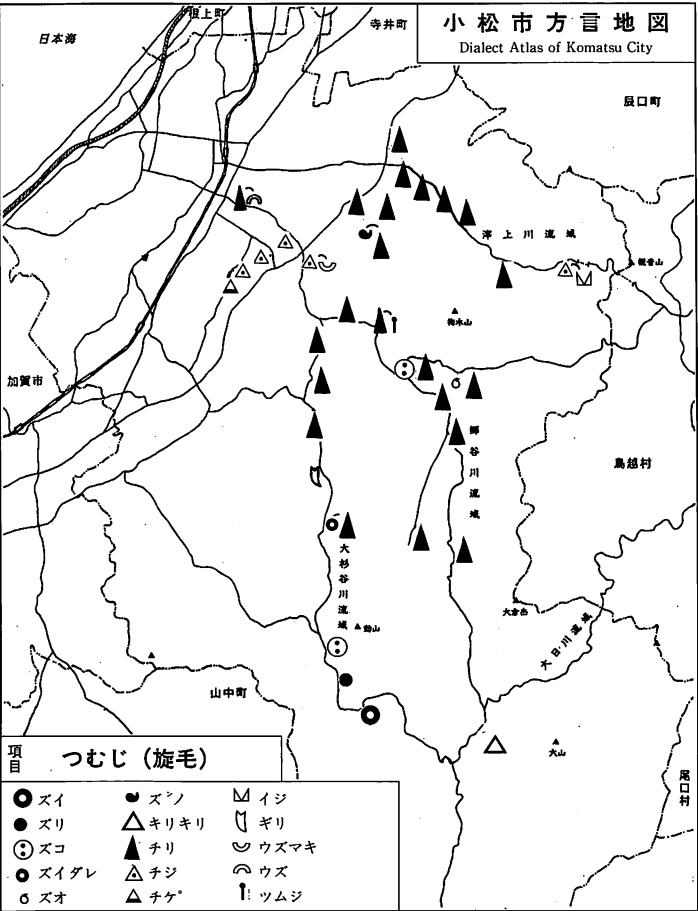


図13



峠のチジと、郷谷川下流域の東山、本江、蓮代寺、三谷のチジは、両地域で偶然チリからチジへの同じ変化が起こったものであろう。なお、大日川上流部の丸山のみに見えるキリは、チリ以前の古い方言形の残存ではないかと考えている。音声変化の順序としてはキリ>チリ>チジの蓋然性が高いからである。『日本言語地図』によれば、キリに似たギリ(図13でも上り江でギリが聞かれた)やギリギリは、近畿地方を中心に西は中国地方から九州地方、東は北陸地方に広く分布の見える形である。当該地域のキリ、チリ、チジもこれらギリ、ギリギリと同じ類の方言形と見ることができる。

大杉谷川上流域を中心とするズイの類は、その分布からチリよりも古い方言形と考えられるが、全国的には他にあまり例が見られず、当該地域で独自に発生したものである可能性が高い。

7.12 ものもらい(麦粒腫)

「ものもらい」とは、まぶたの縁に小さくできる腫れもののことである。

分布図(図14)を見ると、大杉谷川最上流部と大日川上流部の丸山に分布するメブッター類(メブッター、メブッテ、ネブッター、ホッテ)と、他の広い範囲に分布するメモライ類(メモライ、およびそれからの音声変化形エモライ、イモライ、メモリ、イモリ)の2つの勢力が確認できる。

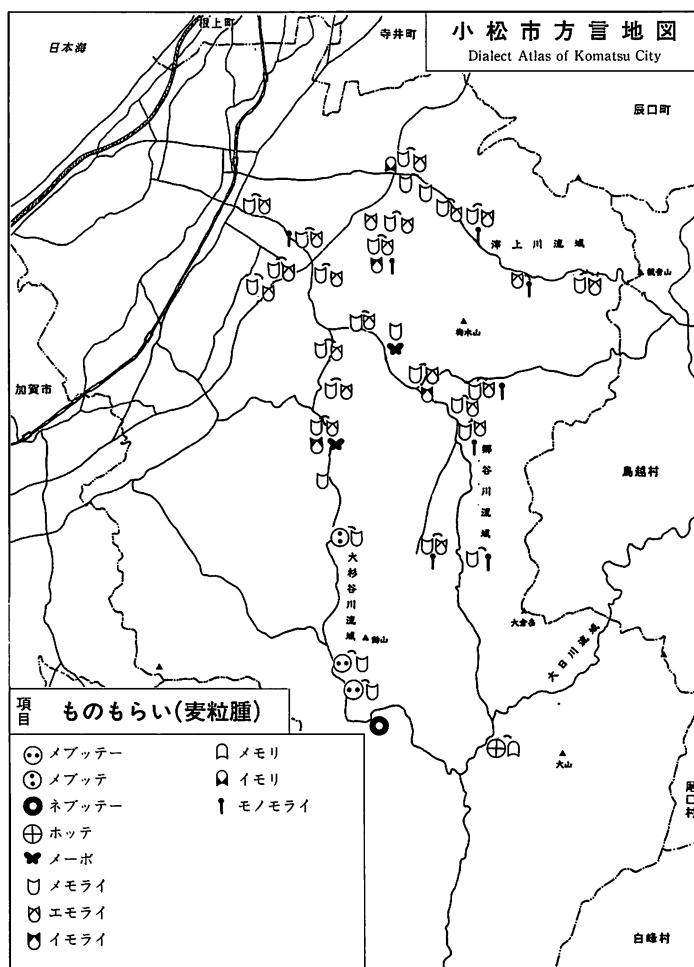
このうちメブッター類は、『日本言語地図』でも全国的に広い分布が確認できるメボイト(目陪堂)と同じ類の方言形と考えられ、メボイトからメブッターに、ホイト(「陪堂」<乞食の意>)からホッテに変化したものであろう。分布から見て明らかにメモライ類よりも古い分布の残存である。

一方、図14で広い分布が確認できるメモライ類は、福井県北部から当該地域を含む石川県加賀地方、そして富山県にかけて広く分布する北陸地方共通語とも言えるものである。

ところで、調査では「ものもらい」を治すための民間治療法の伝承内容もあわせて尋ねた。それによると、大日川上流部の丸山、郷谷川中・上流部の尾小屋、西俣、波佐羅、松岡、沢、金野、本江、大杉谷川上流部の大杉町、そして湊上川上流部の中ノ峠、麦口に「火で温めた木やセルロイドの櫛でくものもらいを>撫でると治る」といった伝承が分布する。また、当該地域のほぼ全域には、「藁の芯(ヌイコ)を結び、言葉を唱えて火にくべてパチンと音がすると治る」といった伝承が分布している。分布状況から見て、周辺部や山間地に聞かれる前者の伝承が古く、のちに後者の伝承が新しく生まれたものであろう。後者の伝承にともなう唱え言葉には次のようなものがある(荒木田の例)。

ワリヤ ナニ ククル、エモライ ククル、エモライ ククルカナラ シッカリ ククレ

図14



(お前は何を^く括る。エモライ<ものもらい>を括る。エモライを括るのならしっかり括れ。)

地点によって、この唱え言葉には微妙な違いが見られるものの、その内容はほぼ共通している。このような言葉を唱えながら、藁の芯を結んだものを火にくべるとパチンと音がして治るというのである。面白いのは、小松の町部に近いいくつかの地点（金平、東山、蓮代寺、荒木田、中海）では、藁が日常生活から次第に縁遠くなってきたためか、藁の芯でなく糸を使うとの回答が得られている点である。生活形態の変化がこのような伝承の中身まで変えていくことになるのである。

では、以下最後に「いろり(囲炉裏)」「かみなり」「書かなかった(打消過去表現)」の3枚の地図を取り上げる。

7.13 いろり(囲炉裏)

今や田舎の家からもほとんど消え去ってしまった「いろり」の呼称の分布(図15)である。

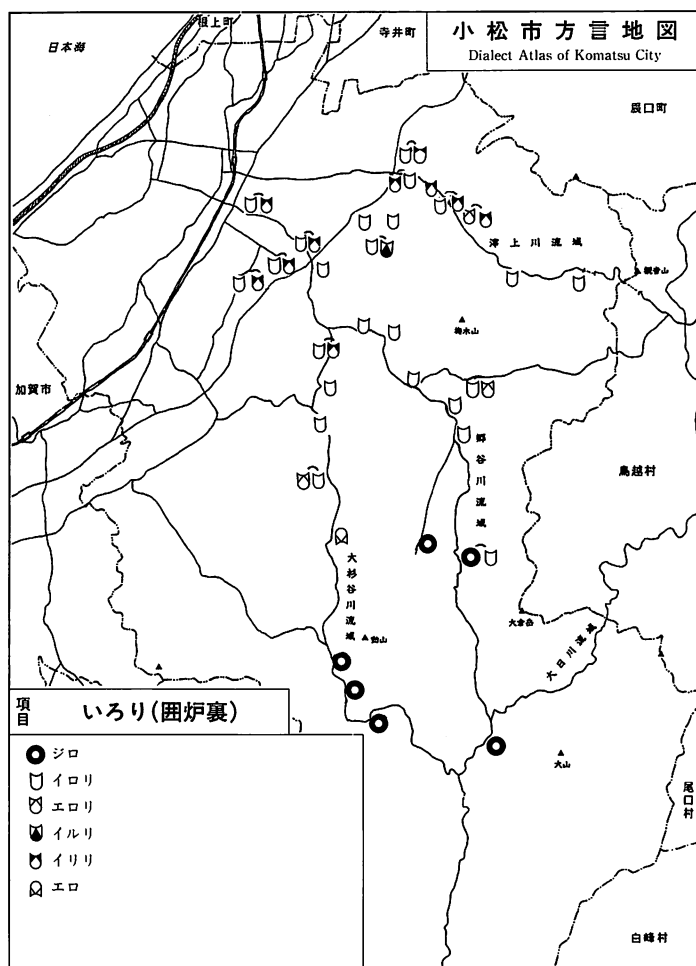
大杉谷川上流部の大杉町3地点と大日川上流部の丸山、そして郷谷川上流部の尾小屋と西俣にジロが分布する。それ以外の地域ではいろり類(いろりからの音声変化形と見られるエロリ、イルリ、イリリ、エロ)の広い分布が確認できる。

このうち、ジロは白山麓の白峰村などにも分布する古い語形であり、図15の分布状況は、いわゆる山間の地に古形と思われるジロが分布する典型的な周囲分布と言えるものである。

いろり類では、滓上川および郷谷川の流域にイリリのかなりまとまった分布が見える。いろりの語末の母音[i]がいろりの口の母音[o]に影響を与え、逆行同化を起こした形であろう。

なお、赤瀬町のエロはもしかすると古形のジロとエロリが併存したために混交形として生じたものかもしれない。

図15



7.14 かみなり(雷)

図16では、いわゆる共通語形と一致するカミナリ(カンナリ、カミナル、カミを含む)の類と、ドンドカミ類の2つの勢力の分布が見られる。

両者の新古関係については、カミナリ類とドンドカミ類の両形を答えた話者の多くが、ドンドカミ類の方が古い言い方と答えている。

ドンドカミ類のドンド、ドンドンとは雷の音の形容、カミはもちろん神であろう。冬、雪の降る頃に地響きを立てんばかりに鳴る北陸の雷の音は、ドンド、ドンドンと形容するにふさわしいものである。

図16では、他に大日川上流部の丸山にライサマ、カンバラの両形が聞かれる。話者の内省によれば、

ライサマはめったに使わない古い言い方で、カンバラの方をよく使うとのこと。ライサマは「雷様」であろう。ライサマとカンバラが、かつて当該地域に広く分布していたものの名残なのか、丸山で独自に生まれたものなのか、この分布からだけでは判断できないが、『日本言語地図』ではライサマが東北地方の太平洋側から関東地方北部にかけての広い地域と、岐阜の一部にも分布している。もしかするとライサマは、ドンドカミ類以前に当該地域に分布した古い方言形なのかもしれない。

7.15 書かなかった(打消過去表現)

最後に文法事象の分布を一つ見ることにする。図17は「書かなかった」という打消過去の表現に関する分布である。

今回の小松市における言語地理学的調査には、文法、表現法関係の項目も加えてあるが、特に文法項目は確認(むしろ全域が同じようであることを確認すること)の目的で入れたものが多く、小松市程度の地理的範囲内で地域差の見られる文法事象はほとんどないと予想された。しかし、そんな中でわずかに地域差の確認できるものもある。その1つが打消過去の表現の分布である。

図17では、カカナング、カカング、カカンカッタの3つの表現形の分布が確認できる。

外からの人の入り込みが多く比較的共通語化が進んでいる尾小屋と他の2地点で分布の見えるカカンカッタの～ンカッタは、見ンカッタ、寝ンカッタのようにも使われ、現在西日本全体に広まりつつある西日本共通語とも言える新方言形である。共通語の～ナカッタの干渉を受けて生じたネオ方言とも言われる。

一方、大杉谷川上流部や大日川上流部の丸山その他に見えるカカナングの～ナ

図16

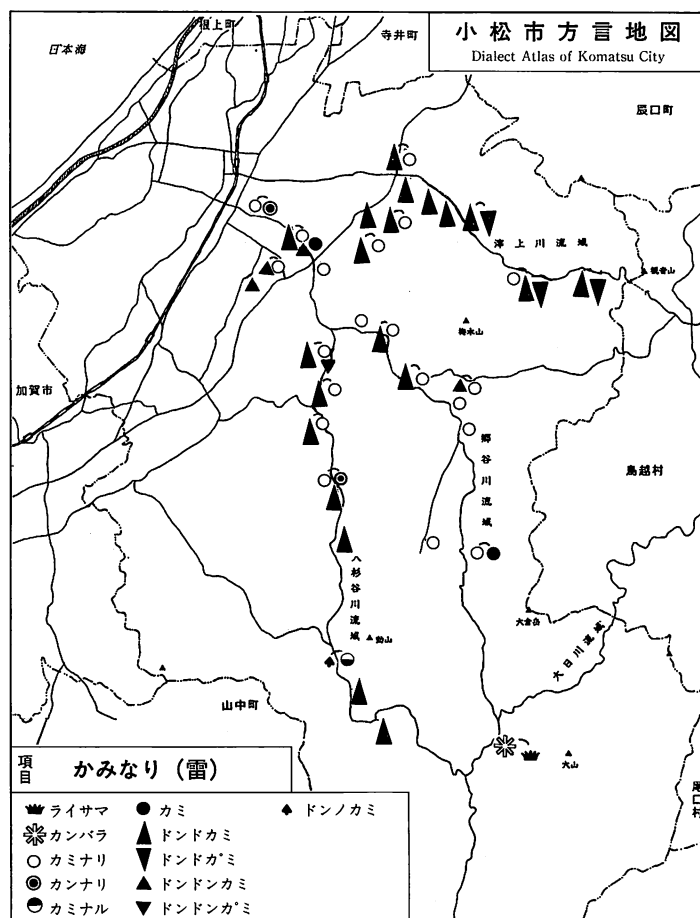
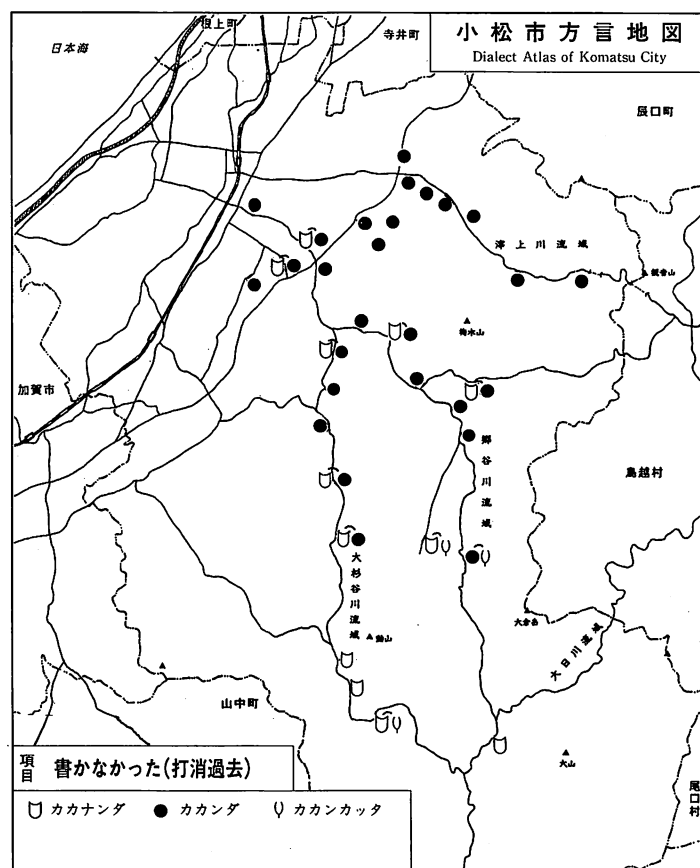


図17



ングは、近畿地方を中心として北陸地方にも広く分布する形である。分布からは、当該地域にも本来この～ナングが広く分布していたが、後に～ナングのナを落としたカカングの～ングという形が広まったと考えられる。同じ加賀地方でも金沢市などでは今も高年層を中心に～ナングが用いられているが、小松市をはじめ辰口町、鶴来町などでは～ングに変化していて、それがこれらの地域の特徴的表現の一つになっている。

8. おわりに

以上、小松市立博物館方言調査委員会の委託を受けて昨年度に引き続き行なった小松市方言調査の2年度目の報告を終える。本稿では、郷谷川流域と湊上川流域の方言の概要を郷谷川上流部に位置する尾小屋町方言を中心に報告し、また、昨年度から継続している言語地理学的調査の結果をもとに、小松市東部地域の方言分布のいくつかについて言語地理学的考察を試みた。紙数はかなり多くなったが、内容的にはまだまだ十分な記述とは言えないものである。今後少しでも補充調査を行ない、小松市全域の調査を終えた後に予定している最終報告書で補完できればと考えている。

【主要参考文献】

- 岩井隆盛（1961）「方言の実態と共通語化の問題点 富山・石川」、『方言学講座 第3巻 西部方言』、東京堂出版）
- 加藤和夫（1992）「石川県辰口方言の動態—十年間の変化と世代差」、『金沢大学 語学・文学研究』第21号、金沢大学教育学部国語国文学会）
- 加藤和夫（1995）「石川県能美郡川北町の生活 言葉」、『川北町史 第一巻 自然・生活編』、川北町役場
- 加藤和夫（1996）「白山麓白峰方言の変容と方言意識」、『平山輝男博士米寿記念論集 日本語研究諸領域の視点 上巻』、明治書院
- 加藤和夫（1997）「石川県小松市大杉谷川流域の方言」、『小松市立博物館紀要』33、小松市立博物館
- 川本栄一郎（1978）「加賀市の方言」、『加賀市史 通史 上巻』、加賀市役所
- 川本栄一郎（1983）「石川県の方言」、『講座方言学6 中部地方の方言』、国書刊行会
- 国立国語研究所（1966～1974）『日本言語地図』全6巻 大蔵省印刷局
- 佐藤 茂（1983）「辰口町のことば」、『辰口町史 第一巻 自然・民俗・言語編』、辰口町役場 *言語地図の作成および「辰口町方言の動詞活用表と解説」を筆者加藤が担当
- 新田哲夫（1985）「加賀地方における2モーラ名詞アクセントの変遷」、『国語学』140集、武蔵野書院

【追記】

前稿、加藤和夫(1997)「石川県小松市大杉谷川流域の方言」の中に以下の誤植等がありました。ご訂正下さい。

頁・行	誤	正
2頁・8行	方言に関する記述としては、	方言に関する記述としては、
4頁・表1	to ta ye	to ta te
9頁・33行	/g/	/ŋ/
14頁・20行	テントバ むささび	テントバ てん(貂)
15頁・33行	金沢でいうカタハのことか。	和名ウワバミソウ。別名ミズナ。
25頁・16行	アテコスル〔動・サ〕	アテコスル〔動・五〕